
東方信仰記

高二病

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方信仰記

【Nコード】

N1462V

【作者名】

高二病

【あらすじ】

主人公 守屋司貴は普通の人間。強いて言うならば神様が見える程度の能力、だった。しかし、日常とはさも当たり前のように塗りかえられていく。

主人公はチート。駄文。それでもよろしければどうぞ。

9月4日追記、一部の話にて多少の改変をしました。

日常

「ありがとうございました」

授業終了のチャイムと共に声が教室に響く。

退屈、その二文字が俺、守屋司貴の頭を埋め尽くしている。何故か、それは自分には友人と呼べる存在はいない。故に高校生らしく遊びに行くなんてことはない。

それは俺が、嫌われ者だからである。別に俺が特別何かした訳ではない。そう、「俺は」何もしていないのだが……………

「司貴さん！」

「……ほんと、元気だよな」

俺は声のする方を見ながら、相手に聞こえないようにつぶやく。整った制服、そして緑色の髪、そして輝く笑顔。彼女、東風谷早苗こそ、ある意味俺の孤立の原因といって間違いないだろう。

もともと、彼女が悪い訳ではないから何も言えない。

「どうしたんですか？ぼうつとして」

「ちよつとした現実逃避」

「なにかあったんですか？」

「んにゃ、何にも」

「じゃあ早く帰りましょうよ。今日もバイトでしょう？」

「まあね」

「すみませんね。いつも司貴さんだよりで……」

「自分の家族が食べていくために稼いで、いちいち謝られる必要なんてないんじゃない？」

少しだけ、かつこつけた様に言ってみる。

正確には家族では無いのだが。元々俺は孤児。その俺を拾ってき
たのが神社の神主、早苗の父という訳だ。ちなみに早苗は巫女さん
また養子にしたというわけでもない。ただ引き取っただけ、それだ
けである。

だからそれ故に、俺は孤立する。

それだけでは理由の説明として不足しているだろう。だからこう
付け足す。わが恩人は死に、いま、俺と早苗は世間的に二人暮らし
だと。

早苗は学園のアイドルといっても過言ではない。何せファンクラ
ブなんてものまであるらしい。だから俺は嫌われる。一番早苗に近
しいものとして。早苗は不良にまでもてる。肉体言語マジコエエ。
軽くないなしてきたけど。

ああ、父上殿。なぜ俺を養子としてくれなかった。それだけで幾
分か違ったものを……。いや、変らんか。所詮、一緒に住んでい
るだけで男の嫉妬の対象には変わりないだろう。

「すぐそう言うんですから、司貴さんは。体は壊さないで下さいよ
？」

「簡単に壊れるようには鍛えてないって」

「まあいいです。そういえば、今日は神奈子様が早く帰ってくるよ
うにと」

「神奈子様が？」

神奈子様。もとい、八坂神奈子様。神様。すんげえフランク。で
もすごい。俺達の二人暮らしが世間的っていうのは、神奈子様とも
う一人、いや、一神、洩矢諏訪子様がいるからである。

いるにはいるが、神社からは出られない、人には見えない、そし

て大酒飲み。この三つの理由ではつきりいつて威厳など最早ない。
神（笑）。

「何でも大切な話があるとか」

「仕方ない、さっさと帰るか」

そう言つて俺は、荷物を持つてさっさと出て行く。

「ああ！待つて下さいよう！」

いつも変わらない日常だった。二人で談笑しながら帰路に着き、
そこそこに働いて、家族の笑顔を見て、自分も笑う。

そういつも変わらない、そしてこれからも変わらない、そう信じて
疑わなかった。

誰が言ったのだろう——「変わらぬものなど無い」と。

移住計画

「移住しようと思う」

青い髪、背負った注連縄。この神社の二柱が内、一神、八坂神奈子である。

神様いっだって自由だ。この神奈子の発言から、司貴はそんなことを思う。

先刻、帰ってきたばかりの二人は、部屋に通された後、すぐに話を聞かされていた。

「可哀想に、神様の頭まで腐ってしまうような時代になってしまっていたというのか」

「いきなり失礼だな！おい！」

「そうですよ司貴さん！」

「早苗、こいつに言ってやれ！ガツンと！！」

「そこは、「病院が来い」、でしょう！」

「なるほどな」

「諏訪子、二人が私をいじめるよ」

そう言っただけ神奈子は、自分の隣の子供のような風貌をした神、洩矢諏訪子に泣きつく。

「二人ともよしなよ、神奈子の暴走なんて今さらじゃないか」

「ブルータス、お前もか」

神奈子に集中砲火。神様なのにいじられキャラとはこれいかに。そろそろ飽きてきたので雑談をぶった切ってみる。

「神奈子様、移住とは？何時、何処に、そして何故？というよりどうやって？」

「一気に聞くな、一気に」

「結論しか伝えてない貴方が悪い」

「まあいい、長くなりそうだからな、早苗、茶でも入れてきてくれ」
「はいわかりました」

そう言いながら、早苗は席を立つ。

「俺も手伝うよ」

後を追うように俺も立ちあがる。

二人がいなくなった後で、神奈子と諏訪子はこんな話をしていた。

「いいの？無理にこんな急じゃなかったって」

「急なんかじゃないだろうに、前から計画していたことだろう？・・・
・情に流されて遅れていただけじゃないか」

「本当に、神奈子はそれでいいの？神奈子だって本当は・・・」

諏訪子の目は悲しげ、というよりも寂しげだった。

「——死なれるよりはいい、そう」

——たとえ二度と会えなくとも。

湯呑をもって部屋に戻ってきた時、雰囲気が180度反転していた。
部屋にいたのは先程までのふざけきった御二柱ではなくて。

——長い時間を生きてきた。それ相応の顔つきをしたまっ
たく別の存在だった。

さすがにこの空気に対して、平常心でいられるほど俺は強くはない。
だから早目に話を始めさせようとする。否、終わらせようだろう。
「神奈子様、説明してください。」

「・・・一週間後、幻想郷という場所に向かう。この神佑地と神社ごとな。なんでも人間と妖怪の共存を目指す世界らしい。そこで失われた信仰を取り戻す」

「どうやって土地の移動なんて大変なことをするというのですか？御二柱にそこまでの力はもう・・・」

早苗の疑問は当然と言えば当然。信仰がある時ならばいくらでもできることだったのだろう。しかし、それだけの力を保つだけの信仰など、今の世にあるわけがない。

「・・・協力者がいる。提案も向こうからしてきた。幻想郷の安定のためにも力を貸してほしいのだと。」

「幻想郷に行けば、私たちの力を取り戻すことができる。そしてその力を持つて幻想郷の安定を図る。要するにギブ&テイクってことよ」

「御二柱が行くと言うのなら止めはしませんかね」

俺は自分の素直な気持ちを伝える。実際止める理由はないはず。そう思っていた。

「私も賛成です」

早苗も同意している。ならこれで話はまとまった。そう思っていた。

「では司貴。お前にはここを出て行ってもらう」

待て。いきなり話の流れが読めない。今何と言った。ここから出て行けと。そう言ったのか。

「神奈子様、それはどういうことですか！」

我を失っている俺に代わって、早苗が神奈子を問い詰めている。

「・・・」

「神奈子様、答えて下さい！」

神奈子は口を開こうとしない。いや、言つのもつらいそんな顔をしている。

「神奈子さ、私が代わりに説明するよ」

遮って声を出したのは諏訪子だった。

さっきの空気の重さはこのせいだったのかもしれない。いくら神様が自由だといっても、いきなり今まで一緒にすごしてきたものと別れられるほど楽観的ではない。

だからこそ俺は問う。

「何で俺が出て行かないといけないんですか」

「あなたは早苗に勝てる？」

諏訪子は冷たく、司貴に問いかける。

「それは・・・」

俺は答えられない。簡単に答えるならばNOだ。勝ち目など無い。人間として強い筋力を持っても、霊力などでそれを補い、空を飛び、辺り一帯に攻撃する弾幕を張る。そんな相手に敵うはずもない。

「そう、司貴はちゃんと自分の力量を理解しているみたいだね」

そう言って諏訪子は感心したように頷く。だが、

「司貴さんが私に勝てないからって何だって言うんですか！」

早苗、庇ってくれるのは分かるけど、声を大にして勝てないって言わないで、一応俺男なのよ？プライドなんてないに等しいね、これは。

諏訪子は飽くまで冷静に返す。

「早苗、あんたに勝てないやつが幻想郷に行ってそうそう生き残れるとも思う？」

「そんなの私が守って見せます！」

言い切ったよ、早苗。男が女に言ったらフラグが立ちそうなくさいセリフだぜ！あいにく逆だけだな！！（泣）

「甘い、やっぱり早苗は甘い。」

話の輪から外れていた神奈子が言い放つ。

「何が甘いと「お前はまだ弱いんだよ！早苗！！」」

泣いていた。神ともあるうものが、仕えるものを前にして。

「あんたで庇える程度なら、置いていくなんてはなから言わないさ！それだけ向こうには危険なレベルの妖怪がいるんだよ！！」

お互い、もう泣きそうだ。諏訪子はもはやまともな思考などできていないのだろう。

「だったら・・・」

「もういい、早苗」

だったら俺が譲ればいい。もともと居候なのだから。

「俺は幻想郷に行かず、こちらに残ります。」

「司貴さん！？」

これがベストな選択肢だと思う。こんなことで、守矢神社の中に亀裂を生む必要など無い。

「司貴さんはそれでいいんですか！？」

さっきまで強気だったのにもう泣いているのか。泣きじゃくる早苗の顔はもうぐちゃぐちゃだ。

——それでいいのかだって？そんなはずがない。だから俺は条件を出す。

「早苗に勝てないから連れて行かないというのなら
やってやるうじゃないか。人の身で神を超えろという偉業を
——」

移住計画（後書き）

作「この作品を見てくれ、こいつをどう思う？」

ワラキア「駄作！」

作「（´・ω・｀）」

第2話です。急展開なう。

まだ力を持たない主人公。一週間で早苗に勝つ？

ハツハツハ、御冗談を。普通にやって勝てるわけがない。

天才とは1%の靈感と99%の努力といいますが

幻想郷においては99%の才能と1%の誰でも持つてる霊力って感じですからね

（努力してそうな人もいるけど）

というわけで次回！主人公強化！！　　するといいなあ・・・

奇跡は与えられん

「鬱だ死のう・・・」

御二柱に啖呵を切って三日。学校には体調を崩したとうその連絡をいれ、家で修業に励んでいる。励んでいるのだが。

「七日で今まで修業を積んで来た早苗に勝つか」

どう考えても無茶である。体は鍛えている。弾幕を見切るだけの目も持っている。

だがそれ止まりである。

「見えてもかわせないんじゃない意味ないよなあ」

それで済めばまだ幾分かマシである。体を鍛えてかわせるようにする。それで済む可能性はある。しかし、

「かわしても的が空じゃあなあ」

こればかりはどうしようもない。弾幕も使えず、空も飛べない。回避ができて攻撃できる可能性が0%なのである。実際問題、目の前にいたところで司貴が早苗に拳を振るえるわけがないのだが。つまり、今必要なのは、

――戦わずして勝利を確信できるだけの圧倒的な力である。

しかしそんなものを手に入れるのは、おおそ人間のスペックでは不可能である。

「優劣を競うのなら、腕の一本や二本、増やす覚悟が必要だろう？
ってか？

いや、人間やめたいわけじゃないけどさ」

どうも焦っているようだと言息を吐く。しかし時間の無いのも事実。

目下の目標は飛ぶ技術を身につけること。

理論は頭に叩き込んだ。おのれに霊力があるのもわかっている。

あとは、

「己れを信じる、今まで気にしたこと無かったんだけどな」

三日前の一件の、早苗の顔を改めて思い出す。

「・・・女を泣かせてるってのに、簡単に諦められるわけがないよな」

御二柱は縁側からその特訓の様子を見守り続けていた。

「司貴、あそこまで体を酷使してたら・・・」

すでに霊力の使い過ぎで、司貴の体にはガタがきている。

「あいつはそうでもないと言早苗には勝てん。それを理解してるんだろっつ。」

お前だって分かってるんだろう、諏訪子。」

「そうだけど」

いつでも一緒にいた二人を見続けてきた。それを知っているものに、あの二人を引き裂くことを、心から望む者がいるはずもなかった。

「司貴」

外にいる司貴に諏訪子が声をかける。

「ぜったい、諦めるんじゃないよ」

「何を今更」

勝てとは言わない、だから私は願う。

——もしこの世に望みをかなえるだけの力を持つ神がいるならば

彼の願いをかなえてくれ、と——

さらに三日、すでに幻想郷に向かう日まで後わずか一日。
しかし司貴は、何も掴むことはできていなかった。

物陰には学校から帰ってきた早苗の気配がした。

最低限、霊力を感じる程度はできるようになったようだ。

「出てきなよ」

そういつて、早苗をこちらに呼ぶ。

「気づいてたんですね」

「なんとなく、だけどな」

悩むように頭をかきながら、司貴は言う。

「やっぱり私が加奈子様を！」

「はいストップ」

先走ろうとする早苗の腕を掴んで、引き留める。

「放して下さい、今ならまだ・・・」

「約束は約束だ。ここで諦めるぐらいなら端からついていくなんて
言わないさ、それに、」

「それに？」

司貴は笑顔で言う。追い込まれているはずなのに、それを感じさせないように。

「おれは絶対付いていく。必ずだ」

血縁すらない俺の家族を、簡単に失ってたまるか。

司貴の目は、死んではいなかった。そして、
「約束、ですよ」
早苗もそれに応える。

――奇跡は信じるからこそ与えられる。

その夜、すでに夜は更け、誰もが寝静まった頃。
誰もが予想だにせぬ奇跡は舞い降りる。

「何処だ此処？」

広く、それでいて何もない、そんな場所に司貴は一人でいた。

「修行も一応弾幕、というか弾一発だせるようになったから、切り上げて寝たはずなんだが」

見覚えのない景色、そもそも世界にあるのかどうかすらあやしいほどの広大な世界。

「あれか？力を使いすぎて頭がイカレたか？」

「何を言っているか知らんが、こちらに気づいてもらいたいものだな」

司貴がとつさに振り返ると、そこには、銀髪で、なぜか半裸の男が立っていた。

「ありえん（笑）」

「人、いや、神を見ていきなり失礼な。」

あろうことかこの半裸、神を名乗り始めた。

「いかん、力を求めるあまり、夢にまで神様が、救われない俺」

「貴様、神を信じているのではないのか？」

「いや、信じてるけど、ねえ」

改めて男を見る。

「ない、ない、絶対ない。こいつが神とかまじでないって」

「せつかく、力を授けてやろうと思ってきたというのに。仕方ない、だれか別の者に・・・」「神様何なりとお申し付けを！！！」・・・

存外現金だな、貴様」

現金と言われようが汚いと言われようが、欲しいものは欲しいのである。

人間の欲だね。欲なら仕方ないね。

「・・・まあいい、もともとこの力を渡すためにここまで出向いた

のだしな」

自称神がつぶやく。そこに違和感を覚える。

「なぜ俺に？前から決まっていたような言い方ですけど」

「今の世に、虚像の神ではない、全く偽ることのない神の姿を信仰するものなどいないといっても過言ではないと思わないか？」

なるほど、神の信仰の深い国なんていくらでもあるだろう。だがそれは、歴史として書物などに残された姿であろう。そうではない、今の世に生きる神を、俺は二人も知っている。

「貴様になら託せるだろう。世界の始まりから存在する私のすべてを」

オイイ！？何かこの神様が爆弾発言しなかったか！？

「世界の始まりってどういうことだよ！？」

俺は混乱しながらも神に問う。すると神は、落ち着いた様子で答える。

「伝えてなかったか？我はこの世界、いや宇宙を作った神。所謂創造神だ」

嘘だと言つてよバーニイ！！そして夢よ覚めろ。

「信じぬのは勝手だが、力だけは授けさせてもらうぞ。いい加減この力にも飽きたのでな」

「飽きたって、本当に神かよ」

「だから神の力すべてを貴様に継いでもらう」

マジか。圧倒的な力を求めたらこれだよ。やっぱ夢だろこれ。

「同族の好というやつだ。望みを叶えるのも悪くない。だが、」

創造神は忠告を告げる。引き返す最後のチャンスを。

「貴様に大いなる力を持つ覚悟はあるか。また、それを私利私欲に使わぬという誓いをここに立てる。でなければ渡せん」

その問いに対して、俺は、ニヤリと笑みを返す。

「当然だ、俺が力の欲しかった龍なんて、もともとちっぽけな理由

なんだからな」

「いいだろう、貴様「司貴だ」・・・司貴よ、くれてやろう、我が力のすべてを！」

そういったとたんに司貴の体が輝き始める。

「力のことは目覚めたときに、直接頭の中に伝わる。・・・後は任せたぞ」

そう言っ て神は立ち去る。

目覚めたとき頭によぎった能力の説明は――

「すべてを司る程度の能力」

とんでもない物だったのかも知れない。

奇跡は与えられん（後書き）

作「今回の評価は!？」

ワラキー「life led break down , bec
kon for the fiction! 駄作!」
作「AAD使つてまで否定されたー!（!」□」（「

第三話、無理やりすぎる。

仕方ない主人公チートにするためならね。

諏訪子様の神頼み。叶えてくれるっていう。

ちなみに名無しの創造神のイメージはもろオロチです。
KOF知ってる人いんのこの小説に？

作「ワラキアさん。あなたの出演が決まりましたよ!」

ワラキー「蛮脳八改革シ衆生コレニ賛同スルコト一千年、

学ビ食シ生カシ殺シ称エル事サラニ一千年……!」

麗シキカナ、毒素ツイニ四肢ヲ浸シ汝ヲ

畜生へ進化進化進化セシメン……!」

作「ワラキアさんが楽しそうで何よりです」

開かれた扉（前書き）

素早く投稿したでござる サッ（ゝ・ω・ゝ≡・ω・ゝ）サッ

開かれた扉

能力の内容が伝わってきた俺が周りを見渡すと――

「――起きたか」
神様に囲まれていたでござる。

着替えた後、早速だが呼び出される。

俺なんかしたつけ？まだ能力を手に入れたこと、伝えてない筈なのに。

「単刀直入に聞く。お前の纏っているその神力しんりょくはなんだ。」
神力とは、要するに、人間にとっての霊力、妖怪にとっての妖力に当たるものらしい。

なるほど、その神力が駄々漏れだったか。
「実はかくかくしかじかで」

「まるまるつまつまつてわけか、ふーん、じゃない何で司貴がそんなことになってるんだ!？」

「いくら勝てないからって、神様蹴落としてまで力を奪うなんて、いつからそんなにグレちゃったの？」

「そんな事をするような子に育てた覚えはないよおお!!司貴イイー!!!」

「よし、落ち着けあんたら。そして人の話をちゃんと聞け。グレてもなけりゃ奪ってもないわ!つかどうやって奪うんだよ!？」

神奈子様はなんか混乱してるっぽい。諏訪子様は・・・油注いでるだけだな、あれは。

「よし、一発殴らせな」

「だが断る」

あんたのは一発はオンバシラでだろうが。んなもんくらってられるか。

結局、神奈子様が落ち着くまでに1時間を要した。

「・・・つまりその力は、正当に受け継いだものなんだな」

「そうなりますかね、なんか同族がどうたら言ってたんですけど、

何か知りません？」

その時、諏訪子様が何かに気づいたような素振をしていたのは気のせいだったのかも知れない

「まあ何にせよその力、何ができるのか、把握していかないかね」

「何ができるよりも、何ができないのやら。さっぱりなんですよね」

この能力でできることは簡単に分けるならば二つである。

一つ目に、自分が想像した能力をそのままに使う。要するにゲームのあんな技やこんな技までコピーできる。俺、ゲーム知識無いけど。

二つ目に、相手の能力に関する情報すべてを読み取る。正直こっちもやばい。相手の能力を分析したうえで、全く同じ技が出せる。

「でも」

「これならねえ」

「認めてあげるしかない、よね？」

「ああ、もちろんだ」

——ともに幻想郷へ——

ちなみに今は朝の午前四時。当前早苗はまだ起きてもいなかった。

早苗は少々憂鬱だった。いや、大分だろうか。

「今日で司貴さんとお別れになるかもしれないんだ・・・」

昨日の訓練も見ていて、確かにすごい成長率だった。

でもそこまで、成長が速いだけで私には到底追いつく気配もなかった。

「今日が最後、か・・・なら・・・」

早苗にとつて、司貴はいつしか特別な存在だった。

何かあったら駆けつけて、真っ先に心配するのは自分のこと。前になぜか不良に絡まれた時もそうだ。（注意：絡まれた理由は早苗です）

——チャンスは今日しかない。

そう言い聞かせると早苗は司貴の部屋の前にいた。
そして戸を開け勇気を振り絞る。

「司貴さん、お時間は「早苗」どうしたの」、「!？」
顔をあげるとそこには完全に酔っぱらっている御二柱の姿が。

部屋を確認しても間違いなく司貴の部屋だった。早苗がどうして
いいのか分からずにいると。

「早苗、ヘルプミー」

酒盛りをさせられている司貴の姿があった。

「どうしたんですか、これは!」

誰だって混乱する。朝から想い人の部屋に、酔っ払い二人がいれば誰だって混乱する。

司貴に詰め寄って状況を確認しようとする早苗。だが、司貴はこの惨状においても冷静だった。

「いやさ、俺が幻想郷に行けることが決まったから「お祝いだー」
って」

「早苗も飲めよ」

「何を言ってるんですか、朝から飲んでるなんて、全くうちの神様
たちは、だいたい司貴さんが幻想郷に行くくらいでそんなに飲む必要
はないんです!」

「ほんとそうだよな」

そう言いながら司貴は注いであったジュースを飲み干す。

「だいたい司貴さんをこっちにおいて行こうというのが間違いなん
です。そもそも・・・って、え？」

何かを私は聞き逃していなかっただろうか。

「・・・さっきなんていいました？」

「そうだよなー、って」

「もつと前です!」

「お祝いだー」

「もう少し！」

「おれが幻想郷に行くことが決まった」

・

・

・

・

・

「な、なんですってー！！！」

「よし、いいリアクションだ。」

司貴さんがなんかΣd(、・ω・、)ってやってる。

頭が回らない。なんで、どうやって、どんな方法であの二人にOKを出させた？

まさか

「酔わせて言わせたわけじゃないぞ」

・ ・ ・ 先に言われてしまった。昔から心を読まれている気がする。
しかし今はそんなことどうでもいい。それよりも

「だったらどうやって——」

「奇跡、かな」

それから早苗が納得するまで、2時間かかったのは多分余談であ

る。

「うう、頭が痛い・・・」

「飲みすぎ（だつての）（です）！」
まったくこの神様は。

「ほら、ちゃんと立って！もうすぐ来るんでしょう、その協力者」

今日、正午に幻想郷から迎えが来るらしいのだ。

もっとも、この体たらくを見たら幻想郷に招こうって気も失せ

るんじゃないか？

そんなことを疑問に思っていると

——空間に裂け目ができ、そこから一人の女性が現れた。

「ご機嫌はいかがかしら、八百万の神々よ」

日傘を差したまま、たたずむ金髪の「妖艶」という言葉が似合い
そんな女性を前に司貴は、

——絶対に敵に回す場合ではない。
そう感じざるを得なかった。

ようこそ幻想郷へ

「ご機嫌はいかがかしら」

空間に裂け目を作り、そこから出てきた女性が軽く会釈する。
「初めましてお二人さん、私は八雲紫」

そして司貴を観察するかのよう見る。

「・・・貴女方以外は巫女一人と聞いていましたが。」

そのまま睨みつけてくる。

力で負けるとは思わない、しかし本能が告げる。

この人は敵に回すべきではないと。

「こいつも私たちの家族なんだ。3人も4人も変わらんだろう?」

「変わるわよ、何せこんな」

いきなり司貴の足元に空間の裂け目が開く。

抗うこともできず、そのまま裂け目に飲み込まれる。

「司貴さん!!!!」

次の瞬間、

「いきなり攻撃とは失礼な」

司貴は八雲紫の背後を取っていた。

「今までスキマに落とされて自力で出てきたものなんていないのよ?それをさも簡単に出てきた貴方が言う?・・・こんな化け物じみた能力者、幻想郷にだっていませんわ。」

「知ったことが、やっぱり俺だってあんたは敵に回したくないよ」

試されたな完全に。にしても便利だわこの能力。

「司貴、大丈夫?」

「いや、あの中思ったより怖い」

出る前に見えたのは無数の目。とにかく目だった。ホラーじゃねえか。

「司貴といったかしら？よかったじゃない前持って見る事ができて」

「前もって？」

「そうよ、だって幻想郷に行くのに通る道はあれなんだもの」
発狂しそう。

「そんなことよりも」

神奈子が紫に問いかける。

「こちら側の世界の後始末は、当然用意してあるんだろうな」

「問題ないわ。式たちにこの神社の複製を作らせておいたわ」

複製って簡単に作れるものだっけ？湖まで作ったのか？

「情報操作のほうは・・・親戚筋に引き取られたということにしたいわ。まあ、問題ないでしょう」

「むしろ今まで司貴がウチに住んでたことのほうが大問題だよねー」

「諏訪子様、今それは置いといて」

「おしゃべりはそろそろ終わりにしてくれるかしら？」

紫さんが妖力をためているのが分かる。もう始めるのか。

「ああ、それじゃあ頼む」

「では」

空間が、飲み込まれる。

その時間は数時間にも感じられるが、数分だったのかも知れない。暗闇のような空間から抜け出たとき、目に映った景色は――まるで歴史の教科書に出てきそうな、日本の過去の姿、そして自然だった。

「ここが・・・幻想郷なんですか？」

「そうね、その中でもここは妖怪の山と呼ばれる場所ね」

「とりあえず早苗はおれの腕を放してくれるかな」

「へ？」

隙間を通る際にしがみついていたのだろう。胸が当たってる。まあ役得、役得。

「あ、ああああの、ここはその何と言いますか、ほ、ほらあれですよあの」

混乱してるな！。あれはあれで面白いしかわいいからほっとこ

「それで、何でこんな場所に落とされたんですか、俺ら。というか御二柱が俺を連れてきたくなかったのってこれが理由でしょ」

実際、俺が幻想郷に来るのにあたって、人里近くなら普通に住んでるい人がいるのだから問題は無いだろう。しかしこんな、

「まるで敵地のど真ん中じゃないか」

「そのとおりよ」

紫さん。何でそんな微笑んでるんですか。しかも何、その通りって？

「だって妖怪の山の連中に話し通してないもの」

「いささか手抜きじゃないか。幻想郷の大賢者よ」

全くだよ！力無いまま無理やり来てたら、その日のうちに死体が一つだったよ。死体が残るのなんて考えない。グロイから。

「引っ越したなら、近所へのあいさつは自分たちでしてしかるべきでしょう」

「妖怪にその理屈通るのかよ」

妖怪にご近所挨拶とかまじ萎える。萎えるで済めばいいけどきつと襲われるだろ。

「妖怪の山以外は、司貴と早苗に任せるね」

「諏訪子様！？それはちょっとひどくないですか！？」

早苗の言うことは人として尤もだが、その前にお前はそいつらのいわば従者だから。

尽くすべきだろ、一応神何だし。

「「司貴、後でちょっと話がある（からね）」」

心読んでやがるこいつら。

「ではまた一週間後に。スペルカードは残していきますわ。その子たちへの説明はそちらでお願いしますわ」

「じゃあ次は異変として、だな」

異変？スペルカード？何の話だ？説明プリーズ。

紫さんが帰った後、この後の方針について説明された。

何でも一週間後に、幻想郷に侵略してきた神として悪者になるらしい。これが異変。

何でも博麗とか言う巫女さんがこの幻想郷の人間と妖怪の安定を保ってるらしい。

だから簡単に巫女を倒せる力を持った奴が現れるのは結構まずいらしい。

そして異変解決に使うのがスペルカード。便利な時代だなー。

「で、神奈子様はその巫女に負けると」

「はっはっは、何言ってるんだ司貴」

今の話の流れだったら、負けるんじゃないか、普通。

「私が本気を出して勝てなかったら負けでいいじゃないか」

ガチでやる気だー?!このひとー!!

「手えぬけよ!あんた負けんといかんのだろうが!」

川(ー、ー)「なに、気にすることはない」

「うっさい!気にしろよ!」

おれはヒートアップする。それはもう烈火の如く。

「まあまあ落ち着いてよ。神奈子だってあれでいろいろ考えてるんだから」

「あれって言うなー！！！！（泣）」

それは分かってはいるんだが、何せ神奈子様、戦闘狂っぽいところあったりするからな。ちょっと不安だわ。だいたい歳も考えずはしゃいで・・・

ドゴオオオオ！！！！

心を読まれたようだ。御柱、全弾命中。

本日の教訓

目上の者には礼儀正しく。うん、多分間違っていない。

同時刻、幻想郷とはまた別の空間に建てられた家。そこで紫と九本の尾をもつ女性が何やら話していた。

「紫さま、よろしかったのですか？あのような力の持ち主、それこそ安定どころか崩壊を呼ぶのでは？」

「そうかも知れないわね、でも」
「でも？」

紫は笑う。まるですべて見通したかのように。

「目には目を、齒に齒を、強大な力には強大な力、よ。それに面白いじゃない。」

「面白い？」

九尾の式は問う。

「何せ、人間の枠を超えてなおあの欲のなさ。ホント変わってるわよ、あの子」

そう言っつて紫は空を見上げる。

「吉と出るか凶と出るか。あの子は幻想郷に何をもたらすのかしらね」

未来はだれにも分からない。

ようこそ幻想郷へ（後書き）

作「幻想入り！やつとだぜ！！」

ワラキーが狂乱し過ぎて倒れたんで
今回はカットされません」

次回 人里に下りるよ、たぶんね

寺子屋とパチキと説教と

異変までに人里にだけ挨拶を済ませておこう、そういう形に落ち着いた。

「何で俺まで連れてくるのさ」

今は、早苗と二人で山をえっちらおっちら下りている。

だるいというか遠い。てか、今気づいたけど飛んできゃよかったんじゃない？

「仕方ないじゃないですか。神奈子様たちは天狗の頭領と話しつけてくるとかでいなくなってたし、だったら二人で人里への挨拶済ませておけばいいじゃないですか」

「どうせ布教活動しようとしてるんだろ」

「もちろんです！」

あいさつ回りと布教は違う物、だったよな？

常識にとらわれんから、この巫女は扱いづらい時がある。

「はあ、どうでもいい」

「そんなこと言わずに、さあ！」

・・・帰りは飛ぶか。

——人里に到着

そして第一印象が文明の発達が外と比べて、間違いなく遅れているということだ。

「機械とか無さげだな、これは」

「そうですね」

外から入ってきた俺たちにとってはこっちのほうの問題かも知れん。

「とりあえず、稗田家と寺子屋、どっちに行きます？」

舞えもって行くべき場所は紫に聞いておいた。

「どうでもいい」

「怒りますよ？」

「すいまえんでした……」

力を得て強くなるうが何だろうが、早苗のほうが権力的に強い。これもホントどうでもいい。

「とりあえず権力者優先って言いたいけど、寺子屋見えてるぞ」
町の中歩いてたらずぐ見つかった。子供の声がするほうに行った
ただけだ。

「見つけたのはいいけど、時間帯的にまずくね？」

現在午前10時前。どう考えても授業中だ。

「後回しにします？」

「そうだな」

「ん？お前たち見かけない顔だな。何か用か？」

話しているうちに、中から女性が出てきた。たぶんこの人が
「あなたが上白沢慧音さんで間違いないでしょうか？」

「その通りだが・・・何か用か？」

「いえ、特に用という訳では「布教活動に来ました！」オイイ？」
常識よ帰って来い、この天然のもとへ。

「あいにく今は忙しいのだが、授業合間の休憩時間なのでな」

「大丈夫！お時間はとら「黙ってる、すみません連れが失礼なことを、ただこちらに来たばかりなので顔を覚えてもらおうとおもった物で」

「ということは君達外来人か。」

さすがに教師をやっているだけあつて察しがいい。

「妖怪の山に神社を構えているものです。俺は守屋司貴、あつちで暴走してるのが風祝の東風谷早苗です。どうぞよろしく」

「この機会にあなたも神を信仰してみては・・・ってあれ、足元にスキマが」（ピチューン）

自重しやがれ風祝。ちよつとスキマで反省な、お前。

「今のは・・・八雲紫の能力じゃないか、なぜ君が？」

しまった、いきなり人に見せちまった。めんどいな。嘘が通じそうな人じゃないから誤魔化し様がない。まあ見られてもいいんだけどね。

「司貴？」

「すみません、説明するならアレが俺の能力というか・・・なんでもできるのが俺の力というか・・・」

「人の力を写し取ると言ったところか」

「それもある、ってとこですね」

「案外、まともそうに見えてそうでもなさそうだな、君は」

「よして下さいよ、俺は普通の人間です」

「君のような普通の人間がいるか」

「デスヨネー」

一刀両断とは結構傷つくな。常識人のようだがその分言葉に棘が

ありそうだ、無意識で。

「まあ、君のような人間が信じる神なら、大丈夫だろう。布教活動も頑張ったまえ」

布教活動に首突っ込む気はないけどね。でもありがたい言葉だ。

「それよりもだな．．．さつきの子、東風谷早苗といったか。君はあの子と同じ家に住んでいるのか？」

そんなこと聞いてくる理由は何だ。まあ、いつか。

「そうですね……」

「そうかそうか、なら……」

あれ、なんか怒ってね。にじり寄ってくるんですけど。怖いマジで怖い。

ゴツン。

鈍い音が響く。意識が遠のく。

「イッ
テエエエ
エエエエ
エエエエ
エエ！
！！？
？？？」

「教育的指導だ。だいたい年頃の男女が、同じ屋根の下で暮らすとは何事だ」

パチキは教育的指導じゃねえ、体罰だよ！

しかも理由それなの？というかそれ今更感があるんだけども。こっちとしては。

「聞いてるのか！」

何かやばくねえか？これは。とりあえずあいつをスキマから出し
とっ。

きつと怯えてるだろうけど。

「んじ」

そう言ってスキマを開く。思ったよりは落ち着いてた。

「じゃあとりあえず先行つてろ、早苗」

「やっと出れたって、え？」

もう一回！もう一回！てな訳で隙間に落としてさっさと送り届け

る。

たぶん落ち着いてるだろ。布教するのはとりあえずやめるぐらいには。そして俺は

「さあ、教育の始まりだ——」

——別方面でヒートアップした人を止めんな。

結局、解放されたのは2時間以上後だった。

寺子屋とパチキと説教と（後書き）

主人公はチート。

それを黙らせる早苗さんはもつとチート。

そして主人公の苗字がやつと発覚。遅い。

ぶっちゃけ発音が同じという理由で拾われてきてます、この主人公。そういう設定。

稗田家訪問は省くかも知れねえ

初戦闘（前書き）

結局稗田家はカット。

阿求ファンの方申し訳ない。

初戦闘

キングクリムゾン！生活するという過程を消し飛ばし、七日経ったという結果だけを残す！

予定通り計画が実行されることが決まった。

すでに前日に、博麗神社への宣戦布告はすんでいるらしい。そんなこととして夜襲かけられたらどうする気だったんだ。

「丁度いい所にいました司貴君。博麗の巫女はもうこちらに来ますよ」

白？天狗の犬走椋がそう言い残して飛び去る。

白？天狗さん情報アザース。

でももう視認できるんだけど

それでもって俺は、完全に見学を決め込んでいたわけだが。

「さあ、手加減してあげるから全力でかかってきなさい！」

イラッミ 何あの鴉天狗。偉そうな奴——いや幻想郷ってあんなものか。

しかし、

「いただけないな」

「……へっ?」

いきなり俺が出て行ったことで、三人は困惑しているようだ。

「神を倒してここまで来た連中に、鴉天狗程度が手加減とは片腹痛い」

「何なんですかあなたは、邪魔するならあなたも……!」

「もういい、消えろよおまえ」

吐き捨てるように言ったあと、司貴はスペルカードを発動する。

——疾風「風神少年」

次の瞬間、すでに弾幕は鴉天狗に襲いかかっていた。

「このスペルは?!」

必死に鴉天狗は回避行動をとる。だがもう遅い。

「終わりだ……!」

訳が分からないといった顔をしている鴉天狗は、すでに弾幕の餌食になっていた。

「何故……私の技を……?」

「いいからさっさと行け、報告とやらがあるんだろう」

どうも納得がいかない顔をしているが、この場は引き下がるようだ。

「——この借りは返させてもらいますよ」

そう言って少女は飛び立つ。さて、

「やお二人さん。俺は守屋司貴。すべてを司る程度の能力を持っている。君らの名前は」

「博麗霊夢よ」

「霧雨魔理沙、よろしくなんだぜ」

少々顔が引きつっている。掴みは上々か。

「二人ともよろしく、じゃあ、始めるとしようか」

——人生初の弾幕ごつこを

そう言って三人は構える。

だが、二人はすでに司貴の手のひらの上だった。

小競り合い、そう説明するのが間違いなく正しい。ただしそれは、司貴の視点から見てという物だった。

「よっ、と」

両の腕を広げ思いきり弾幕を放つ。密度こそ薄いが広範囲。それゆえにかわし辛い。

「ああ、もう厄介な弾幕ね、他の奴ならもつと見かけが派手でやすい弾幕よ！」

そういいながらも打ち返すだけの余裕があるらしい、さすがにプロフェッショナルといったところか。しかし司貴には余裕がまだあった。

「最初の戦闘なんだから大目に見てくれて、そらよ！」

完全にランダムな攻撃。当たり難いが避け難い。

「面倒な攻撃だぜ」

実際、それほど弾幕の扱いがうまいという訳ではない。

しかし霊夢と魔理沙は、この弾幕をやりづらいものとして認識している。

すべては司貴の策略通りに。

「落ちろ！」

直線的な光弾。速さは十分、だが、

「正面がから空きなんだぜ！！！」

正面安置、最初はどこかの？のようだったと思つたと、後に二人は語る。

しかし、

「甘い、

——牢獄「崩壊の魔法陣」

一か所に集められた二人を上下左右、そして正面を魔法陣が囲む

「やばっ！」

「万事休す何だぜ！」

予想出来うる罠。しかしかわせなかった。

「充填完了、ファイアー！」

魔法陣から発射されたのは極太のレーザー。マスタースパークに近いレベルのものだった。

神技「八方鬼縛陣！」

二人の周りを結界のような光が囲む。司貴の攻撃はすべて相殺されてしまった。

「おい！司貴！！ああいう逃げ場のない弾幕は反則なんだぜ！」

「何言ってるんだ。逃げ場なんていくらでもあっただろうに」

魔理沙は、さっぱりわからないという顔をしている。

確かに後方には魔法陣はなかった。だが、正面の魔法時からのレーザーが打ち抜いてくるだろう。

「なるほどね」

そういったのは霊夢だった。それを聞いて司貴は笑う。

「わかったんなら答え合わせと行こうじゃないか！」

そう言つと魔方阵がもう一度二人を囲む。

「突っ込むわよ！魔理沙！」

「合点承知だぜ！」

そう言つて二人は正面の魔法陣に突っ込む。

傍から見ればただの自殺行為だ。だが、

「正解、よくわかったな、この技の安全地点が」

正直、もう一つぐらい技を引き出せると思つてたんだが。

「逆転の発想よ、その魔法陣を通り抜けられなったら避け様がないもの」

そう、司貴の魔法陣には、発現して数秒間、全く力が込められていない。

だからこそその安全地帯だったのだ。

「中々勘がいいな、もうこのスペルは無駄ってことか」

「今度はこっちのターン何だぜ」

そう言つてこちらに弾幕を放つ。

「そいつは御免被る、・・・次は派手に力比べと行こうじゃないか」

「弾幕はパワーだぜ！」
「のるなバカ」

いやはや、ノリのいい連中だと司貴は感心する。

これでこそ自分の力の試し甲斐があるというものだ。

「いくぞ、

――終符「地上最古の砲撃」

先ほど攻撃がかわいく見えてくるような攻撃。
だが二人はひるむことなく応戦する。

霊符「夢想封印」！！！！

魔砲「ファイナルスパーク」！！！！

大技同士のぶつかり合い。

そして三つの攻撃は弾け飛んだ。相殺という形で。

司貴は至って冷静そして、

「俺の負けだ、さつさと進め」

敗北を宣言する。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！まだ私たちは一度もあなたにダメージを与えてないのよ」

霊夢は納得できてない様子。それは魔理沙も同じのようだ。

「そうだが、それにこっちは二人掛かりでしかあの技を止められなかったんだぜ。」

今決着が着くんなら司貴の勝ちだぜ」

まだ気づいてないのか、人間の本能に働きかける心理戦に。

「お前ら、違和感無かったのか？」

二人が首をかしげる。

「それほど避け難い訳でも避け難いと思ったりしなかったか？」

そう言われて二人は顔を見合す。感づいたか。

「俺はわざわざ自分の能力を明かした、お前らの恐怖をあおるために」

そう言われて霊夢が返す、

「じゃあもしかして・・・私たちは」

「冷静だと思っけていても体は反応しちまうってことだ」

二人はしてやられたという顔をしている。

「二枚目のスペル、あれだって簡単に避けれるぞ」

最初のスペルで見切りにくいというイメージを与えて置いたのが効いたな。

「結構汚いんだな、司貴って」

「勝てばよかるうなのだ！」

「はいはいもういいわ」

「じゃあさっさと行け、待ちくたびれてると思うから」

「じゃあ、また会いましょう司貴」
「じゃあなー」

二人は妖怪の山を登っていく。また会うこともあるのだろう。
そして司貴は大きな収穫を得た。

「すべてを司る、聞こえはいいが何とも不便。
できることが多いのもまた難儀、ってね。
でも、」

すべてを司る能力。

それは相手の力を読み取り、相殺する。
相手の手の内を完全に把握することで、相手に恐怖を与え、
恐怖にとらわれた相手を、強大なる力で叩きのめす。
これが司貴の考えたこの力の使い方。

嫌われそうな戦い方だな
司貴は本気で今後の戦い方に悩んだ。

初戦闘（後書き）

第7話、司貴の能力はえげつない。

しかも司貴は、相手の攻撃がこちらに通じないということを証明してみせる。

単純な大技連発もつらいがこれもえぐい。

たぶんVS早苗とVS神奈子はカットします。

私が書いてもオリキャラなしじゃ

他の作品のパクリになりそうだからね。

仕方ないね。

というわけで今回は風神録編、後日談等になると思います。

追記

主人公 スペカ説明

疾風「風神少年」

まんま文の風神少女サツとコピーしてました

牢獄「崩壊の魔法陣」

初見殺し。攻撃範囲が鬼。

ゲーム風にいえば、三方向に魔法陣が現れる。

相手基準で現れる攻撃。

終符「地上最古の砲撃」

現在進行形でラストスペル。

火力、攻撃範囲ともに優秀。

しかし直線的なのでもっぱら迎撃用。

命がけの宴会準備 前編（前書き）

今回、文章がいつも以上にひどいです。
ご注意を。

命がけの宴会準備 前編

「宴会を開くわよ!」

「帰れ、駄賢者」

戦いは終わった。早苗と神奈子が応戦したが二人共敗北。

ここまでは紫の思惑通り。これで契約は果たしたのだが

「だから、宴会開いたら大体の大御所は集まってくれるんだってば。印象良くするチャンスじゃない」

「ホントは酒が飲みたいだけでしょくに」

「当然よ!」

言い切りやがった。駄目だこの賢者、なんとかしないと。

直すなら、いやもう遅いか。

「宴会か、よしのった!」

「神奈子様!?!」

家の神もこうだったわ。

「いいじゃん司貴。楽しくやろうよ! パアツと!」

ノリノリだな。時すでに時間切れ。しかし俺にも譲れないだけの理由がある。

「金はどうするんですか!」

前よりも神社自体の収入は増えている。それでも支出の方がまだ多いのだ。

「大丈夫だ、問題ない。司貴に稼いで貰うから」

大丈夫じゃねえだろうが!!!

しかし、紫の言っている事は間違っていない。

「はあ・・・、仕方ないか。早苗、今食料と酒でもってお金はどれくらい残ってる?」

郷に入っては郷に従え、やるっきゃない。

「今残っている食料ではとても無理ですね。お金のほうも宴会一回で消し飛んでしまいます。」

「mjd?」

「マジです、マジ」

外から持って入ったお金が使えたのは幸運だったが、もう貯えが尽きたか。

稼いでるつもりだったんだけどなあ、俺。

「無理しないほうがいいと思うわよ?」

「提案者が何言ってやがる、一週間後、この守矢神社にて宴会を開くぞ!」

「そういうことは保護者である私たちを通してからだな、」黙れ駄神」・・・ごめんなさい」

稼ぎ手がオツケー出してんだからいいんだっつーの。

さて、やるべきことは山積みだな。

「まずは早苗」

「何でしょうか?」

「宴会の前日から忙しくなるだろうから、それまでゆっくりしていてくれ」

「え、でも」

何か大仕事を頼まれると思っていたのか拍子抜けした様子だ。

「いいんだ、それまでに疲れをとっておいてくれ。それと紫さん」

「何かしら」

「人員の提供を頼む」

以前の話に出てきた式、九尾の妖狐らしいがその人の力も借りたい。
「いいわよ、それぐらいあの子に手伝わせる」「あんたもだぞ」なん・・・だと・・・?」

自分はサボる気だったのかコイツ。

「働かざる者食うべからず、提案者が俺から逃げられるとでも?」

「・・・これでも私偉いのよ」

「紫さんには食材の運搬をお願いします。スキマ使えばすぐでしょ」
「無視したわね！スキマに落とすわよ！！」

どうでもいい。出てこれるからモーマンタイだ。

「司貴く、私たちは」

諏訪子も何か仕事を求めているようだったが、

「諏訪子様、主賓に働かれては従者の恥ですので、どうか一週間後までお待ちしてください」

めったに使わない敬語。だって皿割ったりされても面倒なもの。

「待ちなさい！じゃあ司貴は何するっていうのよ！！」

駄賢者まだいたか。うるさい奴だ。

「当日の接客、食料の買い出し、それに」

「・・・それに？」

正直考えただけで頭が痛いのだが、このメンバーで誰かが行くのなら俺だろう。

「もちろん、全ての方に宴会へのご招待を」

確実に死亡フラグだろこれ。

確実な死亡フラグから二日。うん、二日かかってるよもう。

今のところ、迷いの竹林、白玉楼、地獄、博麗神社の四ヶ所が終了。

妖怪の山と人里は早苗に任せた。というかこれ以上は過労で死ぬる。

特に何もなく終わらせることができたよ、うん。

別に喧嘩に巻き込まれてピチュったり、庭師の人に切り刻まれかけたり、

閻魔さまにもつと善行を積みと説教されたりしたけど何もなかったよ？うん。

あれ、目から汗が・・・

まあ収穫はあったんだけどね。いろんな力の形が見れたし。対価が命とかちよつとSYレにならんでしょう？

「そんでもって次がここか」

司貴は正面の館を見上げる。すべてが紅に染まった館、次はここに住む妖怪相手なのだが。

「えーっと、ここは」

そう言って一冊の本を開く。早苗が稗田家にあいさつに行った時貰ってきた幻想郷縁起という本だ。これ一冊に幻想郷の強大な妖怪などはすべてのついているらしい。便利。

「吸血鬼の館か、またやばそうなところだが、」

司貴の目には、ぐっすり熟睡中のチャイナドレスの女性が映っていた。

「門番なのか？通つていいものだろうか。もしもーし」
「ウーン、咲夜さんナイフで刺さないでー、むにゃむにゃ」

・・・ずいぶんスプラッタな夢だな。夢の中で流血沙汰とは。お
お、怖い怖い。

起こすのも悪いし入らせてもらおう——ッ！

眠っている女性の前を横切ろうとした瞬間、いきなり側面から攻撃を受ける。

「私は紅魔館の門番、紅美鈴！侵入者には容赦しません！」

「起きてたのか？いや、どっちでもいいか」

「あなたが何者かは知りませんが、許可もなくこの門を通ろうなどと無理な話！」

寝てたからそつとしてただけなのにな

結構強そうな人だし、こういうときは

「三十六計逃げるに如かず！」

「逃がしませんよ！」

身のこなしが半端じゃない。俺の動きに軽々ついてくる。
だが俺を追ったのが間違いだ。

「こいつでもくらえ！」

相手の足もと目がけて放った弾幕。それは土煙を巻き上げ相手の
行動を封じる。

「ごさかしい！」

すぐに美鈴は土煙から出てくる。しかしもう遅い。

「あれ、あの人はどこに行ったんでしよう？」

完全に見失った。気配を感じ取することもできない。

「きつと私に恐れをなして逃げたんですね」

上機嫌で自分のいるべき場所に戻る。しかし、司貴は
「潜入成功♪」

スキマを使つてすでに館の中に入っていたのだった。

「咲夜」

「はい、ここに」

館の中、話をしているのは、まるで玉座のような椅子に座った翼をもつ幼げな少女と咲夜と呼ばれたメイド服を着た少女。

「どうやら客人が来たようね」

——丁重なおもてなしをお願いね？」

「分かりました。では」

メイドの服の少女は一瞬で消える。

「さて」

幼い吸血鬼の少女は笑う。面白い獲物を見つけたからだろう。

「久方ぶりね。この館に侵入者なんて。フフ、さあ人間よ、我が館に入って五体満足で出られるかな。フフフ、楽しみね」

——彼女はまだ、「運命」を知らなかった。

命がけの宴会準備 前編（後書き）

第8話、宴会準備編。

ゆかりんはもはやパシリ。

そして不幸街道まっしぐらな主人公。

死なねば安い。たぶんそんな感じ。

次回も紅魔館編。ちょっとメルブラ要素を入れる予定。

命がけの宴会準備 中編

「ようこそ紅魔館へ、私は紅魔館の主に仕える従者、十六夜咲夜。我が主がお待ちです」

潜入成功と思ったらメイドさんに見つかっただござる。
主つてのは十中八九、レミリア・スカーレットだろう。
どうもこの人俺に殺気放って気がするが何かの罠だろうか？
勝手に入って来たから怒ってるのかねえ。

「そうですか。こちらも用があつて伺つてゐるものなので。お会いできるなら話が早くて助かります」

とりあえず会つてみないとわからないからな。宴会のお誘いに来て殺氣向けられるつてのもあれだが。

——幻世「ザ・ワールド」——時よ止まれ。

世界は凍りついたかのように動きを止める。ただ一人の少女を除いて。

凍りついた時間の中、咲夜は司貴に対してナイフを投げつける。

ナイフは空中で静止し、獲物の命を狙う。

咲夜は既に背を向けている。

「侵入者というからもう少し強いのかと思つていたけど。残念ね。来世ではもっと、警戒心というものを持つようにしなさい」

——そして時は動き出す。

ガキン！！！！

金属同士のぶつかり合う音が響く。おかしい。ここで響くはずな

のはそんな音ではない。

今この館に響くべきなのは、

「このおれの断末魔ってか。三文芝居だな、どうも。

それにくだらない説教だ」

そこには五体満足な侵入者の姿が。傷一つ付いていない。串刺しになってしかるべき状況だっただろうに。

「何をしたの？」

「別に何も？ ナイフ投げ終わったとたん背を向けてるから避けるのに何ら苦労しなかったぞ？」

司貴はまだ能力の読み取りをしていない。だから何をそんなに驚かれているのか理解できていない。

私の力が通じない！？

それは、十六夜咲夜にとって初めて出来事だった。

予測してかわす、力技で突破する。

今まで戦いに負けることはあっても、この能力が効かない相手、ましてや人間などに出会ったことなど無い。

自分の能力が通じない。これほど精神的につらい状況はないだろう。

「それでもっ！！！」

半ばヤケになった咲夜は、そのままナイフで切りかかる。

「やめなさい、咲夜」

咲夜を制したのは幼い少女。しかし、その少女からは恐ろしい程の威圧感が放たれていた。

「あなたじゃ勝てないわ、私もその子の運命が見えないの。予定変更よ、殺そうにも骨が折れるわ。私はレミリア・スカーレットよ、レミリアでいいわ」

「本人目の前にして殺すとか物騒なあいさつだな」

シャレにならんからやめてくれって、宴会一つのために死にたくないから！

「気を悪くしたのなら謝るわ。それで用件は」

この流れで用件聞くとか大した奴だホント。見た目は幼女なのに、何か失礼なこと考えたでしょ・・・」

「ナ、ナニモカンガエテナイデスヨ」

焦るわー、幻想郷の連中は平気で心を読むから困る。さつさと本題に入るか。

「実は五日後に顔合わせも兼ねた宴会を開く予定なんでね。ぜひ招待をと「帰って頂戴」・・・え？」

即答とは恐れ入る。今まで全員オツケーだったのに初の拒否。ノリいいって聞いてきたのに。

「申し訳ありません。実は今この紅魔館には問題が発生しています。」「

「問題？」

「それは・・・私から説明するわ。」

レミリアが話を遮る。どうも話したく無さそうなのは気のせいだろうか。

「私には妹がいるの。でもねその子は「狂って」るのよ」
「狂ってるだつて？」

穏やかじゃない話になってきたな。

「やむことのない破壊衝動。人だろうと妖怪だろうと、すべてを壊そうとする衝動よ。」

「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」を使ってすべてを

破壊しようとする。

そしてその衝動には周期がある。それが今なのよ」

「俺にかまってる場合じゃないだろうに」

只今絶賛暴動中のその妹を止めに行けよ。宴会はいいから。

「今は妖精メイドが応戦、いや、肉壁になってるわ」

妖精メイドエ・・・

「本当はあなたがもつと弱っちい人間だと思ってたから、フランに殺させようと思ってただけ。無理ね、私たちじゃ、あなたを倒して連れて行くなんて。申し訳ないけど帰ってくれる？」

無理に参加してもらう必要はないのだが、どうもつまらない。

楽しんでもらう宴会の最中に、血みどろのショーが開催されているなんて知って、

放つとける程腐った人間じゃない。

「よし、フランだっけか？そいつに会わせろ」

現状で最も俺が危険に遭い、なおかつ最善の策を提案する。

「断らせてもらっわ。あなたのような力の持ち主を見れば、フランの狂気は増幅するわ。」

「

「そうじゃねえだろ、今まで何回もあつたみたいな言い方してるし、だったらここで終わらせるって、そう言ってるんだよ」

俺はその方法を持っているのだから。あくまで可能性として、だが。

さっき言っていたフランの能力に嘘偽りがなければ、

「お前の妹を止める。約束する」

「お嬢様、どうします？」

レミリアはさっきまでの威厳を放つための顔つきなどではなく、外見の年齢に相当する、まるで助けを求める子供のようだった。

「本当に助けられるの？」

泣いていた。ずっと長い時を耐えていたのだろうか。

人の身では絶対に体感することのできない時間。

最初からこうやって従者がいたわけでもないだろう、一人で耐えてきた長き時。

やさしい吸血鬼なのだと少なくとも俺は思う。

なにせ、止められるか、ではなく、「助けられるか」、そう聞いてきたのだから。

「論より証拠。囚われの少女を救ってハッピーエンドで終了、それでいいだろう？」

余裕かましてるけど結構きついかも知れんな。

「咲夜、案内してあげて」

まだ泣き顔だが、どこかに希望を持てたことが感じられる。

「かしこまりました、では司貴様、こちらへ」

咲夜に着いてくるように言われ、それに従う。

様づけに大分違和感があるがそんなことはどうでもいい。

「こちらに妹様はいらっしゃいます、どうか御武運を」

ついたのは地下牢。だいぶ強固に作られているのだがボロボロだ。どれだけの強さか手に取るようにわかる。

「すまないが、ナイフを一本貸してもらえないか？
手ぶらで挑むには少々やりづらいんでね」

ナイフを咲夜から受け取る。戦いに使ったことなんて無いが素手よりはましだろう。

「——行ってくる」

「妹様をどうか、お願いします」

「四方八方死体の山。生き返るとは言っても見ていて気持ちいいものな訳がないね」

「——アナタハダアレ？」

返り血を浴びて真っ赤に染まった少女。
この子がそうか。

「アナタガイッショニアソンデクレルノ？」

「参ったね、そんな目で誘われちゃ断れない」

少女は狂ったように笑う。否、狂っていたか。

「——カンタンニハシナナイデネ？」

世ニモ恐ロシキ吸血鬼トノ戦イ、此处ニ開幕セリ。

命がけの宴会準備 中編（後書き）

第？話、まとめ方下手過ぎて紅魔館おわらなんだ。
フランの能力はちょっと改変する予定。

信じられるか、こいつ、ラスボスじゃないんだぜ？

そんなわけで次回こそ紅魔館戦完結。

命がけの宴会準備 後編（前書き）

フランって原作だと結構知性的ですよね。
なので、完全に壊れてもらいました。

命がけの宴会準備 後編

狂気、それは誰にも芽生える可能性のある物。

あるのは永遠を求め狂い、またある物は愛する者のため狂う。
生きる中で狂気とは常に隣り合わせである。

その狂気を消すのだから、

———
それ相応の代償が必要となるだろう。

司貴は無様にも逃げ回る。死体になりかけながら、決して人の形を失わないように。

全くの抵抗もしないまま。

「マダイキテル？ソレトモシンダ？」

少女は笑う。嬉しいのだろうか、自分の攻撃を受けてまだ生きていられる獲物がいることが。

「クソッ！」

悪態をつく余裕すらない。それほどまでに危険。理性がないからこそその強さ、それを正面から受ける。

「疾ッ——！」

急接近、弾幕を潜り抜け司貴は少女の首元にナイフを向ける。

——禁忌「フォーオブアカインド」——

スperlが唱えられた瞬間、少女の姿は四つに増える、対象を見失ったナイフは空を切り、

「タノシカッタヨ、オニイチャン」
弾幕とともに終了宣告を告げられる。

「やっと、——写し取れた」
消し飛んだはずの司貴がそこには立っていた。

「助けるためには理解しないといけないってのに、時間かかりすぎだっけの」

司貴は待っていた。フ란の力を写し取り終えるのを。
そして、今それは終わった。

「なるほど、こんなものを見続けていたらとても正気ではいられない——地面なんて無いに等しいし」

——空は今にも落ちてきそうだ——」

見えるのは物の一番壊れやすい「点」。

少しでも気を抜けば、自分まで溺れてしまいそうなほどの狂気。そして、さらなる上を司貴はつかもうとしていた。

これ以上やれば俺の体にガタが来るかもしれない。

いくら力を得ても人間なのだから

しかし約束した。必ず助けると。

「ぶつつけ本番で悪いが、やらせてもらう・・・！」

司貴は今、物の壊れやすい点を見ている。それはフランが物として捕えているものすべてである。その力に、司貴は新たな概念を重ねる。

破壊の能力に死を操る能力を重ね、新しい力を生み出す。

——ありとあらゆるものを殺す程度の能力を

「マダアソンデクレルノ？」

少女は問う。無邪気に遊びたがる。その身が赤く染まりきるまで。

——そうだな。遊ぼうじゃないかフラン。
「さあ、殺し合おう——」

戦況は変わっていた。防戦一方だった司貴が反撃のチャンスを得ている。

「斬刑に処す」

——葬符「崩壊への序曲」

ナイフで切り裂いた空間から弾幕が現れる。例えるならば飛ぶ斬撃。

「アハハハハハ！！！」

——禁忌「レーヴァテイン」

すべての弾幕を炎の剣で切り落とす。その炎は司貴へも襲いかかる。

「隙だらけだ！」

司貴はその炎の中へ突っ込む、そしてフ란の目の前に現れる。

——狂演「人は愚者へとなり下がる」

至近距離でのスperl。斬撃の形をした弾幕とともに、敵との距離を詰める。

——秘弾「そして誰もいなくなるか？」

瞬時の対応。これで理性がないというのだから驚きである。いや動物的な感というべきか。

フ란の姿は消え、一方的な攻撃が再開される。

「よつと」

一見、司貴も理性を失っているように見えるが、至って冷静である。

狂気に落ちた殺人鬼の仮面をかぶることで、狂気に落ちることを防いでいる。

矛盾しているように聞こえるが間違っていない。

狂気に落ちている人間が、それ以上の狂気に落ちることなどありえない、

あつてはならないから。

数分後、弾幕の嵐は止み、フランが姿を現す。

「アハハ！オニイチャンスゴイネ！ココマデイキノコツテキタニン
ゲンナンテヒサシブリダヨ！？デモ・・・」

——モウシンデイイヨ？

——QED「495年の波紋」

波紋状の弾幕、それは壁にぶつかって反射し、さらに弾幕の密度を高くする。

部屋を埋め尽くすほどの弾幕が、一斉に司貴に襲いかかる。

「そうだな、——遊びは終わりにしよう」

——終幕「崩壊する定義」

司貴の体を自分の弾幕が覆う。それは矛であり盾ともなる。おおよそ弾幕というにはふさわしくない使い方である。

そして二人の弾幕がぶつかり合い――
――はじけた。

「アリガトウオニイチャン、タノシカッタヨ」
獲物をしとめ満足そうな様子である。戦いは終わった。

「――どういたしましてッ！」
瓦礫から司貴が飛び出してくる。背後からの奇襲、フランには対応できない。

「ナッ――！」
「ここだッ！」

司貴はフランの点を衝く。フランはその場に崩れ落ちるよう
てようにして倒れる。

「ミッションコンプリート、ってね。さて、この子の姿を見せてあげないとね」

「フランチッ！」

司貴に抱かれたまま入ってきたフランチに、レミリアが飛びつく。

「フランチは大丈夫なの！？」

やっぱりいいお姉さんだわこいつ。思っても口に出さんけど。

「狂気は吸血鬼に必要なもの、だから俺は能力と狂気との関係を殺した」

狂気の異常な増幅は、能力による脳への負担その概念を殺すことでフランチを狂気から解放した。

「尤も、人間だったら致命傷なレベルの攻撃も食らわせてるから数日は起きないかもしれない」

実際傷一つ付けずに、なんてことやっていたら確実に死んでいた。

「ありがとう・・・本当に・・・」

「礼なんていい、って・・・」

そう言い残して司貴は倒れこむ。

「司貴！？どうしたの！！？」

「悪いけど俺も限界なんでね・・・ちょっと眠らせてもらいますよ・・・」

体が限界を迎えていたのだ。もはや立つこともままならない。司貴はそのまま気を失っていった。

「咲夜！」

「分かっています、彼を客室へお連れすればよろしいですね」

「お願い・・・」

「主の恩人を助けるのに理由がいりまじょうか」

咲夜はメイド妖精に担架を運ばせ、そのまま客室へ向かう。

「・・・本当に面白い子ね」

——吸血鬼を恐れるどころか、助ける人間なんて。

「魔理沙以来じゃないかしら。あんな無茶したの」

吸血鬼は過去を思い出して、そして妹を眠らせてから、もう少し夜を楽しむことにした。

——運命はどこに向かっているのかしらね。
彼女の一生の中で二度とない疑問だろう。

命がけの宴会準備 後編（後書き）

第十話、主人公死亡（嘘）

説明すべき点多すぎじゃね、今回

フランの能力は線の見えなくなった直死の魔眼といったところ。

殺すと壊すの意味合いの違いもあるがそれは割愛。

直死の魔眼を知らない人はTYPE-MOON Wiki等でお調べください。

司貴の方は概念などの元々死が存在しない物にも理由をつけられ殺すことができる能力。

今回はフランが死ねば狂気も消えるといった、いわばこじつけのレベルで殺すことができる。さらにチート。

もともと魔眼は脳とセットらしいですけど・・・厳密には魔眼じゃないから気にしないでいいや！見えてるだけってことで！

オリジナルのスペルは文中の説明で何とか理解してもらえれば助かります。

終幕「崩壊する定義」は夢想天生みたいなものって認識でok
要するに無敵化ってことで。

準備編が終わった？いいえ、実はもうちょっと続くんじゃないよ。
それではまた次回。

宴会準備から限りなく遠い何か 前編（前書き）

今回だいぶ短いです。

（作）<ちよつと遊戯王の大会出てくるから予約投稿なんだぜ！
まったく関係ないですね。そんな第11話です。

宴会準備から限りなく遠い何か 前編

「——知らない天井だ——」

「起きたと思ったらいきなり何を言ってるの」

「おはようございます、司貴様」

目が覚めると、すでに二人が待ち構えていた。
「ああ、おはようございます」

さっさと起きるとするか、そう思って起き上がると

「お兄ちゃん！——！」

グシャァ！！！！

フランが俺目がけて突っ込んできた。

前言撤回、あと一ヶ月くらい眠らせて下さい。

「フラン・・・おれ死ぬからやめて。後、俺の名前は司貴だから」
「うんわかったよ！司貴」

冗談抜きでちょっとヤバかった。

自力で作った防御法じゃ足しにもならんわ。
幻想郷にはそういう能力者おらんのかね。

「起きて早速で悪いけど私も行くことにしたわ、宴会」

「それは良かった。そう言ってくれるってことはフランも問題なくなっただな」

安心した、ぶつつけ本番でやったものだから、成功したかどうかも確認できてなかったのだ。

「妹様の狂気は吸血鬼として元々持っているレベルのものまで落ち着きました」

「あなたには感謝してもきれないわ」

「感謝されるのはいいんですけどね、気にされすぎても・・・」

正直言ってやりづらい。恩を売りたくてやったわけでもないんだ。まあ、やりすぎな感は否めないが。

「フフ、それもそうね。二日後の宴会、楽しみにしてるわ」
今、何と言った。

「二日後だって！！？」

「ええ、だってあなた、フランと戦った日から二日間眠ってたんだもの。」

正直二日で起きられたのが奇跡だわ」

「やばっ！もう行かないと！」

そう言っただけで部屋を飛び出す。

まだ宴会の準備は済んでいない。

「じゃあね、司貴」

「お気を付けて、司貴様」

「フフ、ほんとに今から二日後が楽しみね」
紅魔館の面々に見送られながら出発する。

「体がイテエ」

現在、最後の客人のもとへの道中。ダメージがやばい。

これが起きてから食らった体当たり一発分のダメージなのだから最悪である。

「次に備えてノーダメージだったはずなんだがな」

思いつきり削られてます。数字にして八割です。本当にありがとうございました。

「まあ、一人で愚痴つてても仕方ない、後で酒の席でも愚痴ろう」
霊夢とかなら面白そうに聞いてくれるだろ。

「つと。着いたか」

一面に広がるのは向日葵。ここは太陽の花畑。幻想郷最強の一角、いや、最凶の一角である妖怪が住まう場所。と言っても俺はあったことはないが。

「にしてもすごい花畑だな。こんな広い範囲なんて管理しきれもんじゃないぞ。」

「しかも手入れが行き届いてるし」

「お褒めの言葉、どうも」

いきなり背後から声をかけられる。背後取られるのはまずいだろjk。

かなりヤバい相手なのに。

この花畑の主、風見幽香は半端な妖怪ではないのに。

「久しぶりに、この花畑の率直な評価がもらえたわ」

「はい？」

あれ？襲われると思ってたのに。あれか、取るに足らないってか。むしろそうであって下さい。

「この花畑を見ると、どうしても怯えて逃げる人間や妖怪の方が多いってね。」

花自体を評価してくれる人なんていないのよ」

「こんなにきれいなのに、ですか？」

話を合わせたほうがいいと直感的に感じる。思った通りのことを言っているのだから問題ないだろう。

「ホント、この子たちの良さが分かってももらえないから困ってるのよ」

ちよつと不機嫌そうだ。何かを育てるものとすれば、正当の評価がもらえないことほどつまらないことはないだろう。

「あなた、変ってるわね。私に会って逃げないのは、私の顔を知らない子供が倒せると思ってる莫迦な妖怪ぐらいなものよ？」

「用件があつて来てるのに、逃げて帰っては意味がないでしょう」
さつさと済ませて帰るに限る。逃げるといふ方が正しい気もする。

「実は俺、幻想郷に来たばかりの新入りでして、顔を広めるためにもと宴会を開くのでできれば参加していただけたら、と」
「いいわよ」

思ったよりすんなりクリア。やった死なずに済むよ。

「あなたが私と戦って生き延びられればね」
やっぱりそうなるのかよ。

「言っただでしょ。逃げないやつは久しぶりだつて。そんな面白い奴戦ってみたいじゃない？」

「生憎と、戦えるようになったのが最近なもので、そういう感情は理解できませんね」

「さあ、始めましょう」

恍惚とした笑み。やばい死ぬ。俺、生きて帰ったら、あの子に告白するんだ。

——宴会前、最後の大事な仕事が始まった。

宴会準備から限りなく遠い何か 前編（後書き）

第11話、いつか死ぬうちの主人公（過労で）

フランと戦ったその足で幽香さんとだなんて、

ちなみにだいぶ端折りましたが、今までいった場所でもいろいろ襲われたり巻き込まれてます。

もこたん、かぐや、みよん、ゆゆ様、えーき様、白黒に紅白。

何このラスボス&EXボス&主人公勢

ボスラッシュですね、わかります。

なんかヒロイン出番ないね。力のインフレが酷いからね。仕方ないね。

そのうち頑張ってもらおうか。 それではまた。

宴会準備から限りなく遠い何か 後編（前書き）

（作）＜職業体験で時間がギリギリズエア！

宴会準備から限りなく遠い何か 後編

逃げるなら、いや、もう遅いか。(俺が)

「さあ、始めましょう」
既に臨戦体制を取っている幽香。持っている傘が司貴に向けられる。

「やるしかないか・・・ん？」
懐に違和感を感じる。

気になって取り出してみる。ナイフだ。咲夜に返すのを忘れていた。

もう少し借りさせて貰おう。

「ナイフが得物なんてどこかのメイドみたいね」

「そのメイドのナイフなんだがな」

殺気、それもレミリアやフランとは比べものにならない。同じものだと思えない。それ程に重い。

「疾ッ——」

ナイフで切り掛かる。待ちの戦術では間違いなく不利。飛び道具の使えない接近戦へ持ち込む。

「筋は悪くないわ。この距離じゃ弾幕は使えないわね、でも」

《メリッ》

——力で私に勝てると思ったのかしら。
拳が腹部にめり込み吹き飛ばされる。

「妖力に気を取られすぎよ」

やばい、骨までいってやがる。内臓もだな。

まだ、立てる。こんなところで死ぬ訳にはいかない。

「よく立ったわね。ちよつと力は抜いたけど。まさか人間が立つとは思わなかったわよ」

「今ので手抜きとは泣けるね」

もう一度ナイフを構える。

「今度は楽にしてあげるわ」

「生憎、負けるつもりはないんでね」

「言っじゃない、人間が」

妖力を解放する。大きさが半端じゃない。

「死になさい」

向けられた傘の尖端から弾幕が放たれる。

「これで相殺！」

ナイフで弾幕を切り落とす。

「弾幕を切り落とすなんてやるじゃない」

「違うだろ、切り落とすのが限界なんだってわかってるんだろ」

死の点が見えていても届かない。幽香の体に触れることもできない。

「上等よ。弾幕を切れるやつなんて普通いないわよ」

「お褒めに預かり至極恐悦。それでは弾幕の採点もしていただきま
すかね」

接近は不可能。ならば遠距離で？否、それで勝てるはずがない。
万全の状態ならばまだしも、絶不調の　今、真っ向勝負なんてやつてられない。

能力の使い方は、別に力だけに留まらない。人の最大の武器、言葉を利用する。

「弾幕勝負なら今の俺でも勝てますしね」
「・・・なんですって」

安い挑発。しかしそれに乗ってしまったっている幽香。何故か、それは簡単な事だ。大妖怪とまで言われたものが、自分の得意とする戦術において人間ごときに挑発される。安いかどうかなど関係ない。挑発されたという事実に怒りを抱いているのだ。

「きつと新聞にも載っちゃいますね。見出しは・・・うん《太陽の花畑の主。人間に完敗！》これでいいな」

「いいわ・・・全力で潰してアゲル・・・」

多分ただの人間が挑発してもここまでの効き目はなかっただろう。
全てを司るからこそその効力だ。

（何処までも広がる能力だな、まだ何か出来るのかもな）
とりあえず能力の解析は後だ。

今は――

――戦いを終わらせるだけだ――

「スペルカードなんてもの、使ってあげないわ」

スペルカードは所謂リミッターとしての機能もある。相手を殺してしまわないためのものだ。

それを使わないということは、

――本気で殺しにかかってくるということだ。

「御自由に、勝つのは俺ですからね」

「いい度胸じゃない」

最後の勝負だ。

――マスタースパーク――

最大級の砲撃。以前見た魔理沙のスペルに似ているが威力は段違いである。

――偽符「人間最大の弱所」――

幽香のマスタースパークとほぼ同等の大きさの攻撃。両者の攻撃がぶつかり合う。

――
辺りは光に包まれた。

「終わったわね」

ぶざまに醜態を晒しているのは司貴の方だった。

「貴方はよく頑張ったわ、褒美として私の花達の栄養にしてあげるわ」

そう言つて司貴の死体を持ち上げようと近づく。

《ブシュッ!》

いきなり吹き出す血。それは幽香の足からの出血だった。

「なっ!?!」

「どうぞ、そいつはくれてやるよ、・・・人形じゃ栄養にならんかな」

そう言つて司貴は姿を現す、地面から。司貴は地中に潜っていたのだ。

「どういうことよ・・・?」

幽香は足の筋肉を切られて倒れている。人の形をしている以上、妖怪であつてももう立てないだろう。

「何、借り物の能力さ。大地を操つて地中に空洞を、もともとあつた土などの物質で人形を、ただそれだけ。スペル名覚えてるか?

「人間最大の弱所、だったかしら。でも私は妖怪よ。」

確かにそうなのだが、それを言われたら正直見た目は人間な妖怪

のがほとんどだと言わせてほしい。もちろん大御所が、だが。

「人と同じように見て判断するものだったからね、簡単に騙せた。力に自信のある物が放った最高クラスの攻撃。自分だって視界が多少はふさがれる。」

その間に人形とすり変わる。すると、どうしなはいけない？
相手が死んだことを確認するんだったら、心臓の音を聞くぐらい
しかないだろう？」

「・・・あんた相手なら首を切り落として確認するわ」
「ひどっ!？」

マジでこええよ。動き封じてるのこっちなのにまだこええよ。

「・・・私の負けよ、さっさとどめを刺しなさい」
「なぜそうなるし」

正直困る。というか宴会のお誘いに着て死ぬのも嫌だが、人、いや妖怪か。とにかく何で殺しをして帰らないといけないのやら。

「人間なんかに負けたなんて恥だからよ」

「だが断る」

即答する。だって嫌だもの、知ってるかこれ、宴会の準備なんだぜ・・・？

さすが幻想郷だ！簡単に流血沙汰になっちまうぜ！

「俺はあんたを殺さない、理由は三つだ、

まず一つ、俺に殺しはできない。臆病者と言ってもらって構わない
二つ目、俺たちはあくまで友好的な関係を築きただけだから。

あんたを殺せば印象は悪くはなっても良くはならない。

そして三つ目なんだが・・・」

そこまで行って口ごもる、半ば呆れた様に幽香は聞いている。

「・・・何よ」

「花」

「・・・え？」

「・・・この向日葵は誰が面倒みんだよ」

そう言いつつ花畑の方に歩を進める。一応言っておくが、空洞作ったのは花の咲いていない場所だからな？そんなこととしてまで怒りを誘うような作戦は取りたくなかったからな。

「交換条件だ。俺はこの花畑を何度も見たい。だからここの管理をする代わりにお前を殺すのをやめる。・・・だめか？」

——連れてきたいやつもいるしな。

そこまで言い終わると幽香に笑われた、なんか変なこと言ったかな、俺。

「アハハハハ！やっぱり変わってるわよ貴方。ほとんど生きて出れた者のいない花畑にまた来たいですって！」

腹抱えて笑ってるし。どうもこの力を得てから俺は変人扱いが多い。俺としてはできることが増えた程度の認識なのだが。

「いいわよ司貴。その条件飲んであげるわ」

「まじか！よかったあ。これで俺の用事も終わったしな」

俺が勝ったのだから宴会にも参加してもらえることだろう。

「宴会でしょう？わかってるわよ、せいぜいもてなさないよ？」

「それでは次に会う時まで、おっと、足のけがは直していくぞ」

幽香の足に手を当てる。すると傷口が見る見るうちにふさがっていく。傷があつたのか見ただけでは判断できない。

「これでよし、と」

「・・・まだ力を隠してたのね」

「いや？腹の傷塞ぐのに実は使ってるぞ」

すで食らって治療なしで立てるわけがない。意識が飛んでたらア
ウトだけだな。

「もういいわ、行きなさい」

「ああ、じゃあまたな」

こうして俺の宴会準備は終わった。料理とかはまだあるが今はとにかく寝たい。

さあ、一眠りしたら来るべき宴会を楽しもうじゃないか。

宴会準備から限りなく遠い何か 後編（後書き）

第12話、よく死ななかつたな司貴。

すべてを司るといっても真つ向勝負で誰にでも勝てるほどではありません、まだ。

だから騙しもすれば挑発もします。

あれ鬼さんに嫌われそうな予感が。

・・・大丈夫だろ、空気が読める子だと思っから。

スperl説明

——偽符「人間最大の弱所」

正確には騙しというよりは保険です。

十分な攻撃力も持っているためそれだけでも相手を倒すことはできます。

勝ち筋を作るのではなく、負け筋を消す技です。

ではまた次回。一日一更新が途切れるかもしれん。

宴会は楽しめ その一（前書き）

サブタイのセンスの無さに悩む今日この頃。
今回もある意味準備編です。
酒が入るのは次回です。

宴会は楽しめ その一

宴会中は休める、そんなふうに思っていた時期が俺にもありました。

時は過ぎ宴会当日。

まだ日も落ちない内から既に多くの人が集まっている。俺は飲む方に混ざるつもりだったのだが。

「司貴さん、つまみ20人分追加お願いします」

「わかったよ、ったくなんで俺が料理しないといけないんだ・・・」
今俺は、実質一人で調理場を仕切っている。

「頑張ってください！今動けるのは私たち二人だけなんですから！」

駄神達が働かないのを計算に入れてなかったわー

紫さん達もまだ着いてないし。

「こっちは病み上がりだってのにさっさと飲んでるし、誰か助けてー」

「手伝いましょうか？」

返ってくると思っていなかった返事。振り向くと亡霊姫と半人半霊の剣士がいた。

「お邪魔してるわよ」

「お久しぶりです、司貴さん」

「一週間ですけどね」

西行寺幽々子と魂魄妖夢。前に白玉楼を訪ねた時に会っている。

「その節は本当にすみませんでした!」

深々と頭を下げている妖夢。これにはそれなりの事情がある。

司貴が白玉楼を訪れた時の事。スキマを使って移動していた司貴は直接白玉楼の中に入ってしまった。侵入者だと思い込んだ妖夢は切り掛かったのだ。

幸い、紫の紹介状を見せることで難を逃れたが、傷を負わせてしまっていた妖夢は自分を許せないでいた。

「あれはこちらが悪いのだから謝られても・・・」

非があるのは間違いないくつつちだ。その時こちらもきっちり謝罪して終わらせたつもりだったが。

「そう言わないで使ってやってくれないかしら？」

「しかし・・・」

拒否の意思を示すと、幽々子が妖夢に聞こえないように小さな声で話してくる。

「あの子頭硬いから料理で返させとかないと、腹を切るとか言いかねないわよ？」

「妖夢さん手伝ってください」

何故だ！なぜ幻想郷は俺に血をそんなに見せたがる！

ああ、不幸だ・・・

「じゃあとりあえず材料を刻んでいってください。そのうち紫さんのところからも応援が来ると思うので」

「わかりまし「呼んだ〜?」みょん!？」
いつものことだが心臓に悪い登場だ。まあ俺も使ってるから文句はいえんが。

「お疲れさま〜、外はもう盛り上がってるわね」

「酒に関しては紫さんに聞いてた通りの人、いや妖怪もか、とにかく恐ろしいほどの飲みっぷりですね」

「あれはまだましな方よ、どこか探せば鬼に会えると思うから探してみなさい。酒豪とか通り越してるからあれは」

鬼か、あれ、呼んできたっけ?そもそも一人の鬼を残して後は違う土地に移住したとか何とかで見つからなかったんだけど。

「そいで助っ人さんは、H A Y A K U!」

「何でテンション高いのよ」宴会ゆえに「宴会なら仕方ないわね」
必死に野菜を刻んでる妖夢をよそに、談笑してる俺達。そろそろ戻らないと。

「あなたはもう料理しなくていいわよ?」

「なん・・・だと・・・?」

いやさすがにそれはないだろう。招いた側の人間が誰も料理に関わってないのはまずいだろう。

「私の式は有能なのよ。出てきて、藍」

「はい、紫様」

隙間から現れたのは九本の尾をつけた女性。まさかこの人

「・・・九尾の式？」

「その通りよ、名前は八雲藍。姓が無いと不便だから八雲を名乗らせてるわ」

「初めまして、私は八雲藍。紫さまの式をさせてもらっている」

「あ、どうも」

正直驚いた、別に紫さんが強いのを知らなかったわけではないけども、九尾を式にする程とは。

「君が司貴だな、なるほど。最近色々ところで暴れまわっていると
いうのは本当のようだな」

「いいえ、宴会のお誘いに行っただけです」
もういいわこのネタは。

「とにかく、今日の料理は私と白玉楼の庭師に任せてもらおう」
そう言って調理場に入る。

「おれも手伝い「ダーメ」・・・紫さん、どいてください」
調理場の入口をふさがれる。

「司貴だって新入りなのよ？顔合わせに参加しないと」

「俺があつてないのって天魔様ぐらいですよ、鬼もまだただけど」
ほぼ全員俺が呼びに行っただから、顔合わせは済んでいる。

「いいのよ、料理は藍がやってくれるって言ってるし、体を休めた
ほうがいいわよ」

「・・・お言葉に甘えさせてもらいます」

紫が手を振っている。いや、料理しないならあんたも参加しろと言いたいところ何だが、まあありがたし楽しませてもらう。フランと幽香の攻撃を食らった腹部が特にやばいしな。治療あんまり効かないわ。役に立たない。

さあ宴会を楽しもうじゃないか。

夜はまだまだ長い

宴会は楽しみ その一（後書き）

第13話、今回は盛り上がらないよ。

ワラキー「私の出番はまだかね？」

（作）「あんたが日常編に出てきたら怖いだろうが」
ワラキー「（・・ω・・）」

やっとこさ宴会が始まったよ。

司貴が生き残ったことにまずは乾杯。そして久々の早苗の登場に乾杯。

うん正直今回何にも思いつかなかった。

そのまま宴会に入るとだいぶ長くなりそうだから区切ると何にも無くなってしまった。

・・・もともとネタ普段から使えてないですけどね。

閑話 キャラ設定（前書き）

時間がないため今回はキャラ紹介です。

閑話 キャラ設定

（作）＜今更ながら、キャラ紹介をやってみようと思う。司貴にやってもらおう。司貴以外、紹介するキャラいないけどな。

「せめて10話までにやれよ」

（作）＜大丈夫だ、問題ない。

「長い文章をうつ時間がないからこのタイミングなんだろ」

（作）＜いいじゃない、人間だもの。ちなみにまだ本編ででてきてない設定もでるから。

「どうでもいい」

守屋司貴

＜16歳、元高校生、現変人＞

「ちょっと待て！」

（作）＜何か？

「変人とはなんだ、変人とは」

（作）＜妖怪に変人扱いされて一般人だと言い張れるのかな？

「むむむ」

（作）＜何がむむむだ。続き行くぞ。

＜身長170前後

体重50kg＞

「どうでもいいね」

（作）＜全くだ、どうでもいい

運動、勉強共にかなりできる。

バイトが無い日はほとんど早苗の教師になっていた。

「おかげで俺には休みなど存在しなかった」

（作）＜早苗ってそんなに頭悪いのか？

「頭の中がほぼ信仰一色といえば分かるか？」

（作）＜お、把握した。よし次だ、次。

＜拾われた理由は苗字が諏訪子と発音が同じだったから。＞

「拾われた理由がこれって」

（作）＜運命だから仕方ない。

＜外の世界ではバイト一筋、幻想郷では何でも屋を営む＞

「新設定ポンと出すなよ・・・」

（作）＜最初に注意したから問題ないな。
ちなみに何でも屋への依頼は、とにかくどこからでも来るぞ。
人間・妖怪・半妖を問わずに。

「何それ、怖い」

（作）＜大丈夫だろ、神の領域に片足突っ込んでるお前なら。じやあラスト。

くすべてを司る程度の能力について。
基本的になんでもできるのが特徴。
しかしコピーした能力、またそれを改良したもの以外は燃費が悪い。

例（けがの治癒能力）

また、基本的に干渉系の能力は効かない。

例（ミスティア・鈴仙・紫・映姫、等々）

「地味にやばいの混ざってるだろ、主に後半」

（作）＜大丈夫だ、レベルを上げて物理で殴ればお前は沈むから。

「怖いこと言うな・・・」

（作）＜基準が分かりにくいかもしれませんが、そこはご容赦ください。

ちなみにフ란の能力は効果あり、幽々子の能力は効果なしです。

「こんなところか」

（作）＜大体終わったな。ちなみに東方キャラの能力もいじる可能性はあります。

例^{フミ}

ついでにぶっちゃけると早苗も実はいじってるぞ。

「なん・・・だと・・・？」

（作）＜正直な話、原作通りの早苗ってあんまり強いイメージがないから。

んで、依姫の能力を奪ってきました。
具体的には神降ろしができます。

「現人神が神降ろし、大丈夫なのかそれ」

（作）＜降ろすと言っても基本的なイメージは神奈子OR諏訪子から力を借りるものだから特に問題はない。たぶん、きっと、恐らく。

「だいぶ弱気なこと・・・じゃあこの辺で終わるか」

（作）＜長くなったらそれこそ泡沫転倒だからね。

それではこの辺でさようなら。

ではまた次回。

宴会は楽しみめ その二（前書き）

とりあえずギリギリな投稿。

まだ終わらん、まだ終わらんよ・・・！（連続投稿的な意味で）

宴会は楽しみ その二

「さてと、どこから顔を出しますかね」

宴会なう。調理場を追い出された俺は、取りあえず知った顔を探している。

「結構弱そうな妖怪も集まってるな」

聞こえないよう小さな声で呟く。呼んでもいないような妖怪までいるため知り合いが探し難い。

「司貴くちようどいいところに來たわね。こっち來て酌しなさい」

「げっ、蓬萊二ー何か言ったかしら」滅相もございません」

「こんばんは、司貴」

「おじゃましてます、司貴さん」

「守矢神社へようこそ、永林先生、鈴仙さん」

永遠亭の面々だ。取りあえずここからだな。

「ちょっと待ちなさいよ。どうして私の名前が入ってないのよ」

「（チツ）今からご挨拶するところだったんですよ。輝夜さん」

この人は蓬萊山輝夜。俺はこの人とは係わり合いたくない。以前会った時殺し合いの盾にされるといいう、被害を受けているのだ。

「え、何よ、今の舌打ち！？私何かした！？？」

忘れてやがる、二ート姫は脳まで痛んだか。

「俺が永遠亭を訪れた日のこと覚えてないんですか？」

「ぜんっぜん」

だめだこいつ、早く何とかしないと・・・。

いや、もう遅いか。どうしようもないねこれは。

「姫様、いくら姫様とは言え今回は謝罪するべきですよ」

「だから何の話よ」

本気で忘れてるのか、それともとぼけてるのか、どちらだとしてももうどうでもいい。

「姫様が先日 of 殺し合いの中で彼を盾にしたではありませんか」

そう言えばあれ殺し合いなんだったな。理由までは聞いてないけど。死なない者同士の殺し合いって長引きそうだな。

「あら、姫を守るために体を張るくらいしてもいいんじゃない？」

—— 自分の中で何かが切れる音がした。

「永林先生」

「なにかしら？」

「そこにいるの—— いや、あるのはなんでしたっけ」

そう言って輝夜を指差す。

「そうね・・・殴られるべきサンドバックかしら」

「ちょ！？永林何言ってるのよ！？？」

輝夜は何か言いたそうだ。だが聞く耳は持たん。保護者の、いや所持者か、サンドバックなら。とにかく許可も得たことだから存分に殴ろうではないか。

「ではお借りしていきますんで」

「ええ、終わったら返しに来てね」

俺は森の方へ輝夜を引きずっていく。

「謀ったなー！えいりーん！！！」

暗い森の中で声が響く。まあ宴会中にそんな悲鳴が聞こえているものがあるわけないのだが。

「・・・師匠、よかつたんですか？」

「いいのよ。そろそろお灸を据えないといけないと思ってた所よ」
輝夜、哀れなり。同情の余地もないが。

「絶好調である!!!!」

「もう許して・・・」

——少年復讐中——

30分後、この世の終わりを見たかのような顔をした輝夜が帰って来たとき。

少々鈴仙が怖がっていたのは気のせいだろう。

「やべ、力使いすぎた」

足取りがおぼつかないまま会場を進んでいく。
沿いて正面から何か来る。

「司貴く」

フランが正面から突っ込んでくる。今それを食らったらピチュッ
てしまう。

「バックステッポウ！」

後ろに下がってフランを回避しようとする

「残念ね、相手が一人だったらよかったのに」

ズドン！

迂闊だった。まさかレミリアまで・・・

——意識が戻るまでに1時間以上を要したため辺りは大分暗くな
っていた。

「気分はどう？司貴」

「気絶させた当人がそれを言うか」

白々しすぎる。なんか咲夜のこちらを見る目が申し訳なさそう。

「司貴く」

「おーフラン、元気してたか？」

「うん」

こうやって宴会に来ているということはあれからも問題はないということだ。

よかった。

そして、

「なあレミリア・・・前見なかった人がいるのだが」

不思議な服装をした、紫色の髪の女性が紅魔館の面々に加わっているのだ。

「そういえば会ってなかったわね、彼女はパチュリー・ノーレッジ。私の親友よ」

「初めまして、話はレミリアから聞いてるわ。レミリアが大分世話になったらしいわね」

「そうでもないよ。できることをやっただけだしね」

「謙遜しなくなっただけいいじゃない、まあいいけど、面白そうだし」
(ボソッ)

・・・やっぱり変わったものを見る目なんだよなー。

俺からすれば幻想郷のほうが変わってると思うんだけど。

そう言えば、忘れる前に

「咲夜、このナイフありがとう。おかげで色々助かったよ」

懐からナイフを取り出して咲夜に渡そうとする。すると咲夜が首を振る。

「これが司貴様「様はよしてくれないか」・・・司貴の助けになったというのならそれはあなたが持っているべきです。」

確かにそんな気はする。フランにせよ、幽香にせよ。このナイフが決め手なのは間違いないからな。

「・・・ありがたく貰っておくよ。これ無しじゃあ生き残れなかった場面が多すぎるからね」

それはよかった、と咲夜が言ったところでレミリアが身を乗り出してくる。

「話は終わったかしら？」

「話が終わったら何なんだよ」

「決まってるじゃない。今日は宴会よ！」

——飲み明かすわよ！

ああ、幻想郷の宴会は本当に長い。

宴会は楽しみ その二（後書き）

宴会編その二、酒が入るとか言つて、飲んだの最後だけだね。宴会ということですからそれに司貴がはっちゃけてます。

御大将ネタとかわかる人いるかな？

当分は宴会編、いい加減ヒロインにスポットを当てんとヒロイン（空気）になつてしまう。

それではまた。

宴会は楽しめ その三（前書き）

今回は文章が滅茶苦茶なんだぜ。
いつものことだけどナ！！！！

宴会は楽しみ その三

「疲れた・・・」

朝から休み無しの今日。はっきり言って体がもうボロボロだ。

「もう、ゴールしても、いいよね・・・？」

何か死んでしまいそうな発言だが大丈夫だろう。

「早苗く、こっちで飲みなさいよ」

この声は霊夢さんだ。今はもう各々でお酒を飲んでいる状況なのだから、席についても問題ないだろう。

「今行きまゝす」

この時私は疲れて頭が回っていないかった。
自分がお酒を飲めないことも忘れて――

「遅いんだぜ早苗」

「早くしなさいよ、外のこととか色々聞いてみたいんだから」

「おじゃましますね、霊夢さん、魔理沙さん。それに・・・誰ですか？」

二人とは戦った時に顔を合わせているのだが、もう一人の女性には見覚えがない。

肩には二つの人形らしきものを乗せている。

「早苗は会ったことがなかったな、こいつは「アリス・マーガトロイドよ」・・・という訳だ。今日は私が連れて来たんだぜ」

「よろしく願います。マーガトロイドさん」

「アリスでいいわ。呼ばれ慣れてないし」

アリスさんは何か不機嫌そうなのだがなにかあったのだろうか？

「大体魔理沙、いきなり説明もなしに宴会に連れて来ないでよ！」
「細かいことはいいんだぜ」

「細くないわよ、それ」

どうやら、誘拐のような形で連れてこられたらしい。

「もういいわ、折角来たのだから楽しませてもらうわ」

「そうよ！早く早苗に聞かせてもらいたいことがあるんだから！」
お酒を注ぎつつ霊夢は言う。

「いいですよ。それでどんなことを聞きたいんですか？」
自分はジュースを飲みながら話を聞く。

「司貴とはどんな関係なんだ？」
ブフツ！

口に含んでいたジュースを噴き出してしまった。幸い誰にもかか
つてない。

「い、いきなり何言ってるんですか！？」

外のことを聞くんじゃなかったのだろうか。

「聞きたいことの筆頭と言えば、やっぱり人の色恋沙汰よね」

「あら、私も気になるわね」

「ほらほら早く吐いちまえよ、楽になるぜ？」

にんまりとした笑顔。いやはやこれほどまでに生き生きとした顔
というのはいかなか見えるものじゃないだろう。

「いや、あのその、何と言いますが、えーっと！？」

早苗は混乱している！

「あわてるのは当然好意を持つてる時だけなのよ、つまり」

「へー、やっぱり早苗と司貴は・・・」

「違います！・・・」

顔が熱い。きっと私の顔は真っ赤なのだろう。

「違うのか？一緒に暮らしてるってくらいだからってつきり・・・」
「司貴さんとはまだそんな関係じゃありません！！」
テンプレ&自爆乙。

「なあ、聞いたか？」

「当然」

「私もよ」

「い、いまのは・・・」

時すでに時間切れ、残念だが逃げ道はない。
すでに霊夢と魔理沙は次の攻撃態勢に入っている。

「今は、ですって」

「早苗は思ったよりも大胆なんだぜ」

「あーうー」

乙女の脳内は絶賛オーバーヒート中のようなのだ。

「ちょっと私は抜けるわ」

アリスは真っ赤になった早苗をよそに立ち去ろうとする。

「何処行くんだぜ？」

「その司貴って奴を一目見に行つてやろうと思ってね、ちょっと行つてくるわ」

そうして人ごみの中に消えていく。

「またあとでな」

「早苗、そろそろ落ち着きなさい」

「はえ？」

とりあえず暴走した早苗を呼び戻す。珍しい酒の肴なのだから、詳しく聞かせてもらわないと困る。

「ねえ、早苗。どうしてそんなにあんたは司貴に惚れてるのよ。馴れ初めは？」

「おっ、いいね。私も聞きたいんだぜ」

「霊夢さん、魔理沙さんまで・・・」

たぶんここで話さなくても、いつまでも聞かれ続けるだけだろう。

「・・・内緒ですからね！絶対司貴さんには言わないでくださいね！？」

「もちろんじゃないか！なあ霊夢！」

「そうよ！せっかくのチャンスを逃すはずがないじゃない！！」

一瞬不吉な笑みをもらしていた気がするのだが気のせいだろう。

観念して早苗は語り始める。

「私の父が、ちょうど今から一年ほど前に病気で亡くなったんです。もともと、母は私を生んだ時に亡くなっていましたし、司貴さんの親も事故で、だからうちに引き取られたんですけど」

「・・・もしかして聞いたらずかつたかしら？」

「いえ、いいんです。引きずっても仕方ないですから」
一呼吸おいてそのまま話を続ける。

「父が死んだとき、私は今まで以上に信仰を集めようと躍起になっていました。」

父のこと、少しでも忘れようとしてたんだと思います。
そのままいろいろ走り回っているうちに、なんだか神社にも帰りたくなくなって」

「家出したのか？」

魔理沙が真剣な目をして聞いてくる。

「ええ、三日ほど。」

でも私はその三日目に不良集団に絡まれてしまつて。
廃屋にまで連れ去られてしまつたんです」

「やばいじゃない、それ」

「力を使う訳にもいかなかったし、逃げることもできなかったから、私もう帰れないって思っていました。でも」

「司貴が助けに来たのね（か）」

「ええ、あの時は本当にうれしかったです。

服がぼろぼろになるまで探してくれてたっていうのが見ただけで分かりましたから」

「でも、司貴が強かったのは早苗も知ってたんでしょう？ あいつなら誰にも気づかれずに力を使ってその不良をのせたんでしょうし。だったらそれがきっかけとは思えないんだけど」

霊夢がそういったところで早苗は首を振る。

「司貴さんはその時はまだ普通の人でした。何の力を持たない、ただの人」

「だったらどうやって見つけんだぜ？」

ふとした疑問を魔理沙が問う。

「あいつの力なら人さがしだってできるだろうけど、その力無しでって」

「後から聞いた話なんですけどね、司貴さん三日間ずっと徹夜で街中探しまわってたそうなんです」

「どれだけ体力あるんだよあいつ・・・」

魔理沙は少々あきれている様子だ。

「さつきもいいましたけど、まだ力を持ってませんでしたからね、その場にいた不良を殴り飛ばして助けてくれたんです」

「いいじゃない青春らしくて、憧れるわ」

中を向いて霊夢が呟いている。

「でも、まだ一人動ける人がいて、ナイフを持って私に向かってきたとき、

司貴さんが背中私を庇って、その時からなんです、
ずっと私が彼を好きでいるのは・・・」

「生身でかばうなんて、やるじゃないか司貴のやつ」

「なかなか自分がそういう目に逢うことってないと思うわよ」
結構酔いも冷めているみたいだ。あれ酒の肴だったような。

「今でもその傷は残っていると思います。勲章代わりとか言って、
自慢してるんですよその傷」

「ホント、好きな人がいるってのはいいものね」

「まったくなんだぜ、さて」

魔理沙はお酒の瓶を握っている。

「早苗の恋が成就することを祈って飲むんだぜ!!」

「もともと宴会なんだから飲んでたでしょうに」

「細かいことはいいんだぜ!ほら、早苗も」

「は、はい」

魔理沙から盃を受け取り、それに酒が注がれる。

では、

——早苗の恋の成就を願って、

「乾杯!!」

「お二人とも・・・ありがとうございます!」

こうして巫女二人と魔法使いの中は深まっていった。

——
純粹なる巫女に幸有らんことを願う。

宴会は楽しいめ その三（後書き）

宴会編その三、と言いつつ過去編ですね。こまけえこたあいいんだよ！

すいません細かいですね。ほんと申し訳ない。

司貴という人間は自己犠牲の精神の塊といてもいいでしょう。

普段はめんどくさがって何もしませんが、ひとたび何か起きれば豹変します。

場合によれば、鬼の面をかぶったのかと錯覚させるほどに。

ではまた次回。次はまともな文章になるように頑張ります。

宴会は楽しいめ その四

司貴は神社から少し離れた森の中、一人の妖怪と戦っていた。戦いだって楽しいめばいい。宴会と同じだ。たとえそれが、酒と戦いが大好きな鬼との戦いだとしても。

時は遡りレミア達と別れた後。

司貴は天狗の集団と飲んでいた。

天魔様も一緒になって飲んでいたが、すでに眠っている。

俺？俺はあれだ、いわゆるザルってやつだ。

このせいで、神様二柱が飲み始めると片付けが俺の仕事になる。

「司貴さん。ちょっと会わせたい人がいるのですが」

彼女は射命丸文。俺が幻想郷の中で一番悪い印象与えたであろう一人だ。

出合いがしらに吹っ飛ばしたんだっけか、

あれ、なんか捨て台詞吐かれてた気がするんだけど。

「何か用？まさかあんたから話しかけてくるとは思わなかったんだけど」

いくら酔ってないとはいえ、すでにおびただしい量の酒を飲んでいる。さすがに気分が悪い。故に応対も結構適当だ。

「確かに最初に会った時にはいろいろありましたが、逆に考えればこれはスクープですよ！人が入って帰ってこれることはないと言われるような場所からの生還！！これを新聞の記事にせず何とするというのですか！！！！」

「よし分かった。私利私欲のためならプライドも捨てられるんだってことが」

「プライドは腹の足しにもならないんです！」

妖怪が力に関してそれでいいのかよ。

「もういいよ・・・んで？会わせたい奴ってのは？」

「一人地上に残った、孤独な鬼ですよ」

こうして俺は地上最後の鬼、伊吹萃香と出会う。

・・・正直会いたくなかった。

——そして現在に至る。

今何をしてるか？サシの決闘ですけど何か？

だって会った時に、

「花畑の妖怪を倒したってのはお前かい？汚いやり方をしたらしいね？鬼って言うのはそういう戦い方が大っ嫌いなんだ。だからお前の性根をたたきなおしてやるよ！」

そしてそのまま決闘へ、なんだかなく

もともと戦いは好きじゃないし、鬼とサシでやり合うなんて馬鹿げてる。

・・・吸血鬼とかも似たようなもんか。同じ鬼だし。

「相手も見ずに考え事かい！？随分余裕だね！！」

「どうしてこうなったか改めて整理をね」

間違いない原因であろう汚い天狗は、巻き込まれないよう上空から眺めている。

とりあえず、あれは後回しだ。

目の前の敵に集中しなければ。

ブンッ！

萃香の大ぶりの攻撃。しかしそれは、大地を抉り、木を倒し、空気を震わせる。

「男なら受け止めてみなよっ！！！！」

「ムチャ言っな！！」

何の考えもなしに力比べなんてしたら勝てるわけがない。むしろ腕が吹き飛んでしまう。

「やられてばっかでいられねえっての！」

——終符「地上最古の砲撃」

異変時に使った砲撃、威力と範囲でいえば自分の最大の一撃だろう。

光の中に萃香は飲み込まれた。

「やったか・・・？」

自分の最大の一撃。止められたが最後倒せる可能性は急激に低下する。

フラグだと思った人、正直に手を上げなさい。

「いい攻撃じゃないか。こんな力を持っているなら正々堂々正面からぶつかり合えばいいのに」

声がした方を見ると、そこには無傷の萃香が。服にすら傷が付いていない。

「・・・その攻撃で傷一つ付いていないあんたは何なんだよ？」

「ああ、私の能力は密と疎を操る程度の能力。

こいつで自分の体をいわば霧状にしたんだ」

そいつはいいことを聞いた。

「そうか、だったら真つ向勝負しかないな」

「やっとやる気になったのか！」

上空のやつも含め、とても楽しそうなやつが二名。

「仕方なくだ。勝つための最善策ともいう」
「それでもいいさ。久しく真っ向からやりあうことなんてなかったからな！」

——さあ、最後の大勝負と行こうじゃないか。

——鬼符「ミッシングパワー」——

スペルを発動すると同時に萃香の体が巨大化していく。
「反撃しないとペツチャンコになるよ！」
「断らせてもらうよ、まだ死にたいわけでもないんでね」

——迷符「無情の前には神すら服す」

世界の動きが遅くなる。スペルの発動者である司貴を除いて。

「なっ！？これはっ！？？」

「本家は相手に感じ取れないわけだが、これもまたおもしろいだろっ？」

そのまま司貴は萃香の腹部に手を添える。

ドスン！

「カハッ！」

鈍く、重たい音。自分の神力を筋力に変換してはなった一撃。吹き飛ばされた勢いで木にぶつかり、その場に倒れこむ萃香。

これも違うといえれば違うかもしれないが一応正面から戦ったこと

になるだろう。

「・・・やるじゃないか。これだけ戦えるのなら十分だよ。真っ直ぐな拳だった」

「どうも。・・・立てます？」

「いや、もう少し休んでから戻らせてもらうよ。気にすることはないよ、鬼の回復力は妖怪の中でも高いからね」

それならばいいか、本人の言い方にも嘘は感じられない。
さすがに鬼ということだろう。

「にしてもおかしいね。私が天狗に聞いた話じゃあ、不意打ちで倒したのを力で勝ったように大ほらを吹く卑怯ものって聞いたんだけど？」

「不意打ちで倒したのは否定しないが、力で勝ったなどと自分で言っただけでもないぞ」

萃香の怒りの原因も分かったことだし元凶を捕まえに行きますか。

その後、鬼の形相をした司貴に捕まった烏天狗は、
花畑の妖怪のもとにサンドバックとして届けられたとかな
んとか。

宴会は楽しめ その四（後書き）

第十六話、文エ・・・

別に作者は文が嫌いなわけではありません。
そこそこそこをお間違いないよう。

迷符「無情の前には神すら服す」

元ネタはななやんの閃鞘・迷獄沙門です。

ただし、効果はナイフで切りつけるのではなく、
時間の流れを遅くするといったものです。

mugenなら時止めできるななやんもいるから大丈夫でしょう。

それではまた。

宴会は楽しみめ その五

夜もふけ、辺りも暗くなってきた。

大体のところには顔を出したし、後は霊夢と魔理沙のところか。

そういえば早苗を見ていないが何処に居るんだろうか？

まあ潰されているだろうが。

「あなたが守屋司貴？」

見知らぬ女性に声を掛けられる。

金髪で肩には二体の人形。どこか不思議な雰囲気を持った人（人形）だ。

「そうだけど、君は？」

「自己紹介がまだだったわね。私はアリス・マーガトロイド。アリスって呼んで。」

あなたのことは早苗に聞いたのよ。ついさっきだけどね」

「そうなんですか」

早苗は誰にでも人当たりのいい奴だから仲良くなったのかも知れない。

見習うべきかもな。主に対象は蓬莱二トと汚い天狗だが。

ふと気付いたが彼女の肩に乗っている人形の体勢が違う気がする。

いや、今思いつきり動いてるのを見てしまった。

こっちに飛んで来てるし。

「シャンハイ」

「ホーラーイ」

「・・・なんすかこれ。」

二体の人形は俺の頭の上を陣取っている。
見た目通りの重さといったところか。

「あらあら、二人ともあなたが気に入ったみたいね」

「なあ、これアリスが動かしてるんじゃないのか？」

「それでもできるけど、普段は自律して動いてるわ。」

二人がほかの人の体に乗るなんて珍しいわよ。

話に聞いた通りの人間なのね」

何を言いふらしたのだろうか。別に聞かれて困るような事もない
と思うが。

「嬉しいのか、そうじゃないのか。まあいいか、霊夢と魔理沙はどこに
いるか知らないか？」

今日会ってないのはあの二人だけだと思うからな」

それで俺はもう寝る。萃香と戦ったおかげで疲れたし、酒も入っ
て少々眠い。

「早苗といっしょよ。なんなら連れて行くわよ」

探す手間が省けた。渡りに船とさえいいんだらうか。

「この惨状を見てよ・・・これをどう思う？」

アリスの問いに俺は答える。

「すごく・・・近づき難いです・・・」

なんとというか地獄絵図。

おそらく早苗が酔っ払って、弾幕なりスペカなり使って暴れたんだろう。

神社の敷地の一部が、某野菜王子が叩きつけられたクレーターみたいになってる。

酔っ払いつてレベルじゃねえぞ！

「どうしてこうなった。いつもは酒飲んだらすぐにダウンなのに」

早苗は本当に酒に弱い。市販のチューハイ一缶で酔えるレベルだ。

（二柱が試しました）

あ、やばい目があった。

「司貴さ〜ん？どうしてそんな遠くで見てるんですか〜？」

いつもと雰囲気違い過ぎるだろ。さすが酒の魔力は恐ろしい。

一応、霊夢と魔理沙に視線を送ってみたが、

（（ゴメン、ムリ））

二人とも手を振りながら口だけ動かす。

クチパクでシンクロとは新しいな。

「いや、なんというか近づき難いというか・・・」

言い切らないうちに早苗が泣き出す。

「そうですね！司貴さんは私のことなんかどうでもいいんですよ！！」

「泣かせた」

「司貴が泣かせたんだぜ」

「私もそう見えるわね」

「三者三様の意見を並べるのはいいが、とりあえず後にしてくれ」

ストツ

勢いのない音、司貴は当身で早苗を気絶させる。

「泣かした揚句殴るなんて・・・」

「人としてどうかしてるぜ！」

「あなた達が止めなかったからでしょう？」

アリス、ナイスフォロー！常識人ってマジ助かる。

「大丈夫だろ、当身だから気を失っただけだし」

「それもそうね、それより司貴に見せてほしいものがあるんだけど、どうでもいいのかよ。やっぱこの世界はいろいろとダメな気がする。」

「見せてほしいもの？」

「そうなんだぜ。それはだな・・・」

にじり寄ってくる霊夢と魔理沙。何これ怖い。

「司貴の体だ!!!」

飛びかかってきたよ。なんかアリスさん引いてるし。さすがに俺もひくわ。という訳で。

「誰のスペルがいいかな。フランとレミリアのスペル同時なんてもいいかもしれんな」

「調子がつてすみませんでしたっ!!!」ズザザー
飛びかかってきた勢いのままスライディング土下座している。
痛くないのかな？あれ。

「霊夢、魔理沙。何があつて司貴に体を見せるなんて言ってるのよ」
もつともな質問だ。つーか俺もわけわからぬ。

「早苗に聞いたんだぜ。少し前に不良とやりあった傷があるっていうのを」

「庇つてできた傷っていうからどんなものか見てみたただけよ」
「・・・よりのもよつてその話しかよ・・・」

なんというか、思い出すだけでそれなりに恥ずかしい。

あの頃は無茶苦茶だったわ、俺も。

「見ても面白いもんじゃないと思うがな。まあ見たいって言つたら別にいいけどな」

そう言つて背中を向けて服を脱ぐ。

アリスを含めた三人が、覗き込み、そして傷の位置を見て青ざめる。

「この位置って・・・」

「もしかしなくても・・・よね」

「・・・心臓の位置だよな？」

「まあそうなんだが」

俺が刺された場所はほぼ体の中央にある心臓、その付近の表面と
いったところだろうか。

刃が届かなかったためそこまで重い傷ではなかった。

「・・・これは普通よけるでしょうに」

「よけたら早苗に刺さってた」

「いや、そうだけだな・・・」

死ぬとは思ってなかったし、死なれるくらいなら身代わりになる
つもりだった、というのが正しいのかもしれない。

「・・・本当に変わってるわね」

「妖怪全般に認められた変人なもんで」

アリスの言葉をちよつと茶化す。まあ彼女も興味本位の発言なの
かもしれないが。

「じゃあ、早苗を部屋まで運んでくるんで後はよろしく。

片付けとかはしないでいいんで」

俺は早苗を抱きかかえて立ち去る。抱き方？所謂お姫様だっこだ
が。

早苗を背負うといろいろあるので。主にむ（ry

「なあ、霊夢」

「なによ」

司貴が立ち去った後、アリスも帰ってしまい今は二人っきりになっていた。

「自分の心臓が貫かれるかもしれないと思った時・・・
その場に立つてられるか？」

「そんなわけないでしょうが。私はお断りよそんなの」
本能的に逃げるのが当然と言ってもいいような状況だろう。
霊夢の反応が正しいといえる。

「まあ、いいんじゃない。あの子の気持ちも報われそうだしね」
「そうだな、あれで司貴も結構気にしてるみたいだしな」

「気にしてるねえ、私はもう両想いの領域だと思うんだけどね」
「ハハッ！ 違うないぜ！！」

——
当分の間の暇つぶしはあの二人に決定ね。

ヘックション!!!!

誰かのくしゃみの音が、小さく神社の中で響いていたという。

宴会は楽しみ その五（後書き）

早苗が酒弱いのは原作再現ッ！！（キリッ

第十七話、やっぱりゴリ押しな希ガス。

司貴と早苗の話を少々無理やりに不良に襲われたというものにしたのは、

「ナイフで心臓を刺されようとも早苗を庇う」

そういう司貴の一面を出したかったからですね。

ちなみに刺されて治療を受けて帰った後、

閻魔さまもびっくりな程長い説教を、早苗本人からされているというのは内緒。

キャラ説明で入れなかった気がするけど

司貴の能力では二つの能力の足し算などできません。

所謂 カー。イ64 です。

ではまた次回。

新生活開始

宴会も終わり、人々も既に立ち去った守矢神社。

まあいろいろあったが各々が楽しめた宴会だったのだろう。

しかし今、守矢神社には大きな問題が一つ残っている。

それは――

「金がない」

「ですね」

宴会でパーっと使っちゃいましたね。外の世界で貯めていたお金。今は神社の収入だけで凌いでますが。

「いくら何でも四人分の生活費は維持できないよな」

「正月が近いならまだ何とかなるかもしれないですけどね」
現在6月。遠い、遠すぎる。

「そしてもう一つ問題がある」

「金もなければ職もない、ですね」

景気の波ですね、わかります。給料がいい仕事がどうかではなく単純に仕事がない。

このままでは俺たち二人は餓死してしまう。

え、神様？俺達が生き残れたらどうにかするよ。

「どうしたもんかね。これは」

「面白そうな話してるじゃない」

縁側で話していた二人に声をかけてきたのは、幽香だった。

なんで此処にいるんだ？

「こんにちは幽香さん。当神社に用、という訳じゃないですよね」
「ええ、今日は司貴に頼みがあつて。いえ、今日というのは語弊があるかしら」

「何の用ですか。こっちは金がなくていろいろ困つてるんですよ」
頼みというのもできれば引き受けたいが今はお金がないのだ。

「今、仕事がないって言つてたじゃない。だから仕事を持ってきたあげたのよ」

「……はい？」

「花畑の手入れを手伝つてもらおうかと思つたのよ。それなりに知識はありそうだったしね。もちろん報酬は支払うわよ」

幸運つてレベルじゃねーぞ！ちなみに俺が植物に詳しいと思つて
いるみたいだけど、すいませんそれあなたの知識です。（以前の交
戦中に読み取り）

あれほど戦闘中に必要のない知識はなかったがな。

「どうします司貴さん？」

「どうするもなにも受けるしかないって。……そうだこの機会に
何でも屋 を開くのでしょうか」

「あら、面白いわねそれ、この依頼とは別にサンドバックになつて
もらう依頼なんてどうかしら」

「お断りします」

一撃死してしまうわ！命は投げ捨てるものではない……

「人間から妖怪、誰もが依頼できる何でも屋。これでいいじゃない
か」

「自営業ならとりあえず二トは回避ですね」

「……たまに酷くない？俺、働き者な方だって、絶対」

純粹というより天然。豆腐メンタルな某王様なら発狂してるかもしれないな。

「じゃあ早速来てもらっわ、準備はいいかしら」

「ああ、じゃあスキマを使うか」

最近俺が二ートに見えるのって、この移動方法のせいだと思う。

「早苗も来るか？きれいな花畑だし、まさかこの状況で花畑の主に襲われるってことはないだろう」

「失礼ね、まるですべてを焼き尽くす魔人みたいな扱いね」

それ以上じゃないだろうか。そう思ったが口に出すのはやめ이었다。

「いいですね！私も行きたいです！！」

早苗が嬉しそうだなによりです。神社は放置で、神様二人で何とかしてみろっての。

「じゃあ行くか」

俺はスキマを開く。

「うわー！すごくきれいですね、幽香さん！」

「そう？そう言ってもらえると嬉しいわ」

到着するとそこには辺り一面に花畑が。何度見てもすごいとしか
言いようがないな。

優佳は少し照れているんだろうか。やっぱり怖い人ではないのだろ
う（司貴にとっては）

「向こうの方も見てきていいですか！？」

「ええ、いいわよ」

幽香の言葉を聞いた途端に走って去ってしまう早苗。

「早めに帰ってこいよ」。後は花を絶対に抜いたりするなよ！いい
か？絶対だぞ！！」

「なにフラグ立ててるのよ」

「体が勝手に動いちゃったんだ」

道化師の真似はもうやめにするか。笑い声までは真似れんし。

「じゃあ、あなたには敷地の半分の花を面倒見てもらうわ。できれ
ば毎日と言いたところだけど・・・」

週に三回来てくれるかしら？」

「お安いご用で。さて始めますかね」

少年作業中・

「やばい死ぬ」

広すぎる、いくらなんでも広すぎる。

これを今まで一人で管理してたって、物理的に無理じゃないか？

「お疲れ様、紅茶をいれたわ」

「何でへばってないんだ・・・」

「好きなことをするのにへばる訳ないでしょう」

凄すぎる。俺には好きでも無理だわ。

「飲ませてもらうとするか」

紅茶に口をつける。うまい。紅魔館のメイドも紅茶を入れるのはうまかったが、

これも相当なものだ。

「おいしいよ。これも自分で？」

「ひまわりとは別にね、自慢の一品なのよ」

確かにいうだけのことはある。

そうして紅茶を飲んでいると早苗が戻ってきた。

「どうだったかしら」

「本当にすごかったです！どこまでいっても花畑で！！」

見慣れない景色を楽しんできたみたいだ。

ふだん仕事ばかりだからこういう早苗を見るのは久しぶりだと思う。

うん、やっぱりこうしている方が似合うな。

「さてと、早苗、そろそろ帰ろっか」

「はい！」

「あらもう帰るの？」

もうと言ってもすでに日は落ちかけている。

手入れにかかった時間は、四時間といったところだろうか。

「あまりお邪魔しても悪いので」

「そう、仕事の時以外も来てくれると嬉しいわ。私と同じくらい強くて傲慢ではない人なんていないもの。——これを渡しておくわ」
俺はその包みを受け取る。包みの中を確認させてもらうとお金が入っていた。

「これは？」

「前払いよ。当分の間は働いてもらうつもりだから、契約料だとも思っ」

結構な額なのだが。労働力に対しては見合ってるかもしれない。

「ありがたくもらっておきます」

「じゃあまたね。早苗もまた来て頂戴ね。お茶菓子を用意して待ってるから」

そう言っって早苗の方見て微笑む。最凶の妖怪はどこへ行ったのやら。

まあこっちの方が似合ってると思うが。

「それでは」

「幽香さんも神社に遊びに来てくださいね」

・・・さすがにそれもどうなんだろうか。

普通の人が恐怖で来れなくなりそうなんだが。

二人が入るとスキマは閉じる。

「やれやれね、第妖怪と言われた私が人間二人にまた来てね、か

歳はとりたくないわね」

自分の変化に気付き、少々可笑しくなってしまった。
でもそれもいいのかもしれない。——さて

「お菓子のレシピでも見てみようかしら」

人は変わる。妖怪も変わる。

変わらないものなど無いのだ。

——変化をもたらす新たな風が幻想郷に舞い降りたのかも
しれない。

新生活開始（後書き）

第十八話、日常編が当分続くよ！

まさかのDSではない幽香。

司貴や早苗に影響されています。

・・・まあ、花畑を荒らそうがものなら吹き飛ばされるのは変わりませんけどねwww
なぜこうなったって？

なんか子供には優しいという二次創作もあるらしい（mugen wikiより）

だからさらに優しくしてみたらこうなった。

・・・これホントに幽香なのか？

それではまた

そうだ、修行しよう（前書き）

今回「七色のひぐらし動画」を聞きながら作ったので何かおかしい
かもしれません

そうだ、修行しよう

何でも屋を開いて一週間。

現時点で幽香以外の依頼はない。

宣伝をパパラッチに任せたのが間違いだったかもしれない。

ちなみに依頼は寺子屋の一角にポストを置かせて貰っている。

「仕事がないというのは困りものだな」

「神社の仕事手伝いながら言います？それ」

「何かもう慣れてて、この仕事」

仕事がない日は神社の掃除を手伝っているのだが、もうこれは仕事というよりも日課と言っべきだな。

「そうだ、掃除終わったらちょっと出かけてきていいか？」

ふと思いついたことがあるので早苗に問う。

「どうかしたんですか？」

「ちよいと修業に」

「それで私のところに来たと」

「そりゃ、咲夜以上にナイフをうまく扱う奴なんて知らないわけだしな」

修行と言ってきた場所は紅魔館。弾幕ではなくナイフの扱いを訓練しようと思ったわけだ。

「付き合ってあげたいところだけど、仕事があるから・・・」

「だよなあ・・・」

妖精メイドがいるとは言ってもメインは咲夜が働いているのは間違いない。

「咲夜、仕事はいいから手伝ってあげなさい」

「お嬢様、よろしいのです？」

レミリアが館から出てきた。いつぞやの門番が日傘を持っている。

「紅茶だけは淹れて頂戴ね」

「わかりました」

「じゃあ司貴、私もその訓練を見てみたいから、やるなら元フランの部屋を使って頂戴」

元？部屋変わったのかフラン。前のは地下牢獄みたいなものだったけど。

「じゃあ入らせてもらいますか」

「言っておくけど私の指導は厳しいわよ」

「それくらいがちょうどいいよ」

そう言つと紅魔館の中に入っていく。

少々あの部屋はトラウマになっているのだが。

「司貴」

グシャア！！！！

ああ忘れてた、この体当たりを。

その後、目が覚めるのまでには一時間近くかった。

「踏み込みが甘いつ！」

「わかってるよ!!！」

「遅すぎるのよ!!もう何回死んでると思ってるの?!!！」
「言ってた通りスパルタ(?)だな。死にかけてる段階でスパルタを超えている気もするが。」

「ここだつ!!!!！」

咲夜の背後を取ってそのまま切りかかる。

「無駄よッ!!！」

咲夜の握っているナイフではじき返される。

「ナイフでの接近戦は虚を突くこと大切なのよ！馬鹿正直に背後を取ろうとしても駄目よ！！」

「さすがに長い間使って来ているだけはある。ナイフの扱いじゃあ勝てそうにないな」

ナイフを握って一ヶ月もたっていない俺に隙など中々見せない。

「がんばれ司貴」

「咲夜も本気ね、むしろ本気で戦わせている司貴の方がすごいと思うわよ」

「時間停止が効かない相手に手抜きは必要ないと思うのでそれは関係ないだろうに。あくまでナイフでの戦いなのだから。

「ちっ！これだけ差があるか！！」

「簡単に超えられてもらっては稽古をつけている意味がないので」「そうかよ・・・」

今までただの一度も入れられていない。だったら――

「？どうしたのかしら、いきなり距離なんてとって」

「ギャンブルを試みようかだね」

俺は咲夜から距離をとる。ちょうど普段咲夜がナイフを投げつける時に取る距離だ。

「？お姉さま、司貴は何をしようとしてるの？」

「見てなさい、司貴が面白いものを見せられると思うわ」

俺は腕をまっすぐに振り上げそして狙いを定める。

「――極死」

投げつけられた一本のナイフは咲夜に向かって真っすぐ飛んでいく。

それは単調で、まるで策と言えるものではない。

「ナイフの投擲で私が負けるとでも！」

咲夜もナイフを投げつけてそのナイフを撃ち落とす。

「そのまま、私のナイフで刻んであげ「それは楽しみだ」・・・え？」

声は咲夜の真上からする。先程まで司貴がいたはずの場所には何も無い。

あの一瞬で移動したとも言うのか。

「ゲームセットだ」

司貴は咲夜の首をいつでもへし折れるように腕を掛けていた。腕を放すと、自分の投げつけたナイフを拾いに戻る。

「やるじゃない、咲夜をナイフで倒すなんて。ナイフというよりは体術だけでも」

「あれには驚いたわ。あなたを視界から外したつもりはなかったのに」

「司貴すごい！」

二度目は通じないだろうけどな。そう言っただけで司貴は苦笑する。

「視界から外れたのは反撃のタイミング。咲夜が自分自身の弾幕を張った時。」

そのタイミングで俺は距離を詰める。逆に俺に気を取られすぎればナイフでグサリだ」

「タネが分かれば簡単。でも避けるのは容易ではないわね」

「まさか一目から私が負けを認めないといけないなんて・・・」

自信を無くすわ・・・」

思いついたのも奇跡、成功したのも奇跡なのだな。

「そんなこと言わないでくれよ。実力じゃあ咲夜には全然勝てないんだしさ」

「それもそうね……。うん、また時間があるときに来なさい司貴。また稽古をつけてあげるわ。私も学べることがありそうだしね」
奪いつ奪われつか。強くなるのにはそれが一番早いかもしれないな。

「咲夜、あなたの淹れた紅茶が飲みたいわ。早くして頂戴」

「かしこまりましたお嬢様」
すぐに部屋から咲夜は出ていく。

「フランもちよつと部屋から出ていてくれるかしら。司貴に話があるの」

「うん分かった」じゃあめーりんのところで遊んでくるね」
美鈴哀れなり。それにしても俺に話とは何だろうか。

「司貴、あなたは私の能力を知っているわよね」

「まあ、一応。運命を操る程度の能力だったな」

運命。ある意味、早苗にとって相性の悪そうな能力だ。

尤も、運命を絶対なものと仮定するならばだが。

「私はこの力で人や世界の運命を見ることが出来る。でもね、あなたと早苗の運命が見えないのよ。まるで見てはいけない物かのようにね」

「俺と、早苗の？」

おれだけではなく早苗もだというのか。これが何を意味しているのかさっぱり分からない。

「あなたたちが悪い人間ではないのは分かってるわ。でもね、こんなことは今までなかったの。だから伝えておきたくて」
「そうか……。覚えておくよ」

「お嬢様、紅茶をご用意できました」
「今行くわ」
「俺は帰らせてもらっよ」
そう言っ て元フランの部屋から出る。

「あら、紅茶はいいの？」
「ああ、あんまり遅くなるとみんなが心配するしな」
—— 特別にあいつはだれかがいなくなることには憶病だしな。

「何か言っ た？」
「一人ごとだ、気にしないでほしい」

俺は紅魔館を後にして神社への帰路に就く。

その道中先ほどのレミリアの言葉を思い出していた。

「運命が見えないか。これが何に繋がるのかはわからないけれども」
——あいつの身に何が起きたとしても守るだけだ

司貴の決意は固く、強い

そうだ、修行しよう（後書き）

第十九話

（作）＜あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！

「おれは　日常編を書いていたと思ったら　シリアスフラグを立てていた」

な…　何を言っているのか　わからねーと思うが

おれも　何をしていたのか　わからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…　シリアルだとかギャグだ

とか

そんなチャチなもんじゃあ　断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を　味わったぜ…

そんな第十九話です。

そういえば、緋想天・地霊殿・星蓮船あたりのストーリーはやらな
いつもりなんですけどやった方がいいでしょか。

できれば感想の方にご意見をよろしくお願いします。

ではまた次回。

薬、ダメ、絶対（前書き）

今さら気づいたが宴会のときに何人か出していないことに気づく。

・・・今更すぎるわwww

薬、ダメ、絶対

「今日もないか・・・」

今俺は、いつものように寺子屋まで足を運び依頼の確認をしている。

ポストを置いて二週間目。

今のところこのポストは全くの無意味だ。

わざわざ自作したというのに・・・

「どうだった司貴？」

「だめです慧音先生、今日も仕事は無しです」

「そうか・・・」

真剣に心配してくれているみたいだ。

と言っても幽香という大型の客がすでにいるため、それ専門になっても別に問題ないのだが。

「まあ、あせらずに頑張ってくれ。私もできる限りは協力するよ」

「ありがとうございます」

さすがに人格者だと思う。こういった気づかいがありがたい。

とはいえどうしたものか。今日は花畑に行く日では無いし、することも特にない。

「酒でも買って帰るか。確かほとんど残ってなかったし」

この年で買って帰る物が酒というのもなんだか空しい話である。そんなことを考えていると道端で声をかけられる。

「あれ司貴さんじゃないですか、こんにちは」

「やあ鈴仙、こんにちは。人里出会うのは初めてかな」

迷いの竹林には滅多なことでは近づかないので会うことはない

思っていた。

近づかない理由が「殺し合いに巻き込まれないため」というのも物騒な話だが。

「司貴さんが何でも屋を始めたと聞いて、今日は依頼に来たんですが」

「何だろう、嫌な予感がするね！」

永林先生の腕は知っているが、それ以上に月の策士というイメージの方が強い。

厄介事じゃなければいいが。

「そんなこと言わないでください。依頼は薬の材料の採取です」

「思ったよりは普通だな」

俺の能力を利用した実験とか言われてもおかしくはないからな。

「もちろん報酬は用意します。できるだけ早めをお願いしたいのですが」

「おk、引き受けた」

家でごろ寝 仕事。

情眠をむさぼるくらいなら働こう。

「それではこれが材料のリストです」

それを見て俺は、初めて吸血鬼や幽香に会った時よりも恐怖を感じたのは間違いない。

「幻想郷って何なんだホント。まさかあんなものまでいるなんて」

現在の採取材料

サボ。ンダーの棘

キ。グベヒんもスの牙

ポー。ヨン

。クマター
トリシュー。の尾

色々とおかしい。幻想郷には普通に龍がいるとは知らなかったぞ。
これホントに薬を作るのかどうか怪しいんだが。

「しかも最後にもう一つ・・・」

神竜の鱗

これ採取してきて大丈夫だったのか？
とりあえず速攻で倒してきたけど、よくよく考えると放ってた力が
神力だった気が・・・

「終わったことを気にしても仕方がない。さっさと帰るか」
神龍とぼかしてあるが、実はあれがこの幻想郷の守り神である竜
神であることには気づいていない。竜神エ・・・

場所はかわり永遠亭。まあ一日で終わらせることができてよかった。

神竜には焦ったが。

「すみません。依頼されていた品物を届けに来ました」

「・・・もう採って来たのね」

「早さに定評があるので」

「正確性と速さを追求してこそその仕事だと思う。」

「・・・本当に竜神様の鱗を取って来てるわね」（ボソツ）

「？何か言いました？」

「いいえ、何も。そうね、折角だから薬の調合を見て行かない？面白いものが見れるはずよ」

これはあやしい。（モルモット）実験動物にされるのが目に見えている。しかし悲しいかな、俺も人間。好奇心というものには勝てないの

だ。

「見せてもらいます！」

「嬉しい事言ってくれるじゃない」

恐怖も忘れてホイホイついに行ってしまうのだ。

当然後悔することになる。

「まずは材料をすべてすりつぶして・・・

次にダー。マターからエネルギーを抽出する・・・

そして最後にポーショ。を流し込んで・・・よしできたわ！！！」

伏字の意味がないとかいうなそこ。伏せることに意味があるんだ、多分。

「すごい色ですね永林先生。ちなみにその薬は？」

色はダークマターを使っただけあつてか真っ黒。毒なんじゃないのか？

「よくぞ聞いてくれたわね。この薬はその名も 最強尖兵 ！」

とある尖兵のような動きと攻撃力を再現する薬よ！！！」

「要するにドーピングですね」

「という訳で実験台になつて頂戴、司貴」

「脈絡なさすぎだよ！？やっぱ俺が飲む流れかよ！！？全力で断らせてもらっわ！！！」

予想はしていたがやっぱ無理。自分で採ってきた材料なうえに、作る過程まで見せられて飲める物じゃない。

「駄目よ。鈴仙捕まえて」

「すいません司貴さん」

「謀ったなっ！！鈴仙！！！」

背後には鈴仙が待ち構えていた。がっちり俺をホールドして離さない。

「司貴さんに逃げられたらあの薬を飲むのは私なんです……!!」

「知るかつ!!俺だってまだ死にたくはないわ……!!」

「残念ね、時間切れよ」

必死の抵抗も無駄となる。

口の中にすべての薬を流し込まれ、飲み込む。

ウエツ、気持ち悪つ。

鈴仙解放された俺は、その場に倒れこむ。

「どうなるのか楽しみね」

さっきの熱弁は何だったんだ、効果も知らずに飲ませたのか。

「司貴さんごめんなさい……」

まあ、許そうか。正直あの先生と一緒に過ごしてたら狂いそうだね。

薬を飲んでから続いていた不快感が消え、意識がはっきりとし起き上がる。

「やれやれ、近頃の女性はやんちゃで困る」

「司貴、口調がおかしいわよ」

別に考えてしゃべっているわけではないのだが。
勝手に体と口が動く。

「師匠！？大丈夫なんですかこれ！！？」

「とりあえず拘束して経過を見るわよ。行くわよ！優曇華！！」

「ハイっ！」

異常に気づきとりあえず拘束しようとしてくる二人。

いや、拘束する所なのかそこ。

「クツクツクツ・・・遂にここまで昇ってきたか」

何を登ってきたというんだ。この薬本当に害はないのだろうか。

「その勝利への執念に敬意を表し、この私自らが相手をしてやろう
違います。あの人たちが持っているのは探究心と生への執着です。

「幻朧月睨 ルナティックレッドアイズ」――

「天網蜘蛛網捕蝶の法」――

いきなりラストスペルですかそうですか。
死んだ俺。体動かねえし。

カアン！

謎の音とともに俺の体が弾幕をかわす。否、相手の背後を取るとい
った方が正しいだろうか。

「なっ・・・！！」

「え・・・！」

ドスン！

一撃である。鈴仙はともかく、永林はこの幻想郷の最強クラスの

人物のはずだ。

それを・・・

「I'm a perfect soldier!」

カアン！カアン！カアン！カアン！カアン！カアン！カアン！カアン！カアン！カアン！カア

・・・どうでもいいがだれかこれを止めてもらえないだろうか？

結局薬が切れるまで司貴の体は動き続け、
翌日筋肉痛に苛まれたらしい。

薬、ダメ、絶対（後書き）

第二十話、ネタ回。

F。、遊。王、。イザー。ツクル、んで阿部さ（アッーーーーー！
こんな感じが。なんとまあネタ回。

カイザーナツクルわかる人いたのだろうか。

格ゲーやってる人なら知ってると思う。

いまだに最強とうわさされるボスだし。

次回はどうかまだ考えておりません。

原作ストーリーについてのことは感想にできればお書きください。
ではまた。

始まりは突然に

「暇ね」

「暇だな」

「暇なんだぜ」

諸事情で博麗神社に着きました。
魔理沙もいるのだが予定通りだ。

「司貴。私から依頼したいことがあるんだぜ」

「何だ？言ってみろ」

「図書館への侵入を「断る」まだ言い終わってないんだぜ！？」

「そこまで言ったら分かるだろうが」

どうせ盗みの手伝いをさせようとしたんだろうが。

「盗むんじゃないぜ！死ぬまで借りるだけなんだぜ！！」

「それを人は盗むというのよ」

「今日ここに来たのはお前の監視を依頼されたからだぞ？」

「なん・・・だと・・・？」

「パチュリーからな。図書館には入れないようにしてくれだ」と
この依頼で俺の平日はほぼつぶれたと言っても過言ではない。

この仕事は週二日。土日以外は仕事で埋まったよ。やったね！

「だったら紅魔館に居なさいよ。わざわざ魔理沙に教えなくたって」
「教えてら来る回数減るかもしれないと思って」

スペルカードを魔理沙に見せながら言う。

今の俺なら魔理沙を撃ち落とすのなんてわけない。

「むむむ、新しい侵入方法を考えないといけないんだぜ」

「諦めるという方向性はないのか」

「私に撤退はないんだぜ。退かぬ！媚びぬ！！省みぬ！！！」

「媚びろとは言わないが退いてくれ、そして省みる」

まあいいか。結局盗みに行ったら撃ち落とすだけだし。

ナイフは殺傷力が高すぎるね。

死の点突いちゃいそいで。

結局、茶を注いできてもらって縁側でのんびりしてるだけ。
紅魔館にいて本でも読めばいいのだろうか。
この仕事チヨイ暇だわ。

「司貴、何か面白いことしなさい」

「知ったことか。一応俺は仕事で来てるんだ」

「全くはた迷惑なんだぜ」

「お前が言うな」

見事なシンクロ。

まあ魔理沙の扱いを少しでも知っていればこうなるだろうが。

「じゃあ、早苗とあんたの関係について」

「おっ、それ乗ったぜ！」

「同居人兼、家族。これでおk？」

何を言い出すかと思えばそんなことが。
適当に流せばいいだろう。

「ねえ、それ本気で言ってるの？」

「はてさて何のことやら。俺は人の心というものには鈍いので」

「いらつとくるわね、女の心をもてあそぶと痛い目見るわよ」

「大丈夫だ、多分な。いつかはだけどな。」

そのことは、そのうち・・・だな。

俺だって男なんだと。

「お邪魔するわよ」

「その現れ方はやめてくれ。せめて話している間に割り込んでくるのだけは」

霊夢の顔が見えていたはずの場所には、スキマから上半身だけだした紫が。

押し戻そうかとも思ったがやめとこう。

「昼間からこんなところでお茶とは言い御身分ね」

「一応仕事中なんだがな」

「何しに來たわけ？せつかくこれから司貴をいじろうと思っていたのに」

まだ引つ張る気が。

気にしてないからいいんだが。

「今日は司貴にね。依頼をしようと思って」

「またか。何のだよ。言つとくが犯罪には手を貸さんぞ」

「まだ根に持ってるのかよ」

「そりゃあね」

何でも屋を何だと思っているんだ、こいつは。

「ここでは話せないわね。私の家に着て頂戴」

「マヨヒガまで？骨が折れるね」

「いいから来て頂戴。それなりに大事なのよ、この依頼は」

「わかったよ。じゃあちよつと行くわ。またな霊夢、魔理沙」
俺と紫はスキマに入り込む。

「また来なさいね」

「ハッ！？今なら紅魔館の警備は薄い！？？」

「自重しろよ」

魔法使い改め盗賊でいいんじゃないのか。

能力も「すべてを盗み取る程度の能力」とかにして。

「行くわよ」

「ああ」

全身がスキマに飲み込まれる。

「さて、着いたわよ」

スキマの中を通ってしか来れない空間にある家、マヨヒガ。
あまりにも異様な光景だが、慣れるように努力しよう。

「司貴じゃないか、どうしたんだ此処に来るなんて。珍しいじゃないか」

「こんにちは藍さん、今日は紫さんに呼ばれて」
宴会以来、会って無かったな。

「紫様が？」

「そうよ。悪いけど藍も席をはずしていてね」
「わかりました」

藍さんにも聞かせられないのだろうか。
あれ、犯罪臭がしてきたぞ？

「さつさと本題に入らせてもらっわよ」

「どうぞ」

部屋に通された俺は、依頼の内容を伝えられた。

「そんなことを……」

「頼めるかしら。これは大切なことなのよ」

俺は悩む。今までの依頼とはまったくの別物だからだ。

「……一週間先まで予定がある。それまで待ってくれ」

「いいわよ。大変ね、お仕事」

「あんたの仕事の方が大変だよ」

言い終えると自分の能力でスキマを開く。

「帰らせてもらっよ。いろいろ準備したいんでね」

「よろしくね。良い結果を期待しているわ」

——この依頼から運命は動きだす。

始まりは突然に（後書き）

第二十一話、始まりの時

一日一更新が途切れちまった畜生め。
打つのが遅いから仕方ない。

次回からはシリ阿斯に入る予定です。
やっと書きたかった部分に入れる。
では。

守屋司貴の消失？（前書き）

今回から早苗視点が中心です。
というか主人公の出番はなくなっていく。

守屋司貴の消失？

——八月初頭。

交通量一時間あたり平均五台。
JR使用者一日推定百人前後。
気温、摂氏三十八度。

——その夏。

あまりの息苦しい暑さに、

窒息するサカナ見たいと誰かが言った。

「どうだ、かつこ良くなかったか？」（ドヤッ

「神奈子様、どや顔なんかするもんじゃないですよ」

「暑さにやられてるんでしょ。だいたい幻想郷には車も電車もないじゃん」

「やめてくれ二人共！そんな痛い子を見るような目で見るのはあああ……！」

この神社の神様は少々自由すぎるのだが。
ゴーイングマイウェイ。

「それにしてもその置手紙本当なの？」

「ええ、朝起きた時にはもうこれが……」

早苗は手に持っている紙を広げる。

手紙の内容はこうだ。

——前略、皆様へ、って堅苦しいか。

紫さんの依頼で外の世界の妖怪の勧誘に行ってきます。

当分は帰れないと思うので神社の方はよろしく。

帰るまで頑張ってるね。

一応謝っておく。悪いねミ

「せめて直接伝えてから言ってくれればいいのに・・・」

「まあまあ、司貴だっているいるあるんだよ」

「うう・・・」

なんだか置いてけぼり食らったみたいで寂しい。

ついて行けないにしても顔くらいは見ておきたかったな。

「にしても、妖怪の勧誘って何なんだ？もう十分すぎるくらいに強いのがたくさんいるだろうに」

「新参者には理解できない事情つてのがあるんじゃない？」

「司貴さんも新参者でしょうに・・・」

「それもそうだな」

「だいたい何で司貴が？自分で行けばいいじゃないか？」

確かにそうなのだが。

「それについては私がお答えしますわ」

三人の間にいきなりスキマが開く。

普段司貴が使っているため開いた瞬間に驚くことはなくなっている。

「何だ、紫か。説明してくれるんならありがたいねえ」

「今お茶を入れてきますね」
私はお茶を注ぎに台所へ立つ。

居間に通された紫と三人はお茶をすすりながら司貴について話していた。

「で？うちの司貴は結局どこに行ったんだい」

「正確には言えませんが、外に残っている数限りなく少ない妖怪のところですよ」

「だったら司貴に頼んだ理由は何なのさ？自分で行ったらいいじゃん」

「私のようなものが行けば警戒されますわ。その点、司貴は人に気

に入られやすい人。

ああいった人格の者の方が交渉には向いているのですよ」

紫さんが脅しをかけながら交渉するのも同じようなものだ、
と思っただ、口に出さずにお茶と一緒に飲み込んだ。

「まあ問題ないですわ。彼は強いですし、それに賢い。あの賢さこそが人の最大の武器ですもの」

「同感だね。司貴には言葉で勝ったことなんて無いよ」

「すぐに帰ってくるんですよね!？」

大丈夫と言われても心配なものは心配なのだ。

「早苗さん、心配しなくても大丈夫よ。まあ一、二週間つてところね。」

「そうですか・・・」

「気にしないの、早苗。そんな顔してたら司貴だって戻ってきちゃうよ」

「それは私としては困りますわ」

「物の例えだから大丈夫だって」

そうだ、彼がいらないからこそしっかりしなければ。

この神社を守るのはもともと私の役目だ。

「あなた方がきて早二ヶ月、か。早いものね」

実はすでに守矢神社が幻想郷に来てから二カ月がたっているの
である。

端折りすぎ？気にするな。

「この二カ月は何の問題も起きていないし、その兆候もない。こう
いった平穩も悪くはないものね」

「普段どれだけバタバタしてるかがよく分かるな」
静かな方がイメージできないのだが。

「そうね、普段から騒がしい方が普通な所よ。ここは——でも
ね、」

——いつ起こるか分からないから異変なのよ。

台本は整っているのだ。

後必要なのは何か？それは

当然、俳優たちだろう――

守屋司貴の消失？（後書き）

第二十一話、主人公は投げ捨てるもの（キリッ
最近ワラキー呼んでないね。

早苗視点で始まる今回。

見事にフラグですね紫さん。

フラグをへし折ろうか、それとも回収しようか。
まあどうするかは決まってるんですけどね。

それではノシ

タタリ

司貴が幻想郷を出てから一週間。
幻想郷にはあるうわさが流れていた。

幻想郷に、正確には幻想郷の妖怪の中で流れている噂。
夜な夜な妖怪を殺す殺戮者の噂だ。

夜が来るたびに現れ妖怪を狩る。

そして何の痕跡も残さぬまま朝には消えていく。

自分がいた痕跡だけではない。

被害者がいないのだ。

だがそれに気づくのはほんのわずか。
大妖怪と呼ばれるもの。または神々。そしてそれに匹敵する力の持ち主たち。
ごく少数だが気づく者もいた。

博麗神社には霊夢と魔理沙そして早苗が集まり、此度の件についての再確認をしていた。

実害はなただ、影のようにうごめく存在。

これは異変として扱っていいものかどうかすら怪しいものだったか

らだ。

「はあい、霊夢。それに魔理沙と早苗。集まってるようでなによりよ」

スキマから出てくる紫。この光景に通常時なら突っ込む者もいるのだろうが、

今の状況ではそのようなことはなかった。

「紫、一応確認するけど、今この幻想郷に起こっていることはあなたが元凶じゃないわよね？」

「冗談、私にそんな能力はないわ」

紫は嘲笑うかのように言う。

「だったらこれは異変として扱うのか？」

「そうね、確かに実害が出るわけではないのだけどもね。いや、出てなかったが正しいかしら」

「どういうことですか!？」

「順を追って説明するわ」

——時は遡り数時間前の人里

慧音は自分の生徒を家に帰したあと、買い物をしていた

「ふむ、久しぶりに妹紅を食事にでも誘ってみるかな」

そう思うと、先に妹紅のところへ先に行こうと思い、私は買い物をやめ人里の出口へ向かう。

「慧音さん、お出かけで？」

人里の門番が声を掛けてくる。

「ああ、ちょっと迷いの竹林までな」

「そうですか、お気をつけて」

そう言っ て私は迷いの竹林へ向かった。

迷いの竹林に着くと、私は異様な気配を感じた。
妖怪に近く、なおかつ妖怪より重く濃い。
そんな力を。

「こんな力を持っているものがここに・・・？あつ！」
思案にふけていると、視界の端に妹紅らしき影を見つけた。

「妹紅！待ってくれ！！」

言い終わらないうちに、私の足は妹紅の後を追っていた。
すると妹紅らしき影は、いきなり私目がけて弾幕を放ってきた。

「妹紅！いきなり何をするんだ！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も答えないまま、その影は消え去ってしまった。

「妹紅・・・？」

そのまま私は立ち尽くすしかなかった。

「これが里の守護者の証言よ。これと同じような証言がいくつもあるわ。

でもね問題はそんなことじゃないのよ」

「どういうことよ」

要領を得ない話し方に霊夢はいらついている。

「どうもね、噛み合わないのよ。吸血鬼、月の賢者、守矢神社の二柱、そして霊夢、

あなたに襲われたっているものまでいるのよ」

「はあ！？意味分らないわよ！？私はまだ何もしてないわよ！！」

「今あげたのはほんの一例。実際のところは幻想の実力者ほとんどに、よ」

この場にいる紫以外は驚愕した。

異変には首謀者と言えるものが存在するはずなのに、それが見つかからない。

さらに言えば、幻想郷のすべての実力者が容疑者だというのだ。

いつも通りだと言えばそうかも知れないが、決定的に違う点がある。

それは――

――すでにほぼすべての者がこの事件に関わっているというのだ――

「いつも以上に厄介よ。いつもなら怪しい奴に片っ端から当たって

いけば消去法でつぶせるけどこの状況じゃ無理ね。下手したら全員を敵に回すことになるわ」

「どうするんですか！？このままじゃあやりたい放題じゃないですか！！？」

私はこの場にいるが求めている答えを改めて求める。

だがその質問は無意味だったのだ。

「では、虚言の夜を始めよう・・・」

闇はすでに私たちを包んでいたのだから

タタリ（後書き）

第二十三話、スランプ？いいえ、能力不足です。
また文章おかしい気がする。

主人公不在のまま、幻想郷に襲いかかる驚異。

早苗たちはこの未曾有の敵を退けることはできるのか？
そして敵の目的は？

ではまた次回（・ ・ ・）ノシ

虚言の夜（前書き）

遅くなって申し訳ない。

カード集めに走っていたらこうなった。

反省はしている。後悔は（ry

虚言の夜

「ふむ、此処にお集まりだったかね。・・・俳優が集まって雑談とは感心しないね」

「・・・あんた、何者よ」

金髪で長身、そして閉じたままの目にマント。

幻想郷の者ではないその男は、不気味な笑みを浮かべながら近づいてきた。

「ワラキアの夜、とても名乗っておこうか。私には名前も形もさしたる意味はないのだね」

「どういうことかしら？」

警戒しながらも情報を聞き出そうとする紫。

「何・・・」

グサッ

「カハツ・・・!？」

「魔理沙っ!？」

「魔理沙さん!」

敵のマントによる攻撃が魔理沙の腹部を貫く。

間違いなく致命傷だ。このまま放っておいたら・・・

「キ——キキ、キキキキキキキ……!! ツマらないツマラナイ、人間ナンテツマラナイ! 自滅シロ自滅シロ、ツマラナイナラ自滅シロ……!」

「ツツ! 紫! 魔理沙を連れて逃げて!! あんたならできるでしょう!？」

「分かったわ! 二人とも死なないでよ!!」

紫は自分と魔理沙を、自らが作ったスキマに引き込む。

「む、大賢者には逃げられてしまったかね。なるほど、このソワレの主演はダブルキャストと理解した。大賢者の代わりとしてはいささか以上に役者不足だが——

よかろう!! 殺戮は筋書き無し(アドリブ)の方が愉しめるというモノ

——では本番前のゲネラルブローベとしゃれこもう!!」

「早苗、来るわよ!」

「はいっ!」

こうして、敵の意図もつかめぬまま、戦いは始まった。

「フハハハハハ！」

「この・・・！何なのよあの攻撃！？」

「弾幕ではなく、まるで黒い霧。しかも殺傷能力が極端に高い・・・！」

ワラキアの放つのは光り輝く弾幕などではない。
相手を包み込む黒い謎の霧状の存在。

それは敵を切り刻みひれ伏させる。

「喰らいなさい!!!」

—— 霊符「夢想封印 散」

全方位の攻撃。弾幕になれていない者ならば間違いなく直撃する攻撃。

だが、

「ブレイク!」

—— バッドニュース

「キャアッ!!!」

「霊夢さん!!!」

どす黒い霧をの塊が爪を形作る。

それは霊夢の弾幕を簡単に消し去り、その上で霊夢をも飲み込む。

「大丈夫よ!それよりあいつを見ていなさい!!」

「わかってます!」

「もろいな。私と踊ろうというのなら、まず人を超えることをお勧めするよ」

舐められている、いや違う。これがそれ相応の評価なのだ。

手も足も出ない。余裕があるのは当然のことだ。

「早苗、同時に行くわよ!」

「分かりました!こちらが合ませます!!」

—— 霊符「夢想封印 集」

—— 奇跡「神の風」

霊夢は敵に目掛けて集中攻撃を、早苗は台風のような弾幕を起こし逃げ場を奪う。

戦術としては正しい、否、最良の選択だった。

「カット」

「……え？」

「カット……カットカットカットカットカットカットカットカットカットカットカットオー！」

——ナイトオンザブラッドライアー

「なっ……！」

「そんなっ……！」

立ち上る黒い竜巻。それは二人の弾幕を飲み込み、打ち消し、そして、

二人を切り刻む。

「なんだ、これで終わりかね。もとより人間などに興味はないのだが、ここまでで盾がないというのもツマライナイ！もっと、足掻き！苦悩し……その体が人の姿を失うまで踊ろうではないか……！」

「……馬鹿にして。でもこのままじゃあ……」

「……」

零部は苦虫をつぶすようにして言うが、早苗はそれに答えない。

早苗はずっと違和感を感じていた。

この戦いが始まってから、いや、この敵が現れてからずっと。

このような敵から感じることはないはずの感覚を。

だがそのようなことは今さしたる問題ではない。

いま重要なのは、

「どうしたのかね。こうして時間を与えているのだよ？ならばソレを活かさなくてどうするというのだ。まったく今行っていることが、

殺し合いだというのが分かっていないようだ」

「早苗、しっかりしなさい！」

「………です」

「え？」

「……あるんです。あの化け物に勝つ方法が」

この場において戦意を残したものは二人。

狂気に包まれた狂気の吸血鬼と。

奇跡を呼ぶ幻想郷最後の希望に、だ。

虚言の夜（後書き）

PV70000突破！

これの見る方法知らないまま放置していて、今日理解したので見に来たら

こうなってた。どういことなの・・・

ここまで伸びるのも思って無かったので特別編とかも考えていません。

すみません。だめ作者で。

第二十四話、最悪の敵がここに。

別に終わりませんけどね。

ワラキーさんまじばねえっす！

今回も文章が変。

ワラキーのセリフ回しって微妙に使いづらい。

次回、奇跡は舞い降りるのだろうか
それではまた

終結（前書き）

遅くなつて申し訳ありません。
間があくとどうしても文章ががが。

終結

博麗神社での戦闘が激化していた頃、守矢神社の二柱はただ何をするわけでもなく早苗の帰りを待っていた。何もしていないのではなく、できないが正しいのだが。

「しかし・・・歯がゆいね。待つことしかできないってのはね」

二人は神であるがゆえに、自由に土地を離れると言ったことはできない。

それゆえ今回の異変には全く関わっていないのである。

「大丈夫でしょ、早苗はあれで賢い子だし。それに保険も掛けてあるしね」

「そうだな・・・」

「親が子供を信じているから、子供が応えようとしている。それだけのこと。」

戦局をどう動かすか。後は早苗次第だよ」

「待つのも大概つらいな・・・」

「・・・そうだね」

ここにいるのは絶対的な力・威厳を放つ神ではなく、ただの親がいるだけだった。

「・・・さて、何を見せてくれるというのかね。現人神よ」

ワラキアの声が、それだけで私の心を揺さぶる。

紫さんと魔理沙さんはまだ戻ってこないし、霊夢さんも既に満身創痍だ。

ここで私が止めなければ、幻想郷の柱を折られるに等しい。

「逃げなさい早苗！何を隠し持つてるのか知らないけど、半端な力が通じる相手じゃないわ！あんたじゃ「言わないでください」・・・早苗？」

霊夢さんが言いたいことは分かる。私の力じゃあ、何をしたらってかなわないだろう。

そう、私の力では、

「確かに私は弱いです。でも——」

そうして私は微笑む。勝利を確信できたから。

「——神様の力は強いんですからね」

——信託「神降ろしの儀」

スペルを宣言すると早苗の体を風が包む。それは強く、そして優しく。

風が止んだ時、早苗がいた場所に立っていたのは。

「・・・さあ、終わらせましょう」

金色の髪に注連縄そして御柱。

そこに立っているのは、諏訪子と神奈子、まるでその二人が合わさったような姿をした早苗だった。

「・・・ハハハハハ！素晴らしい！！人の身とは思えぬような神力！！！！」

「早苗・・・あんた・・・」

あの人の反応はどうでもいいですけど、霊夢さんを驚かせてしまったでしょうか？

とはいえそれも後です、そう今は。

「神々もただ漫然と時を重ねてきたわけではないようだ！ 見事だ！ 本物の神と見紛うその力！！実に素晴らしい！！！！そうではなくては面白くない！！！！さあ、踊るとしようではないか！！！！！！」

「そうですね。あなたを倒しましょう！」

目の前の異変を終わらせることに集中する！

早苗は神力を纏い、ワラキアに対抗する。

「・・・あれが早苗の本当の力なの？」

霊夢は戦う早苗を体を休めたまま見据える。

その姿は以前戦った早苗とは全く違う物。

スペルカードという枠の中での戦いでなければ、間違いなく私が負ける。

そんなことを霊夢は思っていた。

「リテイク！」

ワラキアが言い放つと、周囲を霧が囲み、早苗に襲いかかる。
だが、

「無駄です！！！」

——秘術「グレイソーマタージ」

その弾幕、例えるのならば散弾銃の弾を身にまとったか如く。

その弾幕を身にまとい、早苗はワラキア目がけて突進する。

「ライ！」

「ハアッ！」

霧の爪と御柱の打ち込みあい。

互いに引くことなく、力は拮抗する。

「クキキキキ！さすがというべきか！」

「その余裕もすぐなくなります！」

—— バットニュース

—— 秘法「九字刺し」

先程までより大きな爪で早苗を切り刻もうとするワラキア。
その爪を交差する二本のレーザーで相殺する。

「ふむ、このままではよくないな。同じことの繰り返しでは観客に飽きられてしまう」

途端、ワラキアの方から力を抜き二人は距離をとる。

早苗にはそれが何を指し示すのかがすぐに分かった。

だから彼女もそれに応える。

それが、必要なことだと感じたから。

この戦いを終わらせるためにも、そして——

早苗が感じていた違和感の正体をつかむためにも——

「さあ、幕と行こう！」

同時に溢れだす妖力。それはすべてを飲み込んでしまいそうなほど禍々しく、大きな物だった。

その力に対抗できるよう、早苗も最大限に力を高める。

—— ナイト オン ザ ブラッドライアー

—— 大奇跡「八坂の神風」

「cut・・・life led break down , b
eck on for the fiction! 駄作!!!」

「終わらせる！神の名にかけても！！」

白い竜巻と黒い竜巻、両者はぶつかり合い相手を食らわんとする。
ここにきて力は互角、いや早苗が押されているか。

「わたしじゃ、勝てないの！？」

「幕だ。奈落に落ちた役者に次はない。その闇で、永遠に訪れぬ再演を待つがいい」

勝利を確信したワラキア。

——が、次の瞬間。

——夢符「封魔陣」

「・・・ガッ！？」

ワラキアを立ち上る青い結界が包みこみその身を焼く。

「・・・悪いわね、奈落に落ちるのはあんたよ」

霊夢が言い終わったとき、拮抗する力を失った早苗の弾幕が、ワラキアの姿を飲み込んでいた。

弾幕が消えた時そこに残っていたのは、ワラキアの姿。
ただし、生き物の形を保てず血を流すかのように崩れていく姿だ
った。

終結（後書き）

第二十五話、決着。

ほんと遅くなつて申し訳ありませんでした。

夏休み課題と休み明けテストというコンボ

簡単に言つと←

ジョインジョイントキイデデデザタイムオブレトビューションバ
トーワンドゥサイダデステニーナギツペシナギツペシペシハア
ーナギツハアーntenシヨーヒヤクレツナギツカクゴオナギツナ
ギツナギツフウハアナギツゲキリユウニゲキリユウニミヲマカセド
ウカナギツカクゴーハアーテンシヨウヒヤクレツケンナギツハアア
アアキーンホクトウジョウダンジンケンK・O・イノチハナゲ
ステルモノ

バトートウーデッサイダデステニー セツカツコーハアアアアキイ
ーン テーレッターホクトウジョーハガンケンハアーン

FATAL K・O・セメテイタミヲシラズニヤスラカニシヌガ
ヨイ ウイーントキイ（パーフェクト）

こんな感じです。テストオワタ。

次回の更新もいつになるか分かりませんができる限り早くしたいと
思います

ではノシ

舞台裏のような何か（前書き）

はいまた遅くなりました。

いや、今度はカードだけが理由じゃないんですよ？

九月十日に会計簿記の大会があつてその練習とかで・・・

・・・ほんとうにすいませんでしたorz

舞台裏のような何か

先程までとは打って変わって完全な静寂。

ここで本当にあれほど激しい戦闘が行われていたというのが嘘の様だ。

しかしそこにはその戦いを証明するものがあつた。

そう、——崩れ落ちるワラキアの姿が・・・

「そうか、無駄か、すべて——」
その言葉をかき消すかのように、ワラキアの体から流れ落ちるのは……

ゴボオッ

赤き液体、血。

体から流れ落ちるそれは、人、いや妖怪にしても異常な量で、あたり一面にその匂いを充満させる。

「キキキキキキキ！ソウカ全テ無駄カ！ヤハリ欠落！！ヤハリ欠損！！ヤハリ決戦！！」

常人には耐えがたい匂い、その中心で狂ったかのように語り続けるワラキア。

「キキ！ヤハリ決定！！ききききき！ステニ無能！！ステニ変脳！

！スデニ低能！！トウニ死ノウ！！きき！きききききききき
 キキキキ！！！」

「——狂ってる、なんてもんじゃないわね・・・」

言っている言葉の意味などもはや理解したが、いワラキアの言動。しかしそのような言葉は早苗の耳には入っていなかった。

「何ヲ、何ヲ求メタノカコノ吾ハ！！？」

ヒ！！！この雫・・・・・・・・！！この滴り・・・・・・・・！！血！！！！この流れ落ちる命の血・・・・・・・・！！！！」

ワラキアの目からは、笑いながらも涙が流れていた。

この笑い泣き、そしてそれ以前から感じていた違和感。

ずっと持ち続けた一つの推測。
それを早苗は表に出す。

「あなたは――」
「ヒ？」

何の証拠もない推測。しかし早苗は、その推測に確信を持っている。

「あなたは どうして、そこまで狂ってしまったんですか？」

——司貴？」

——世界が、凍りついた。

「な、何言ってるのよ早苗！こいつが司貴なんて冗談大概に・・・」
その言葉を遮るようにワラキアは笑う。先程と何も変わらないように、
“演じて”。

[illegible][illegible]

「……なんでばれるのかねえ？結構マジでやってたのに？」

仮面は剥がれおちた。

ワラキアから滴り、流れ落ちていた赤い雫は止まり。
ワラキアの姿は、まるで粘土のようにグニヤリと曲がり、その形を変える。

そこに立っていたのは、早苗も霊夢もよく知る、司貴本人の姿だった。

「いったいどういうことよ！？説明しなさい！？だいたい魔理沙が……！」

「まあ落ち着け、説明は面倒だから他の人に頼むよ——

——なあ？紫さん？」

誰もいないはずの方向を見て、声をかける司貴。

しかし、幻想郷の実力者なら理解できる状況だろう。

「あら、司貴。もうギブアップなの？」

スキマを開いて出てきたのは、魔理沙を抱えたままの紫だった。

「魔理沙！」「魔理沙さん……！」

「大丈夫よ、気絶してるだけだから」

「いったいどういうことなのよ（なんですか）！」

抱えた魔理沙を縁側に寝かせると、霊夢と早苗が二人を囲むようにして問い詰める。

「……どうするんですか？この状況」

「逃げるなら、いや、もう遅いわね……」

幻想郷最強クラスであろう二人が、手負いの二人組に追いつめられる

ある意味レアなシーンだった。

「まあ、まずはおちつ「落ち着いてるわよ」・・・それはよかった」
苛立つてるし、怒ってるのは間違いないだろう。まあ口には出さ
んが。

「・・・司貴さん。何故私たちにあんな方法で戦いを仕掛けたので
すか？それにあの力・・・」

「力の方は簡単だ。俺の能力で霊力や神力を妖力に変換して、後は
幻術で姿を変えるだけだ。魔理沙を突き刺すとも含めて・・・
最も幻術は俺がやったわけじゃないが」

「私がやったのよ、もともとこの異変、というほどでもないけど、
この一件の首謀者は私だもの」

「異変というほどでもないってどういう意味よ」
喰いかかるように問う霊夢。

言葉を間違えればそのまま殺されそうだ。

「そのままの意味よ、だってこの博麗神社以外では何も起こしてないもの」

「な！？だってほかのところでも被害が出てるって！！」

「それを伝えたのは私よ？」

「でも妖力の塊みたいなもの何か所も感じたわよ！？？」

「悪い、俺がまき散らしてきた」

「・・・なんてことなの」

聞くと今まで聞いてぐったるとうなだれる霊夢。

狐に化かされるのよりよっぽど性質の悪い話なのだが。

「・・・早苗は驚かないんだな」

「まあ・・・犯人が司貴さんだって段階で」

「・・・まあいいか、納得できるようなできんようなだけど」

「それより私たちを襲った理由は？それによつては何をするか分かりませんよ？主に司貴さんに」

「怖いって！？しかも俺だけ！！？」

理不尽に聞こえるが司貴ゆえ仕方なし。

「理由は簡単じゃない。修行よ、修行」

「・・・はい？」

意味が分からないというような二人。

「だって霊夢はいつも修行サボってるんだもの。

異変を起こす奴がいつ出てくるかわからないって言うのに・・・才能だけじゃ何時か足をすくわれるわよ？」

「そ、それだけのために」

「じゃ、じゃあなんで私も？」

「それは俺が頼んだ。一回本気の早苗を見てみたいと思ってたしな」
「・・・」

「ついでに言うなら魔理沙に退場してもらったのは単純に俺が3対1は無理だから。」

魔理沙には悪かったがな」

「……………」

淡々と語る司貴と紫。

もはやそれを無言で聞くしかない霊夢と早苗。

「私は司貴の勝ちだと思ってただけだね」

「妖怪に化けた段階で負けなんじゃないですか？博麗を相手するのに妖怪は……………」

「そうかも知れないわね、だったら今度は神にでも「あんたら……………」

……………」逃げた方がいいかしら」

「回り込まれそうだからやめておこう、諦めるしかないな」

「そんなに死にたいのなら私がとどめを刺してやるうう！！！」

「霊夢さん！？ストップ！ストップ！！？」

早苗の制止も霊夢には届かず、博麗神社では、今日最大にして最高の弾幕が輝いたという。

……………二人くらい犠牲は出たが。

「———そういえば早苗」

「どうかしたんですか？」

弾幕の嵐を浴びて全身の自由を奪われたまま横たわる司貴は、忘れかけていた疑問を思い出す。

「どうやって俺だつて分かったんだ？ハッキリ言つて俺の要素なんて何一つ残さないように演じてたつもりなんだが・・・」

「勘ですよ」

「勘、ね」

「はい、女の勘ですよ」

「・・・前から変わらんよな、俺より上には早苗がいるっていうのは」

たぶんそれはこれからもずっと変わらないことで、

また、二人ともがその位置ぐらいが丁度いいとっていて、

——要するに二人の定位置なのかもしれない。

舞台裏のような何か（後書き）

久々にやると疲れた！

この話読んで、「何この展開、ツマンネ」って、なる人がいそうで困る。

書きたいように書くだけなんですけどね、結局は。

EDも既に決まってるけど万人受けするものではないのかも知れんし・・・

バッドエンドじゃないんだけどね！たぶん・・・

下のURLは作者が参加している遊戯王のレシピコンテストです。
大したことのないレシピですが、もしよければ投票してやってください。

<http://www.yugioh-deck.jp/deck/4798.html>

戦いが終われば当然・・・（前書き）

久々に週末以外の投稿。
疲れたぜ…

戦いが終われば当然・・・

— side 司貴 —

俺と紫さんが霊夢にやられてから数十分。
戦いも終わり、博麗神社には静けさが・・・
静けさが・・・

「宴会よ！」

「やっぱそうなのかよ!？」

静けさ? 似合わんよ。幻想郷には。

でもできれば寝たかったよ。もう俺ボロボロだし。

「宴会があると聞いて」

「帰れ、鬼」

気が付くと萃香が既に加わっていた。

さすが鬼だと褒めてやりたい。

「それ程でもないよ」

「謙虚だな・・・とでも言うと思ったか!? 言わねえよ!!? そして心を読むな」

「司貴さん落ち着いて・・・」

「悪い、まあ仕方ないか。不本意ではあるが」

「いいんじゃないかしら。今回はこちらに非がある訳だからね」

それを言われると痛いのだが。

俺も納得して引き受けた仕事だし。

まあ宴会だけですむなら安いものか。

そうだよねきつと。

「司貴、あんたには私の下僕として働いてもらうわよ」

「・・・mjd?」

訂正、宴会だけではありませんでした。

「後、私とも弾幕ごっこしてもらうんだぜ。なんだか不完全燃焼だしな」

「起きたか魔理沙。弾幕ごっこはいいが下僕って」

「冗談よ、冗談。たまに労働力になってもらうだけでいいから」

「拒否権は・・・ないですが、そうですか」

一応、拒否しようかと思ったが、霊夢の目が怖かったのでやめておく。

「じゃあこのメンバーを守矢神社に移すかね」

「?別にここでもいいんじゃないのか?」

「あ、神奈子様と諏訪子様が・・・」

「そゆこと、早苗を待ってると思うんで移動させてもらいますよ。紫さんお願いします」

「いやよそんな面倒く「やってください」・・・分かったわよ」

悪いが今回は強気に出させてもらう。

一応恩は売っておいたしな。

「・・・じゃあ行くわよ」

そう言ってこの場にいる全員をスキマで運ぶ。

「「宴会だ〜!!!」」
「・・・もつ何とかする必要はないよな。うん、きっとそうだ」

今回の宴会は内々のものと言っていいだろう。
まあ、直接かわつてゐるの5人だけだしね。
プラスαで何人か増えてるけど。鬼と神様が。

「とりあえず司貴はこつちで弾幕ごっこなんだぜ」

「今やんのかよ・・・」

もうやだこの戦闘民族の集まり。

「早苗」。こいつ借りて行くぞ」

「分かりました。無茶だけはしないでくださいね」

「せっかくだから司貴、今日靈夢たちとやり合った時の力を見せてほしいんだぜ」

「もうどうでもいい」

久々に言つた気がするこれ。

まあいいやるからには全力だな。

魔理沙さんが司貴さんを連れて行ってしまいましたが・・・
そういえば一対一で大丈夫なんでしょうか？

私たちでも二対一でぎりぎりだったのに・・・

あ、さっきの黒い竜巻が見える・・・

「早苗く、こっち着て酌しなさい。酌」

「あ、はい」

まあ、司貴さんがちゃんと魔理沙さんも連れて帰ってくるでしょう。
う。

加減もさすがにわきまえているでしょうし。

「分かりました。・・・なんであんな戦いをした後にそんなにお酒が飲めるんですか。もともと私は飲めませんけど」

「細かいことは気にしちゃだめよ。それよりあなたのこのの方が問題じゃない」

「？」

「あの力よ。なによあれ。反則もいい所じゃない。それを受け止めてた司貴も反則級だけど」

「あれのことですか。別に私の力じゃないんですけどね」

あのスペルカードを諏訪子様から貰ってなったら確かに危なかったですね。

そこも織り込み済みだったのかも知れませんが。

「あれは何でも、一時的に神奈子様と諏訪子様の力を借りることのできるスペルらしいです。私も詳しくは聞いてないのですが」

「ふーん、じゃあ私とやり合った時は一応本気だったのよね」

「もちろんです。私の実力じゃあ霊夢さんにはとても・・・」
「ちよつと悔しいけど。でも本当に勝てなかった。」

あの異変の時の霊夢さんにはまるで歯が立たなかったのだから。私じゃ追いつけないのかな・・・

「そ、でもあんただって十分強いわよ。幻想郷がおかしいだけで」

「それは言っちゃダメな気がしますけど・・・」

「そういえば、神奈子様たちが勝手に飲んでいるが大丈夫なんですよ。うか。」

まあ三人で飲んでるみたいだから大丈夫・・・

「・・・萃香さんは？」

「あれ、紫たちと飲んでたんじゃないの」

萃香さんはどこへ行ってしまったんでしょうか・・・

宴会の途中でいなくなるような人じゃないと思うんですが・・・

あ、司貴さんが帰ってきました、って。

「疲れた」。水くれ、水」

「いやその前に言わせてもらっわ。魔理沙だけじゃなくて萃香まで抱えてるのは何だよ」

「戦闘種族ゆえ」

「まあそうだとは思ってたけど」

「・・・幻想郷では常識に囚われてはいけないのですね!」

「囚われなくてもいいが投げ捨てはするな、判ってるよな!？」

何か司貴さんが言っているような気がしますますが聞こえませんね。

「チクシヨゝなんで勝てないんだよ」

「目が覚めて早々それか。真っ向勝負を挑みすぎなんだよ」

「鬼の私を力で超えるなんて・・・」

「人を脳筋みたいにするな!ちゃんと戦術だってあるよ!!」

「まあまあ、はい皆さん飲み物をどうぞ」

少々思考がトリップしてましたが最低限のことはやりますよ。

それにしても司貴さんはいじられると弱い時と強い時の差がありますね。

ちよっとおもしろそうです。

「まあいいや、今日は飲むぞ!」

「」「」「オオー!!!!!!」「」「」

——— 本当に宴会が好きな人たちだ。

戦いが終われば当然・・・（後書き）

もう、ゴールしてもいいよね・・・？
平日に打つと本気で駄目だ俺。

小説内での早苗のスペルについての発言にはちよっぴり嘘が混ざっています。

おそらく次回補足をするのでそこではノシ

八雲紫は忙しい（前書き）

今回は神奈子様達年寄ㇿ（ゲフンゲフン、大御所組視点だよ。
主人公は出てこないから注意！

おや、こんな時間に誰か来たみたいだ・・・（ピチューン

八雲紫は忙しい

まだ、司貴達の弾幕ごつこの音が辺りに聞こえていた頃。

傍目から見ると単なる大酒飲みの集団だった神奈子ら三人は、早苗達に声の場所で・・・

「やっぱり早苗が一番強いって！霊夢なんて敵じゃないね！」

「あら、そんなことはないわ。霊夢の方が強いに決まっていますわ」
・・・親バカ話をしていた。

もつやだこの幻想郷。

こんな幻想郷で大丈夫か？

「大丈夫だ、問題ない」

「誰に向かって言ってるんだ？」

「さあ？」

「大体、私等は何の話をしてるんだい？」

「もちろんどちらの子供の方が優秀かを！」

「そのとおりですわ」

「どっちも子供ではないだろうに・・・」

いつもは酔って大暴走な神奈子と諏訪子だが、今日は比較的落ち着いた飲み方をしている。

「だいたい今日は私たちに聞きたいことがあって近づいたんじゃないのかい？」

「・・・なんでもお見通しなのね」

「神の名は伊達じゃないんだよ」

「そう・・・」

さっきまでのだらけきつた空気とは一転。

今、この時をもってこの場所は、三人の強者の立つ戦場のそれと全く変わらぬ重々しさを放つ。

「それではお聞かせ願えるかしら？」

「何についてかにもよるよ、もっともそんな大層な隠し事なんて無いけど」

「それはよかったわ。・・・じゃああの子、風祝についての情報をもらせるかしら？」

扇で口元を隠すようにしながら二人を問いたただす紫。

その問いに神奈子は喉をカラカラと鳴らして笑う。

「見たまんまだよ。あの子はあの子さ。あくまで人間のね」

「・・・今回の目的は霊夢と早苗、二人の力を引き出すことだったわ。

でもそれには不安要素があったの」

「何の話？」

紫は急に話題を変える。

ズラすという方が適切かも知れない

「あの二人と司貴がまともにぶつかりあえば、圧倒的に司貴が上だと思っていたのよ。

だから本当は、魔理沙も加えた三対一、それを予定としていたわ」

「それで？」

「司貴が提案したのよ、風祝の本気を見てみたくなかったね」
「・・・」

「私は反対しても今度は人材がなくなるだけ、だから仕方なくそれに乗ったわ

だから私は今回の戦いには何も期待してなかった」
今回の戦いの裏で交わされていたこの約定。

神奈子たちとしても少々意外なものだった。
司貴がわざわざ早苗の本気を出させようとしていたことが。

「なのにこの結果よ。まったく守矢神社の面々には驚かされるわ。
神を二人幻想郷に引き入れるだけのはずだったのにね・・・」

「司貴の方は私たちも予想外なんだけどね・・・」

「早苗についてはこちらの非を認めるよ。説明不足だった」

「そうね・・・。説明してくれるのならそれでいいわ。もともとあ
あいった人間や妖怪を探すのが目的なのだしね」

仕方がない、という風な顔をした紫。

普段から計算だてて行動する彼女にとって、計算外の出来事とい
うのは面倒なものだろう。

「さて・・・。どこから説明した方がいいのかね」

「そうだね。早苗の血筋は知ってるよね」

「遠い先祖に洩矢神、あなたがいるということくらいは」

「・・・どこから調べてくるのやら」

これが彼女が幻想郷の賢者たる所以。

何処からともなく情報を集め、分析、利用する。

それによつて自らの目標へと近づこうとする。

素晴らしき行動力。普段から動けばいいものを。

「なら話は早いよ。あれは半分は自分の体に神をおろし、もう半分
は自分の普段使っていない力を解放、それだけのことだよ」

「・・・あれほどの力が、人の身に？」

「どんなに薄まっても神の血筋ということだね。」

まあ、幻想郷に来る前じゃあできなかったがね。降ろす神の力が弱まっていた外の世界では難しいものさ」

「二つの神の力を同時に扱えるとも？」

「そこは私たちが特殊な形をとった神故に、ってことだね。神の血を引く者が別の神に仕えるなんて事、めったにないだろうしね」

「それであれほどの力を、ね。司貴にしても早苗にしても・・・はあ・・・良い意味でも悪い意味でも当たりくじね。

私の計算はズタズタよ・・・

どうやって安定させたものか・・・」

そのままブツブツと何か考え始めてしまった紫。

まあ彼女は彼女なりに大変なのだろう。

「気にしないでいいんじゃないかな？司貴はともかく早苗はまだ目立って力を見せてるわけじゃないんだし」

「そんなことよりせっかくの宴会なんだ！もつと飲むよ！！」

「結局そうなるのね・・・。

まあいいわ。せっかくなのだから楽しむわよ！」

—— 幻想郷は今日も平和だ。

どんな「異変」が起きようとも、それが「異変」である限りは。

八雲紫は忙しい（後書き）

どうも、最近余計に仕事を増やした作者の高二病です。

二兎を追う者は一兎を得ずとって、失踪フラグを某所で立てられた私ですが、
逆に考えるんだ、小説を書ききるといっつものことしか追って無いと考えるんだ…

ポジティブに考えて頑張ることにします。
基本こっち優先の更新になると思います。

ではノシ

幻想郷での日常（前書き）

いつもなら遅くなって済みませんでした・・・
三連休に頑張ります。

幻想郷での日常

太陽の花畑。

そこは、幻想郷の最強の一角、風見幽香が管理する土地。

そこに咲く向日葵は、彼女の能力によって一年中枯れることなく咲き続ける。

その光景は美しくも恐ろしいと考えるのが普通だろう。

一年中花を咲かせ続ける能力を持ち、維持する妖力を持つのはまぎれもなく幽香自身なのだから。

普通の人間なら近づかず、妖怪ですら腕に覚えがあるものですら近寄らない。

命が惜しいものは、誰であれ花畑に近づくなかれ。

「そんな風に考えている時期が、僕にもありました」

「？いきなり何を言ってるのかしら」

「いや、なんとなく」

俺は今、花畑の手入れ中です。

幻想郷に来た時あの風評聞いて、そんで直接会って、戦って。

その後雇われようとはこの海のリハク（ry

「そろそろ上がっていいわよ。今お茶を入れるから」

「じゃあその間にもう少しやっときますね」

「わかったわ」

そのまま幽香さんは家の中に入って行った。

・・・平和だねえ。

数日前に大事やらかした本人が言うことでもないけど。

「・・・今日はこの辺にしときますかね」

俺は仕事を切り上げて幽香さんの家に向かう。
にしても疲れる。

知識は能力のおかげで問題ないけど、慣れてない作業ってのは結構体に来る。

「お疲れ様。・・・はいどうぞ」

「ありがとうございます」

俺は席に着かせてもらい、お茶をいただくことにする。

そう、お茶を・・・って何かクッキーみたいなものが並んでるのは俺の幻覚か？

「幽香さんこれは・・・？」

「見ての通りの焼き菓子よ。何か問題でも？」

「いや、何か意外で・・・」

「あら、失礼ね。・・・作り始めたのは最近なのだけだね」

何というか・・・本当に。

「人つてのは、直接話して分かるものだ実感させられますね」

「人、ではないけれどね」

「正直、下手な人間より人間らしいですよ」

すごく穏やかで、優しさを感じさせる人。

それが俺にとつての幽香さんのイメージ。

ああ、最初に会った時が懐かしい。

あの時は大分警戒してたからな・・・。

「それは褒め言葉なのかしら？」

「幽香さん次第ですよ。・・・このお菓子美味しいですね」

「自信作なのよ。気に入ってもらえてうれしいわ」

「少し貰って帰っていいですかね。きっと三人とも喜ぶでしょうし」

「ええ、いいわよ」

そのまま俺は、お菓子を袋に詰めて持ち帰る準備をする。

なんで袋があるのかって？

主夫は何でも持ち歩いているのだ！

・・・すいません嘘です。普通にスキマから取り出しました。

「ではお茶もいただいたことですし、そろそろ帰らせてもらいますね」

「そう？もつとゆつくりしていけばいいのに」

「次の仕事があるもので」

「残念ね。次に会えるのを待っているわ」

「はい、ではまた」

そう言つて俺はそのままスキマに入り込む。

この移動法をしていて太らないかと心配に　ゴンッ！！！！

・・・いきなり誰かに殴られたのだが。

心を読む上にスキマの中の俺を殴るとは・・・

あの人も気にしてたのか。今度マヨヒガを訪ねて見るか・・・

「到着、つと。そういえば俺がここを訪ねるのはいつも昼間だな」
目的地の紅魔館を目の前にして、ふとそんなことを思う。
一応、吸血鬼は夜行性だと思うのだが。
まあいいか。今日はそちらへの用ではないのだし。

「おい、美鈴。門を開けてくれ」

「その声は司貴さんですか？少し待って下さいね？」

「頼む」

声がすると同時に紅魔館の門が開いていく。

飛んで超えればよかったかと思ったのは秘密だ。

美鈴さんの数限りなく少ない仕事の様な気がするし・・・

そんなことを考えているうちに、門は既に開ききっていた。

「お待たせしました。今日はパチュリー様に呼び出されたのでしたね」

「ああ、いつも通り大図書館の警備だな」

「パチュリー様は大図書館でお待ちです」

「ありがとうございます」

今日はレミリアとフランには会わずに行こうかな。
いちいち襲われても敵わないしね。

「パチュリー、この本はここでいいのか？」

「いいわよ。手伝ってもらえて助かるわ」

「一応仕事のうちだと考えているので」

「本命は……。まだ一度も来てないものね」

「牽制が効いているんでしょう」

一応ここに俺がきている理由を確認しておく。

俺はパチユリーに依頼を受けてこの大図書館に来ている。

依頼の内容は簡単だ。泥棒を捕まえてくれ　これに尽きる。

まあ、俺がここにいるようになってから一度も来てないという状態で、

する事もないので本の整理を手伝っているのだが。

「まあ、あの盗人ならすぐに来るわ。どうせ正面突破で……」

「盗人とは人聞きの悪い。私は普通の魔法使いなんだぜ!」

「噂をすれば影、ね」

「来なければいいのに……」

いつか来るとは思っていたが、ねえ……。

全く読めないやつだ。

「何で来たのかと、来てもいいかな?」

「私の辞書に撤退の二文字はないんだぜ!」

「退け。媚びろ。そして省みる。もう来んな」

「そうもいかないんだぜ! 私にはここの本を借りて帰るという使命があるんだぜ!」

「最低の指名ね(だな)」

これで本人に悪気はないのだから困る。

とはいえ、幻想郷の面々は大体そんなものか。

はぁ……疲れるわ……

「そういう訳で力ずくで行かせてもらうんだぜ!」

「どついう訳だ……」

「司貴、任せたわよ」

席を立ちその場を離れるパチュリィ。
いやな予感がするのは俺だけなのか？

――魔砲「ファイナルスパーク」

「ここでそんなもん撃つなあ！！！」

一番悪い予想が当たったよ！

本に何かあつたらおれも怒られるんだぞ！！

「・・・これだから。幻想郷は退屈しない」

――終符「地上最古の砲撃」

ああ、初めての戦いの時を思い出す。

あの時は、俺たちが侵略者で魔理沙たちが守護者、そんなところか。

・・・どちらの立場でも負けるつまりはないが。

俺の砲撃が魔理沙の砲撃をかき消し、そのまま突き進む。

「・・・チエツ。また負けちまったんだぜ」
少し悔しそうな顔をしているように見えた。
悪いことをしたかね。

——そのまま魔理沙は弾幕に包まれた。

「魔理沙の状態は？」

「今は眠っているわ。しばらく起こさない方がいいわね」

客室から出てきた咲夜からそう告げられる。

ちよつと張り切りすぎたか・・・

「まあ怪我もしてないし問題はないわ」

「ああ、ありがとう」

「・・・しかしすごいわね。砲撃と同時にスキマも出せたなんて・・・」

先程の攻防を分析するかにようにパチュリーが話している。

説明するところだ。

俺はまず、魔理沙の攻撃を打ち消すため全力でスペルを放ち、その全力のスペルを、魔理沙の開いておいたスキマで飲み込む。

・・・直接、魔理沙の攻撃を飲み込めばよかったって言うのは後から気付きました。

本当に俺は戦いに向いているのかと。

「ありがとう。本も大図書館も無事ですんだわ」

「仕事です。じゃああとは任せます」

そう言っただけ俺はその部屋を後にする。

「ええ、気を付けてね」

これが俺の日常。

人にとってはこんなもの日常ではないだろう。
だが、この生活こそが今の俺の大好きな日々。

いつまでも続く平穏を願おう。この日常が壊れないように。
いつまでも俺は戦おう。この世界を汚さないように。
そう誓おう。

これが司貴の、幻想郷に対する思いだった。

—— ちなみにこの後、フランの体当たりにより数時間ほど
気絶していたことは秘密である。

幻想郷での日常（後書き）

第29話、そろそろ日常編に困り出したズエア。
まあ大丈夫ですけどね。

前書きに書いた通りに三連休は頑張りたい。

初日はカード大会で家にいないから後の二日で書きだめしたいね。

・・・フラグな気がしてならん。
ではノシ

報酬と異変

手入れの行き届いた庭。
綺麗に掃除された建物。
そして閉鎖された空間。

司貴は今、紫の住んでいるマヨヒガに來ている。

「いつもながら、ここに来るのは緊張するね」

「ならそのそぶりを見せなさいよ」

スキマから出てきながら紫さんにつっこまれた。

客人相手にその現れかたもどうなんだ？

「生憎、一タリアクションしていたら疲れるだけと理解したので」
「そう。その方がいいわ。・・・それで今日呼んだのは報酬の件なのだけど」

「報酬？もう受け取ったはずですが」

ここでの報酬は、以前、博麗神社での戦い。

要するに訓練なのだが、その依頼の報酬である。

「追加分よ。あの一件が予定以上の成果を上げてたから」

「どんな？」

「霊夢がね、誰にもばれないように修業してるのよ」

「なん・・・だと・・・？」

あの才能だけで戦ってきたといっていた霊夢が・・・修業？

「それは本当なんですか？」

「ええ。直接見て確認したわ。」

「それはすごい」

「といっても、正確には早苗に影響されたみたいなのだけだね」

「・・・プライド、か」

元々、博麗の巫女は妖怪と人間のパワーバランスを保つための存在。

それが外の世界から来た同業者に劣っていては示しがない。

「そうですか。まあ、もらえる物は貰っておくのですが」

「ですが？」

「この異常気象について詳しく」

もう一度今いる場所の確認をしておこう。

俺たちが今いるのはマヨヒガ。

幻想郷とも外の世界とも異なる、いわば第三の世界。

外の世界とは違い、雲など元々ないようなもの。

雨など降るはずがないのだが・・・

「私がいるだけでずっと雨が降ってるのよねえ」

「何と迷惑な」

雲は空を見上げてもない。しかしここには今、雨が降っているのだ。

「これは、異変なんですかね？」

「まあ、そうなるわね。この異常気象は幻想郷全体で起きているみたいだしね。」

もしかして知らなかったの？」

「いいえ。ただ面倒だからという理由で、さつさと無力化してしまったもので。あの現象」

「・・・私でも大分力を使うから、放っているのに・・・。規格外というのは恐ろしいものね」

規格外、か。間違ってはいないんだが、だったら俺も勝てない早苗は何なのかと問いたくなってくる。あれ？目から汗が・・・

「何で泣いてるのよ・・・」

「自分の唯一勝てない相手のことを思うと・・・つい・・・」
「やべえ、マジ泣きしそうだ。」

話を変えよう。

「まあ、異変は霊夢がそのうち解決するでしょうし、置いておきましよう。」

それで報酬とは？

「その話ね。あなたにプレゼントしようと思っていたのよ」
「？」

「実はね、見つけたのよ。もう一つ」
「もう一つ？」

全く要領を得ない説明の仕方である。
それを楽しむのが紫クオリティ。

「マヨヒガと同じく、スキマの中にある土地を、ね」
「・・・は？」

「ついでにそこに家を建ててみたのよ。だからそれをア・ゲ・ル？」
「自重しろ駄賢者。そして土の中で永遠の冬眠ライフを楽しめ」
「ひどいっ！！？良い報酬じゃない！？」

いきなり家を渡されても相手は困るということを理解していないんだろうか・・・

というか報酬が家ってどういうことよ？

「・・・いいです。ありがたく受け取らせていただきます」

「さすが司貴ね！それでいいのよそれで」

「と言つても普段から使うことはないでしょうが」

「いいのよ。あなたの持ち物だもの。自由に使ってくれてかまわないわ」

「じゃあもう行きます。霊夢に飯作らないといけないんで・・・」

前の戦いのあと奴隷同然の扱いになりますた　オワタ＼（＾o＾）

/

「律儀ねえ・・・無視してしまえばいいのに」

「人の性というものですよ。それでは」

いつも通りスキマに入り移動する。

尤も、ここにはスキマ移動ができないと出入り自体通常できないのだが。

「――紫さま」

「なあに？藍」

司貴の立ち去った後のマヨヒガでは、その家の主と従者が話をしていた。

「あの家を彼に渡した本当の目的はなんだったのでしょうか？特に利益があるようにも思えません」が・・・」

「・・・妖怪の山の戦力が、少しでも減ればと思ったのよ。でもそれはオマケ。

本当に心から感謝してるのよ。彼には」

「そうですか。紫さまがそうおっしゃるのなら、私が言うことは何もありません。

では私は仕事に戻ります」

頼むわよ、その人声をかけた時には既に、藍は部屋からいなくなっていた。

「さて、今回の異変。誰が解決に動くかしらね・・・。
見させてもらっわよ、霊夢。あなたの修業の成果を」

「・・・ックシ！」

「風邪か、霊夢？」

「違うわよ。どこかの妖怪が噂しているのよ。きっと」

「ニユッ 邪魔するよつと」

博麗神社到着なう。

いつも思うが移動が全てキンクリだな。この小説。

「司貴、遅かったじゃない」

「悪いな、ちよいと野暮用で」

「腹が減ったんだぜ！早く昼飯にしてほしいんだぜ！！」

「司貴さんのご飯……。そういえば久しぶりですね」

「オイマテ外野二人」

俺が料理を作りにきた相手は霊夢、のはずだ。

何故早苗と魔理沙までいるんだ？

「「司貴^{さん}の料理が食べられると聞いて」」

「ずいぶん勝手な要望だな……。いいのか霊夢？」

「いいわよ、材料もこの人数分くらいならあるわ」

「やれやれ、主賓がそう言うなら作りますかね」

「任せただぜ！」

働いていただきたい、と思ったが言うのはやめておこつ。

言っても手伝わないのは分かっているんだ。

「さあ、少し待っていてくれ」

「「はい」」」

久しぶりの料理か、腕が鳴るな。

三人の口に合う物が作れるといいが……

そんなことを思いながら、司貴は神社の奥の調理場に入って行った。

「総領嬢様、本当にいいのですか？」

「いいのよ。ここまで下準備しておいて、今更やめるつもりなんて毛頭ないわ」

「そうですか・・・」

「さあ、はじめるわよ」

——宣戦布告よ。

青い髪の少女が、博麗神社のはるか上空でつぶやいた。

報酬と異変（後書き）

ワラキアの出番が無くなったため、モチベが妙に下がっております。

ようやくと書き終わったズエア。

さっさと次の話も更新せねば・・・

異変とは日常の延長線上にあるもので（前書き）

（食事シーンはワラキア先生がカットして下さいました。カットカ
ットカットオ！）

司貴の能力の補足。

自分自身がコピーした能力に対する知覚能力は上昇しています。

例：咲夜の時止め

何故か説明抜けてた。すまない。

異変とは日常の延長線上にあるもので

「「「ごちそうさまでした」」」

「はい、お粗末さまでした」

「お酒のつまみみたいな料理は食べたことあったけど、普通の料理も美味しかったわ」

「あゝ、それは俺と早苗が家事をやってたからかな？作ってるうちに慣れたし」

「「・・・ヘー、ソレハスゴイネー（一人暮らしの二人）」」

「お前ら料理出来ないのかよ・・・」

「出来ないんじゃないわ、やらないのよ」

「あれ、永遠亭の姫が見えてくる・・・」

失礼？今更そんなことを思う気にもなりません。

「まあいいか。早苗、食器を洗ってしまうから運んでくれ」

「わかりました」

昼食を終え、二人が席を立った時だった。

（・・・殺気！？妖怪か！！？）

（でもどこから！？）

人一倍勘のいい霊夢と能力の恩恵で感覚の鋭い司貴が、自分達に向けて放たれた殺気に気付く。

（それにこの違和感……。まるで大地に影響するような感覚……。まさか！？）

司貴の写しとった諏訪子の《坤を創造する程度の能力》。その能力が危険を司貴に伝える。

その司貴の能力があつたからこそ、彼には危険が分かった。・・・
だが――

「みんな！神社から離れろ！！」

「「「・・・え？」」」

《ゴゴゴゴゴゴ！！！！》

「地震！！？」

「いいから飛べ！この地震の強さ・・・。神社が崩れるぞ！！！！」
司貴が叫び、三人が飛び立つや否や、

博麗神社は無惨にも崩れ落ちた。

「何よ……。何でこんなことになるのよ……」

「霊夢さん……」

「返してよ……。私の神社を……」

「霊夢……」

「まずいな……」

博麗神社は今までもずっと霊夢の過ごしてきた大切な場所であり、博麗の巫女の誇りと言ってもいい神社。

それが目の前で壊されたとなると……

きついだろうな……

「霊夢を狙ったのか……。若しくは宣戦布告か……」

「どうということなんだ？ 今のは災害なんだぜ？」

「違う。災害なんかじゃない。あれは人為的な物だった……！」
そう。それに俺と霊夢は気づいていた。

——気づいていたのに防げなかったんだ……！

「あの地震の起きる前、僅かだが殺気を感じられたんだ。多分そいつが……」

「私は何も気づきませんでした……」

神社を失ったことで心の折れかけている霊夢を宥めていた早苗。どうやら、霊夢は上の空みたいだ。

「司貴が言うなら多分そうなんだろうぜ」

「ああ……。間違いなく犯人がいる。だったら」

——こいつは異変で確定だ。

このタイミングの良さ。まさか二つの異変が重なる確率なんてとても低い。だったら。

「今、幻想郷に起きている異常気象と今回の地震。二つまとめて一つの異変、そう見ることができる」

「そこまでわかったなら犯人も……」

「それはわからない。能力的に該当する奴を俺は知らない。魔理沙はどうだ？」

俺達が幻想郷に来る前から異変解決に貢献している魔理沙なら何か知っているかもしれない。

「悪いが、私も知らないぜ。今まで異変に関わった奴にそんな能力者はいない」

「そうか……」

手掛かりはほぼ零。

なら、しらみつぶしに探すしかない。

だが、本当の問題は……？

「靈夢。お前はどつするんだ？」

「・・・」

「今回の異変。お前は動くのかと聞いているんだ」

「司貴！？まさか今の靈夢に行かせる気か！！？」

魔理沙が非難の声をあげて食いかかってくる。

そうだろうな、今の俺は人として最低な事を言っている。

心の折れてしまった少女に戦いを強要しているのだ。

確かに最低かもしれない。

でも俺は確かめたい。

——靈夢の心は本当に折れてしまったのかを。

「動かないならそれでもいい。俺が行くだけだ」

「司貴さんが？」

「俺だつて切れてんだよ。目の前で友人の大切な物ぶち壊されて。

その場に居て何もできなかったのは俺も同じなんだよ！」

「司貴・・・」

「だからこそ聞いているんだ。ここまでやられて、靈夢はそこで終わるような奴だったか？」

「・・・！」

「こんだけ言われてまだ立てないのかよ！！！」

「・・・わね」

ああ、やっとか。

まったく、下手な演技過ぎたかね？
霊夢にしては随分火付きの悪い事だ。

・・・悪役も難しい。

「うるさいのよ！あんたはあ！！！」
《ズドン！！！！》

「ウボアー！！！！！」

「ちょ、霊夢やり過ぎなんだぜ！！」

「大丈夫ですか！！？」

「・・・一応」

殴られるとは思っていたが、鳩尾とは・・・。
やばい、立てない。

「まったく。好き勝手言ってくれたわね」

「そうでもないとおのままだったくせに・・・。」

「何か言った？」

「イエナニモ？ダカラテニモツタカードヲシマツテクダサイ」
「・・・ふん」

危ない、死ぬところだった。

霊夢を怒らせるのは非常時の最終手段だな。

「さて、元気になったところで。行くのか？」

「当然よ。弾幕で痛めつけた後、きつちり土下座でもさせてやるわ」
「だったら私も着いていくぞ」

「魔理沙、お前留守番だから。今回は早苗が霊夢と行ってくれ」
「え!？」

早苗は以外だったようだ。

まあ、このコンビだとどんな結果になるか見てみたいだけだが。

「なんで私は行っちゃだめなんだぜ!？」

「やってほしい事がある。主に神社の修復の手伝いとか」

「断らしてもらうぜ。私は勝手に・・・」

我の強い奴が集まっているものだ。

その分誘導しやすくもあるのだが。

「・・・後で代わり、と言っちゃなんだが、

弾幕ごつこの相手ぐらい用意してやるから（ボソッ）」

「・・・本当か？」

「本当だ。だから頼む」

「・・・わかったぜ」

弾幕ごつこが出きればお前はそれでいいんだな。

話が早くまとまって助かるんだが。

「本当に私が？」

「決まったなら早く行くわよ!」

「あ、待ってくださいよ!」

慌ただしい。というかもう行ったよ。

まあ、とにかくにも人員確保成功!

後は、紫さん達にお願いすれば神社の方はなんとかなるかな?

「さて、さつさと神社をどうにかして宴会の準備をするんだぜ！」

「・・・宴会はするのな」

「当然だぜ！」

「こっちも大仕事じゃないか。」

——そこに隠れているやつも含めてな。
さて、さっさと片付けますかね。
生憎と今日は加減できそうにないがな。

異変とは日常の延長線上にあるもので（後書き）

・・・自分の遅さに絶望した。

ちょっと先兵にぼこられてこようか、それとも極死食らってくるか。

まあ、それは置いといて申し訳ありませんでした。

実際のところ地震のいい擬音が思いつかなかったただけです。だらしない。

更新速度はかなりばらつくことになると思いますがご了承ください。
ではさようn（極死——七夜——！）ラストアークドライブフ
イニッシュ

事後処理と来客（前書き）

やあ（。 ㇏ ）

どうももともと遅い筆に下降補正がかかって、今度は一話がさらに短くなってしまった。

次回は戦闘はさむつもりだから、期待・・・してもらって大丈夫だろうか？

事後処理と来客

幻想郷というのは外の世界よりも適当なものが多い。

凝り固まった考え方が無いと言えは聞こえはいいが、何か起きた時の対応には、

一応、「博麗の巫女が解決するだろう」という、曖昧なものしかない。

故に最近では、多くの妖怪や人間が異変の解決に動いている。

その統一性のなさが、時に博麗の巫女に情報与えるきっかけとなるのだが・・・。

今回の場合は、いかんせん最初の目的地という物がなかった。

「さて、何処に行けばいいのかしらね・・・」

「異変について調べていそうな人を訪ねるといのは？」

「んゝ、いつも勘でなんとなくあたりをつけてたのよねゝ。今回は特に思い当たる節もないし・・・。そうね、まずは聞き込み調査よ」

「じゃあまずは・・・」

「紅魔館に行くわ。パチュリーなら何か知ってるかも」

「それじゃあ早速」

「出発よ！」

同時刻、二人だけ取り残された博麗神社にて

「彼女らの行く先に……。居た人たちに幸あらんことを……。

つて、祈ったところで無駄か」

「何言ってるんだぜ司貴」

「いや、被害者が増えませんように、と」

「諦めた方がいいって、多分」

「デスヨネー」

あの二人に襲われた人には、後で何か送っておこうか。

いつも通りとはいえ、何か可哀想過ぎる。

「とりあえずやることは山積み。この瓦礫の処理に、神社を立て直すための人材の確保。

それに……」

「それに？他に何かあったか？」

「それは……。もちろん異変解決への貢献だよ。」

——なあ、さっきからこつちのことを茂みに隠れて監視している

やつ。出て来いよ」

「な!？」

魔理沙はまだ気づいていなかったようだが、地震が引き起こされて神社が倒壊してから、こちらを見張っている奴がいる。もっとも気配をうまく消しているみたいだが。

「・・・いつから気付かれていたのでしょうか」

そこから出てきたのは、ひらひらした羽衣をまとった、青い髪的女性。

そして、物腰の落ち着いた、大人の女性といったところだろうか。かといって、どこかの賢者や月の頭脳のような胡散臭さがあるわけでもない。

「あなたが隠れたときから、でしょうか。俺から隠れるのだったら植物のいないところにどうぞ」

「なるほど。そのような能力があるのですか。・・・申し遅れました、私は永江衣玖、龍神様のお言葉を伝える竜宮の使いです。あなた方のことは知っていますよ。なかなか有名ですので」

「有名になつてるとは照れるんだぜ」

龍神・・・どこかで聞いたような・・・。すごく引かかるものが・・・。

「あなたがつい最近倒してしまわれた龍が、その龍神様ですわ」

「・・・あつ」

「・・・司貴。なんだその、あつて。嘘だよな？嘘だと言ってくれない!？」

「悪い。ホントだ」

「私の周りはどうしてまともな奴がいらないんだ・・・?」

仕方ないやん、神様だって知らなかったもの。

妙にいい所に住んでる龍だとは思ってたけど。

「龍神様は寛大な方なので、そのようなことは気にしてはおりません。」

今、私がこの場にいるのは別件です」

「じゃあ単刀直入に聞く。・・・あんたが異変の犯人か？」

「共犯者という意味でならその通りです。実行したのは別の方ですが」

「そうか・・・。なら、これからどうするべきか、わかってますよね？」

「異変の解決にはスペルカードでの決闘で、でしょう？」

「話が早くて助かる。という訳で魔理沙頑張つて」

「待てーい！？なんでその流れで私に回ってくるんだぜ！！？そこは司貴の出番だろ！！？」

「だって戦いたいとか言つてたし。2対1とか、この人に対してはやりたくないしね」

魔理沙は分からないと言つた顔で、衣久さんは想定内、顔色を変えることなくきいていた。

「？」

「・・・」

「だってそうだろ？何かを背負つたような目をした相手に2対1なんて真似は出来ないよ」

「・・・。だつたらなおさら司貴に任せるぜ。私にはわからなかったしな。正直、犯人だから倒すべきだとしか考えてなかったぜ」

「・・・いいのか？」

「ああ、私は誰か神社を直す人材を探してくるぜ」

「とりあえず紫さんから頼む、スキマは開くから。気付いてると思うがな」

「オーケイ、行ってくるぜ」

魔理沙は俺の開いたマヨヒガまで続くスキマに入って行った。

そしてやはりというべきか、

「やっぱ2対1じゃなくてよかった。この間に攻撃してくることできただろうに、」

それをしないような妖怪だとわかって、改めて思うよ」

「双方ともに利益が無いですもの。・・・さあ、始めましょうか」

「俺が勝つたら・・・。この異変を起こした理由、聞かせてもらえますか？」

「まあ、まるで私に勝てるかのような発言ですね。・・・いいでしょう。あなたが勝てばお教えします」

「じゃあ・・・」

俺はナイフを取り出し臨戦態勢をとり、彼女も構えを取る。

——始めよう、戦いは敗者が出ない限り、その狂った運命は止まることが出来ない。

願わくば、この戦いによって救われるものが出るようにと、俺は願う。

事後処理と来客（後書き）

ここで言うことじゃないかもしれないが、作者のもう一つの商品がブラックアウトしてしまうことになった。

プロットの段階で気付くべき致命的な欠陥を発見、どうしようもない。

とはいえ、せつかく2作作っていこうと意気込んで、結局1作に戻すのも

不完全燃焼なため、別のものを投稿しようと思います。というかる。

こんな自由すぎる作者で悪いね　って、七夜さん何を構えているんですかねえ…

人は切られたら死ぬ、って、グアアーーーー！！！！

強さよりも重要なこと（前書き）

修学旅行に明日から行くため、無茶苦茶な突貫工事。
故に短い。
悪いねニ

強さよりも重要なこと

「・・・戦わずに、というのは無理な話だから仕方無い、か」
できれば戦いたくないというのが本音。しかし、起こしてしまった
異変には責任が伴う。

「もともとそのようなつもりもありませんわ」

「やれやれ、敗軍の将は我が身を犠牲にすることでしか禊げない。
誰が言ったのやら、そんなこと」

「私は将なんて大層なものではないですよ？それに――」

――敗軍になるとは限りませんしね」

「・・・やっぱり、あなたも幻想郷の住人、ということですか」

「ふふふ。さあ、始めましょうか」

――この異変の最初を飾る序章曲を！

「よっ、と！」

「最近、幻想郷に来たばかりと聞きましたが……。弾幕にはもう慣れていられるようですね」

「慣れないと死んでしまったので！」

飛び交うのはスペルを伴わない通常の弾幕。二人共が手の探り合い。先に攻撃するのは……

「そろそろ仕掛けさせてもらいますよ！

—— 牢獄「崩壊の魔法陣」

司貴にとって、一番最初のスペル。

勘の良い者、所見では無い者たちには全く通じないこのスペルだが。

「このようなもの、私には通用しませんよ？」

衣玖はかつての霊夢たちと同じように、目の前の魔法陣を潜り抜ける。

だが、

「それこそ浅知恵だつての！」

既に上方には、司貴がナイフを構え、攻撃態勢に入っていた。

「そこまで理解してのこの選択ですよ。

—— 魚符「龍魚ドリル」

衣玖の腕が、羽衣と雷を纏ったドリルのような形状へと変化し、司貴のナイフを受け流す。

「さすがに通らないか……。ナイフを折られても困るから別の手段で行きますかね」

「どうぞ。受けきって見せますから」

「ではお言葉に甘えて——」

——葬符「崩壊への序曲」

斬撃から発生する弾幕。いうなれば飛ぶ斬撃。
それを衣玖は・・・

——羽衣「羽衣は時の如く」

その場から動くことなく、その身にまとう風によって受け流していく。

「どれほど強くても当たらなければ、ですよ」
「なるほど手ごわい」
この戦いは——

——長引くな。

S i d e 霊夢&早苗

「むきゅー」

「ちよつとやりすぎたかしら？でも勝ちも勝ちね。持つてる情報を教えてもらっわ」

「霊夢さんすごいですね・・・」

紅魔館にたどり着いた霊夢達は、結論から言っつていつも通りの方法で情報を聞き出していた。

「負けた以上仕方ないわね・・・。私が知っているのは、この気質を起こしている犯人のいる場所の、大方の予想くらいね」

「重要なことじゃない。早く教えてよ」

「気づいてないの？今、幻想郷中に起きている異常気象。そのどの場所でも同じ霊力が残っつていて、その霊力はある一か所を目指すように漂っつていることを」

「それはどこなんですか？」

「——空よ」

「「？」」

霊夢と早苗はまだ理解できていないようだったが、パチュリーはそのまま話を進める。

「妖怪の山のはるか上空。そこにその霊力は集まっているわ」

「妖怪の山の・・・」

「上空に・・・？」

つまるところ、司貴と早苗は、身近な所に居ながらも気づいていなかったのである。

S i d e 司 貴

戦いが始まって、もう何分経っただろうか？

圧倒的な力の持ち主と戦ったことは何度もある。

そして、今、目の前にいる敵はそれほどの力とはとても言えない。
なのに、今までのどの戦いよりも、一分一秒が長く感じる。

「——— なんていうかやり難いなこの戦い」

「そうでしょうか？ 私としては普通なのですが・・・」

「そりゃそうだろう。あなたにとってはいつも通りの戦いなんだろうから」

「では何がやりづらいので？」

小技の繰り出し合いをしながら、二人は掛け合いを続ける。

「油断、慢心。強い妖怪や神には、どうしてもそういったものがある。

なぜなら、力でかなうものも少ないし、大概の傷なんてあるようではないようなものだ。

強ければ強いほど、そういったものが生まれる。なのにあなたにはそれが無い。

それがやり難い」

「——それが私の戦い方故、でしょうか。戦いの流れを読み、最高の判断をするのに、そのようなものは邪魔なだけですもの」

「なるほど、分かりやすい説明どうも！」

その言葉を言い終わるかどうか分からない内に、司貴は再び切りかかる。

——司貴の、今までになかったタイプの敵との戦いは、もう少し長引きそうだ。

強さよりも重要なこと（後書き）

前書きに書いた通り、修学旅行なんだ。

つまり、金曜の夜までは100%更新はないんだ、済まない。

しかも、短すぎだろこれは・・・。

衣玖さん一話にまとめるつもりだったのにどうしてこうなった。

次回もいつになるか分からないのでご了承ください。

利子はトイチとなっております。(前書き)

サブタイ適当に考えてたらこんなになった。
すまんね。

利子はトイチとなっております。

霊夢たちが紅魔館を出て少しした後のこと。

まあ、本人たちは全くそこに用はなかった。

そこは通り道であって、目的地ではなかったから。

しかし悲しいかな、ここを通るのにはいつも・・・

「ようこそ、妖怪の山へ」

天狗のお迎えがあるのです。

「文、悪いけど通してもらえるかしら」

「それはできませんね。こちらにもいろいろ事情がありまして。

守矢の巫女のみなら問題はないですが、あなたもとなると素通りは無理です」

「そこを何とかしてもらえませんか？ 私たちは異変の解決のため天界に向かいたいです！」

早苗は、そこを何とか通してもらえるように説得する。

なんにせよこのままでは進まないのだから、ここを通るしかない。

「・・・そちらの事情は分かりました。仕方ないですね・・・私だつてこの異変には迷惑しているんです」

気質の影響か、今の天気は「風雨」と言ったところ。

やれやれ、といったように文は前へ出る射命丸、そして。

「——どちらからでもいいです。さあ、手加減してあげるからか
かってきなさい！」

第2戦、射命丸戦開幕。

もうどれだけの弾幕を放つただろうか。

司貴は依然として変わらない戦況に疲れを覚えていた。

「どうされました？まだ私には余裕がありますよ？」

「本当、厄介な奴だよあなたって人は・・・」

慣れない長期戦。

そもそも、自分の能力の応用性の高さによって、速攻で相手を沈めてきた司貴。

それを今、軽々とかわされてしまっているのだ。

消耗も激しいのは無理もない。

「龍神様を倒したのは偶然だったのでしょうか？出し惜しみをしているのならどうぞ、本気を出して下さい」

「生憎と、これが本気なんでね！」

何度弾かれようと、司貴はナイフで切りかかる。

ただひたすらにチャンスを待つて。

だが、油断しているのも何でもなく、ただ正直な見解を述べる衣玖。

その衣玖に対してチャンスなど無い。

ただひたすらに、まるで詰将棋のように一手、また一手と体力を削られていく。

「これなら総領娘様のところに加勢に行ける可能性も無くはないですね。予想はしていませんでしたが・・・」

そのまま自らの間合いを取る衣玖。

そして、戦いの終わりを告げる最後のスペルを唱える。

「悪いですが、ここで決めさせてもらうことにします・・・！」

——龍魚「龍宮の使い遊泳弾」

それは、例えるならば浦島太郎に出てくる竜宮城を思わせるような光景。

光り輝く魚のような弾幕が、彼女の周りを漂っていた直後、眼前の敵へと襲いかかった。

「これで、終わりですね」

勝利を確信する衣玖。

彼女の分析は間違いなく正しい。

既に着弾までわずか2秒といったところだった。

直撃をすれば、いかに司貴でも体は人間。
倒れることは確実だろう。
そしてかわせる状況でもない。

「・・・仕方無い、か」

所変わって、霊夢たちの立ち去った後の紅魔館。

あの二人が来たことと気質による被害以外においては、特に日常と変わることもなくすごしていた。

「ふう、これで掃除も終わりね。あとは夕食の仕込みと・・・」
ここの使用人である咲夜もまた、普段通りの生活をしていた。

「全く忙しいわね。たまには美鈴にも手伝わせようかしら。どうせまた寝てるんでしょうし・・・」

そうして、門の方を見るかのようにして窓の外を見ると、一つ咲夜は違和感を覚えた。

すべての者は動くことをやめ、音は消え、まるで生きているものが自分だけかのような錯覚。

本人としては見慣れている光景だろうが・・・。

今、それが起きている原因を理解するのには一瞬だけ間があった。

「まったく・・・。人から何か借りる時には一言いうべきね、司貴」

「どうなってるんですか・・・？」

場所は戻って博麗神社。

先程の攻撃で勝敗は決した、かと思われた。
だが・・・

「・・・すまないな。こんな反則で」

攻撃を食らい、少なくとも重症、悪ければ即退場と行っているダメ
ージを追っているはずの司貴。

だがどうということだろうか。

彼は無傷で、それも衣玖の背後を取っているのだから――

「っ！まだです！何をしたのか分かりませんがそんなことで・・・」

――幻世「ザ・ワールド」――時よ止まれ。

「すまないな。これは俺の奥の手だ。・・・まさか使われるなんて
思ってもいなかったけどな」

咲夜有能力、時間を操る程度有能力

司貴は、基本的に遭った人すべての能力を写し取るようにしている。
もちろん、フランや幽々子といった危険な能力もあるし、写し取っ
たものすべてを普段から扱う訳ではない。

衣玖は、冷静に戦局を分析していた。

だが、印象付けられた能力が悪かった。

最初に植物を扱うところを確認し、それを司貴の能力だと勘違いし

てしまっていた。

龍神様からでも、話を聞いていれば違ったのだろうか……。

とにかくこの場において、彼女は司貴という存在を過小評価してしまっていたのだ。

「咲夜みたいにナイフではないが……。ま、いいだろ」

ナイフの代わりに並んだ司貴の弾幕は、すでに衣玖の姿をとらえ――

「――そして時は動き出す。――悪いな咲夜、やっぱりお前の方が強い気がする」
今この場に居らぬ友人の名を口にし、司貴は、時の停止の終了を告げる。

「負けな――、え？」
ドカン！

弾幕の爆発するような音がし、密集した弾幕の中からは、傷だらけになった衣玖が地上へと落ちて行った。

「・・・ん。・・・全身が痛いですね」

「まだ動かないでくれ、傷をふさいでいる最中なんだ」

「私、一応敵なんですが・・・」

「どうでもいい。それに、起きてもらわないと話が出来ないんでね」

「・・・まあいいでしょう。お話しします。」

——この異変の主犯と、その目的を——」

利子はトイチとなっております。（後書き）

カット、何が何でもカット。

衣玖さんの口から読者様にはほんの断片しか教えさせるつもりはな
いです。

なのでほぼ全面カット。次回の最初にそのちよつとが出るだけです。
主犯の登場を待とうね！

そして次回は行く手を阻む射命丸と早苗の戦い。

同じく風を扱う者同士、どのような戦いになるのか？

次回に続く！

ちなみにサブタイの意味は司貴の能力借りの意味です。

ちなみに信託「神降ろしの儀」は、普段から使うことはないと思
います。

少なくとも幻想郷の大御所クラス相手以外には……。たぶん使わ
ないですね。

風と風

「・・・と、まあこれが全容といったところでしょうか。まあ、他意がないわけでもありませんが」

「そんな事が・・・」

戦いの終わった直後の博麗神社。

魔理沙がなぜ帰ってこないのかということに気付いたのもさっきだが、

それよりも重大な事実が判明していた。

「あの地震にはそんな意味が・・・。まったく、難儀なものだね」
「・・・なんです」

「ん？」

小声で衣玖さんが何か言っただけだけど・・・。
よく聞き取れなかった。

「・・・あの人は我が儘なんです。いつも自分勝手に、自分がいつも正しいと思つて、自分が決めたことは曲げなくて・・・」

「でも、優しい。・・・でしょう？」

その言葉にうなずく衣玖。

「・・・普段は自分のための我が儘なのに、何かあったらすぐ人のこと。」

もつと自分のことを省みてほしいくらいです」

「苦労してるんですね」

「・・・でも、ああいう人だから私はあの人によく付き添っているんですけどね」

「そうですか・・・」

ちよつと嬉しそうにほほ笑むと、スツと立ち上がる衣玖。

まだ治療は終わっていないんだが・・・。

「どこへ？」

「あの二人の巫女のところへ。他の天人たちを巻き込まれても困ります」

「なるほど。なら、お願いします」

まあ、妖怪とか、地上の人たちはすでに被害を受けているんだろうが。

天神の方たちだけでも被害が減ることを祈る。

「ではこれで」

「ああ、また後で（・）」

あえて含みを持たせた形で行って別れると、司貴はスキマを開いた。

「もう出てきてもいいですよ、紫さん」

「お疲れ様。まああなたは休んでなさい」

「それはいいんですが・・・。その脇に抱えてるのは・・・」

紫さんが出てきたときに抱えていたのは、どこかで見たことのある、
というか、ついさっき別れたばかりの魔理沙だった。

「ああ、いきなりマヨヒガに侵入してきたから、つい打ち落としたり
やった？」

「うわぁ・・・」

すまん、魔理沙。いきなりお前をマヨヒガに送るのは間違いだった。
・・・。

俺のせいじゃないと思いたい。一応加害者のせいだと主張しておく。

「まあ気絶してるだけだから大丈夫よ。それと、藍に萃香と河童を
ここに呼ばせているわ。」

この神社の修復なら、技術者がほしいし・・・。神社の設計図も彼

らに頼むのがてつとり早いでしょうし。萃香は力仕事でもね」

・・・最初に建てた時はどうしたんだろうか。

まあ、関係ないか。

「まあ、神社の修復はこちらに任せていなさい。もう休んで・・・

」

「そういう訳にも、いかないんですよね。これが。

・・・少し休んだらまた出ますよ」

「何処へ行くの？ 異変の解決はあの二人に任せるつもりだったのじゃないのかしら？」

まあ、最初はそうだったんだけどね。

でも、まあ。

「なんとなく、最後まで見届けなくなっちゃいました」

こんなことまで起こしてくれた、お人好しな天人様の戦いをね。

「ふむ、噂には聞いていましたが、守矢の巫女も中々やるものですね。

こんど、他の3人も合わせて取材に伺ってもよろしいですかね」

「・・・今の状況で言うなんて。結構手厳しい方ですね。射命丸さんは」

「文、と呼んでもらっても構いませんよ？射命丸では長いので聞いていただけであれば、それなりに穏やかな会話だろうか。

戦いの会話であることには変わらないのだが。

だが、早苗と射命丸の戦いは、圧倒的に射命丸の方が優勢だった。

「いやゝ。びっくりしてますよ？現人神とはいえ基本は人ですからね。

それで私の速度に対応できる方がどうかしてますよ」

「対応できてませんよ。反応して打ち返して、それを完全に打ち返されて。」

本当に手抜きですか？」

「あはゝ。実は本気ちよつと出したりもしてるんですよ。あなたのところのあの司貴とかいう人間には散々な目にあわされちゃってますね。ほとんど八つ当たりですけど・・・」

「八つ当たりですか・・・」

ちよつとだけ、司貴さんを恨みます。

でも、そんなことを考えてる余裕なんてない。

「さて、まだ1対1でやるつもりなんですか？別に2対1でもいいんですよ？」

「結構です。・・・諦めるつもりはないですからね」

「強情ですね・・・。霊夢さんからも何か言ってあげたらどうですか？」

「私は手出ししないわよ。早苗が戦いたいって言うてるんだし」
そう。私は今、1対1で文さんと戦っている。

やはり強い。

手加減もそこまでしていない上に、天狗は上位の妖怪。
それに・・・

「そうは言いますが・・・。私には彼女の風は通用しませんよ？」

「・・・」

私の力は奇跡を操る力。

しかしその力を発現させる時、私は風という形を使ってその力を使用している。

だけど、文さんも風を扱う。

それももつと強大な。

状況は絶望的。でも私は諦めない。
だって――

「それでも私は、早苗を信じるわ！」
私のことを信じてくれる人に支えられているから！

風と風（後書き）

ワラキア「（´・？ω？、）ノやあ」

作「やあ、久しぶりだな」

ワラキア「本編の扱いに泣いていたのだ」

作「端からあの予定ですし」

ワラキア「しかもつと演出を・・・

その前に孤立した1キャラとしての出演をだな・・・」

作「無理。スペルでの再登場があることでも祈っててくれ」

ワラキア「（´・ω・、）」

最近ワラキ一のいない後書きだったことに気づきこんな後書き。
まあワラキ一要素ないけどね！

後、緋想天編が終わらない。というかラストバトルに入らない。

さて、子の射命丸戦。

奇跡は起きるのか、起こすのか？

はたまたこれは奇跡のうちにも入らないのか？

次回決着・・・つくといいな・・・（オイ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1462v/>

東方信仰記

2011年11月21日15時43分発行